

丈人力のススメ 全

「人生九〇年時代」をこう生きる

堀内 正範 著 元『知恵蔵』編集長

目次

第一章 新時代

一 現役シニアがもつ潜在力を活かす 2

二 長寿を楽しむ三つの秘訣 9

第二章 世相

一 「現役人生六五年」をすこし終えて 16

二 三人三様の高齢期の暮らしぶりをみる 24

第三章 家族

一 「MY・・・」がないマイホーム 33

二 「家庭内リストラ」による存在感 39

三 暮らしの知恵を次世代に伝える 44

第四章 モノ・職場

一 「MADE IN JAPAN」の時代 50

二 途上国産の中級品に囲まれて 53

三 新日本型マネジメント 61

第五章 暮らしの和風回帰

一 「四季と特性」が息づく地域に 72

二 品位のある和風の暮らしを創出 81

第六章 高齢期・居場所

一 「エイジング・イン・プレイス」 92

二 「世代間交流」の生き生きした現場 101

三 「地域高齢人材」の養成 111

四 中心街は「暮らしの情報源」 116

第七章 高齢者

一 ひとりの「住民」として 122

二 ひとりの「市民」として 133

三 ひとりの「国民」として 142

四 ひとりの「国際人」として 153

第八章 「人生九〇年時代」をこう生きる

一 成長期・成熟期・結実期それぞれの生き方 168

第一章 新時代

一 現役シニアがもつ潜在力を活かす

「丈人」とは

*「大丈夫！」が内に包みもつ核芯

率直な美感として「老人」と呼ばれて収まりがいい人はそのままでもいい。が、みずから高齢者と認めながらも、いま通用している意味合いで「老人」と呼ばれると、なんととはなしに違和感がある、呼ばれるにはまだ間がある、という人は多いだろう。そんなとき「丈人」と呼んでみる。聞き慣れないことばだから、はじめはこちらにも違和感がある。が、使い慣れるうちに「老人」よりはこちらのほうが収まりがよくなる。なぜとって、みなさんを励ますことばだからである。

「老人」と「丈人」というふたつの漢語の意味合いを援用して、「老人」であるとともに「丈人」であること、「老

人」であるよりも「丈人」であること。その多重性を意識して使い分けることになる。

よく使う「老人」というひとつのことばに対して、ひとりの人の感覚の問題であるとともに高齢者みんなにも同様の違和の感覚が起きているのは、社会のしくみに原因があるからで、社会の高齢化の変化に応じた対策に遅延が生じているからだ。

対策というのはいまでもなく「高齢社会対策」。

個人に対する介護・医療・福祉などの「高齢者対策」ではなく、意識改革や暮らしの居場所や社会のしくみなどへの対策である。

二〇一二年九月に、学者と内閣官僚の検討を経て、一年ぶりに「高齢社会対策大綱」の改訂がおこなわれた。一年間の検討の結果を野田内閣が閣議決定したもののだが、その間、国会は「社会保障」の財源となる「消費税増税」のおカネのほうの議論に熱中していたが、肝心の高齢社会のありようについては関心が薄かったのである。

「人生六五年時代」から「人生九〇年時代」への高齢者意識の転換と社会参加による社会構造の変革という重要な指摘がなされている。

この「人生六五年」から「人生九〇年」への一足飛びの「二五年」の唐突な変更のなかに、対策の遅延を見ないわけにはいかない。

本来なら「人生七〇年」、「人生八〇年」、「人生八五年」などという途中の段階での「高齢社会対策」がありえたわけで、ここに学者と内閣官僚にはわかっていたが、歴代内閣には理解がなかったことの明確な証をみる。

そしてその無理解と遅延はなおも継続しており、そのしわ寄せを受けることになるのは、ほかならぬ高齢者自身なのである。

ちよつと思いきり起こしていただきたいが、あの「三・一一東日本大震災」の被災地で、とっさの励ましのことばとして飛び交っていたのは「頑張ろう！」だった。

「頑張ろう」はその後、「復興へ頑張ろうみやぎ」(宮城

県)や「がんばろう東北」(東北楽天ゴールデンイーグルス)、「がんばっぺ福島」や「がんばろう俺！」まで復興活動のキャッチフレーズになっている。

それにもうひとつ、「大丈夫？」に応じる「大丈夫！」もまた現場でお互いの心を支えあつたのだった。

「大丈夫」のなかには、震災地での美智子妃の「よく生きていてくださいました」とともに「大丈夫」という励ましのことばも記録されている。大きい声が必要としなくても、静かに心の深みに伝わる励ましのことばとして。

この「大丈夫」の「大」を横に置いて、男性をいう「丈夫」のうちの「夫」から「を」はずしてみる。芯にあるのは「丈人」である。

「大丈夫！」といったときに、心の内に包みもつ気概が「丈人」のものである。「頑張ろう！」が外向きなのに対して、「大丈夫！」はどちらかといえ、内にある力を呼びさまし励ましてくれることばといえよう。

「丈人力」とは

*「自己目標」を実現させる強い生命力

本稿での「丈人」のもつ意味合いは、同様に活力のある高齢者をいう「シニア」「アクティブ・シニア」「現役シニア」「アクティブ・アダルト」「スマート・シニア」「支える高齢者」「健丈な高年者」「スーパー老人」「新人」・・・など、さまざまな言い方で表現されている。

そしてそのひとつとして「丈人」が、漢字の古語同士として「老人」と対比のうえで納得されるものと思う。

だれもが高齢期になれば、青少年期・中期の長い期間をかけて積み上げてきた専門知識や高いレベルの技術やほどほどの資産を持って暮らしている。この「知識・技術・資産」が高齢者の三本の矢といえるだろう。

その能力を、自分と高齢者のためにとともに、青少年や中年など後人みんなのためにも活かしたい。

元氣な高齢者なら自然にそう思う。そしてそうしよう

とすることで、体内からふつふつと力が湧いて出る。

決めた自己目標をどこまでも発展・熟達・深化させようとして、体内からふつふつと湧いて出る強い生活力あるいは生命力が本稿の「丈人力」である。だから日ごろ気づかないだけで、高齢期にいるだれもが保持している潜在力といえよう。

「団塊の世代」を含む昭和生まれの高齢者「昭和丈人」層がもつ膨大な潜在力を発揮することによって、史上初の「日本型高齢社会」が達成されることになる。

とって、「老人」を支えられる高齢弱者に限定する意図も内容も持っていない。「老人クラブ」や「敬老の日」の意味合いをこれまでどおりに理解し納得した上で、重ねて新たな意味合いをもって用いられる。

この国の「高齢社会対策」が遅延したために、「老人」ということばが本来もっていた「敬老尊賢」とか「老練」「老師」といった意味合いを失ってきた。それをフォローしすることにもなるのである。

「老人力」と「丈人力」

*「がんばらない」と「がんばる」と

世紀をまたいだせいはずいぶん遠い記憶のように思えるが、働きづめに働いてきて、以後をどう暮らすかに思い悩んでいた高齢者を慰労してくれたことばがあった。

「老人力」(建築家の藤森照信さんと画家の赤瀬川原平さんによる命名)である。

先の大戦後の復興と成長と繁栄を成し遂げて、「やれやれ、よくぞここまで」とためいきまじりに高齢期を迎えようとしていた人びとを、「日本列島総不況」(経企庁長官だった堺屋太一さんのことば)が襲ったのは前世紀末のころ、およそ一〇年ほど前のことである。

人生の晩期を迎えて、世情に合わせて自分の姿をすなおに見極めながら、がんばりすぎずに巧みにクールダウンしてゆく自己認識の能力を「老人力」と呼んだ同時代

人のことばに納得し、多くの高齢者はみずからの判断で体を休め、疲れを癒した。多くの人が納得することで、「老人力」は流行語になった。

もちろん今でも高齢期になって「がんばらない」ことは必要だが、おのずから表出される頑張りや人びとを感動させるものである。八〇歳の三浦雄一郎さんが推奨するように、健康を保ちながら、人生にわくわくするような夢があり、目的があれば、本稿でいう「丈人力」はおのずと湧いて出るものなのである。

世紀を越えていま、高齢者が「潜在力」(丈人力)を發揮して新しい「歴史をつくる」時代にはいつている。

歴史をつくる「昭和丈人」層

*「四人に一人」に達した高齢者が体現

この項に始まりこの項で終わるといつていいほど重要な項目が、この「昭和丈人」である。この項にたどりつ

いてくれたみなさんに感謝したい。

なぜとって、史上に新たな「人生九〇年時代」の「日本型長寿社会」を体現しているわたし自身のことであり、この国にこれまでなかった「モノ・居場所・しくみ」をこしらえながら暮らしている三〇〇〇万人の同輩のことであり、奇しくも昭和に生まれて新世紀に高齢者としてめぐりあわせている仲間同士のことだからである。

そのありようとして、あまり声高に呼びかけないから知られることもない。たとえばサッカーのサポーターのように、ひとつの目的でひとつところに多数で出会う「衆志成城」といった仲間づくりではなく、各地各界で、小さな水玉模様の重なりのように、一つひとつが地味に着実に生活圏の課題と対処しつつ活動している「衆口一詞」の立場にあるからである。だれかに知られることよりも、それぞれの場での根つきが優先する。

「人生九〇年時代」を意識して日々を過ごす長命現役高齢者（丈人）」として、これまでの「人生六五年時代」の

余生を過ごす高齢者（老人）」とは異なった生き方が展開される。二〇一三年に八〇歳でエベレスト登頂をはたした三浦雄一郎さんは、「アンチ・エイジング」に努めて六〇歳代のからだを維持し、日々負荷を身にして歩いて行動力に怠りなく、そして心躍る夢を持ちつづけている。「昭和丈人」のモデルのような人である。

この「からだ」と「こころざし」と「ふるまい」の三つをバランスよく整えることが、長寿のための秘訣なのである。そしてその「人生の夢」を支えつづける力が、本稿がここでいう「丈人力」であり、夢が大きければそれだけ大きく発揮される潜在力なのである。

前世紀の「世界大戦」の戦禍を克服して得た平和期を、ともに享受しつつ地域・職域の仲間とともに一日でも長く健丈のうちに過ごす。これがそのまま新次元の「高齢社会」の創出となり、国際的な「平和の証」としての「日本型長寿社会」の達成となる。そしてこれがそのまま次世代のための資産となる。

「さわやか福祉財団」の堀田力理事長に二〇一三年一月にお会いする機会があったが、二〇年間のボランティア活動でなお未達成なのがサラリーマン定年者の地域への社会参加であるという。いまその達成への時期を迎えて、新たな「しくみづくり」にとりかかっているという。

どこまで重なるかはわからないが、それを支える個人の立場について、みなさんと確認しておきたい。

個人の立場としては、自分が高齢期を過ごす地域の再生・活性化に人生を重ねる社会参加活動となる。それによる地域（国）の平和を守る意識の醸成は、安倍総理の国防軍強化に対峙して、「歴史に学びつつ新次元の歴史をつくる」事業として表現される。

こういう地域（国）を守る国民運動なら、「歴史に学ばずに次の戦争への芽」として外国からとやかくいわれることはない。かつて若い日に岸首相に「安保反対」をつきつけた人びとにとっては、この運動への参加は、その後の人生で得た成果をかけて、衣装を替えて登場した安

倍首相の軍国化政策と対峙する、人生二度目の史的役割なのである。

時を隔てて「平和を自分の手でかちとる」歴史的な国民運動の渦中にいることを確認しつつ、先人が命をかけて灯した「平和への心火」である「平和憲法」を護持し、次の世代に引き継ぐこと。これは「草の根」の運動を支えてきた「昭和丈人」である者の歴史（人類史）への貢献となる。

それを体現している「高齢期人生」であることをみなさんとともに誇りとしたい。

「余生」でない「長命現役」人生

*国際モラルの「百歳社会」をめざす

「人生九〇年（六五十二年）時代」の第三期の現役ステージ二五年を、「支える側の高齢者」として過ごす。そうしてはじめて、われわれの活動を内外の後人は敬意を

もって見守るようになる。

「NPO高齡社会をよくする女性の会」の樋口恵子理事長は、初代として「人生二〇〇年社会」への到達を見据えている。一〇年を差し引いて「人生九〇年」としたのは男性型と評しつつ、

「いまわたくしたちは、「人生二〇〇年社会」へと、人類の歴史のなかで初めての長寿を普遍的に獲得した社会を生きる。そしてそれにのっとった地域であろうと国であろうと、生きる主人公は人間であります。その人間の幸せのために、わたくしたちは初代として今日も一歩一歩努力をしているのだと思うと、「なかなかいい時に生まれちゃったじゃないか」と、わたくしなどはよろこばしく思うわけでございます」（「高齡社会フォーラム・イン東京」基調講演、二〇一三年七月）と明快に述べておられる。遠からず、一つひとつのわれわれの水玉模様のような小さな活動の集積として、史上に新たな、そして国際的に成功事例として注目され

る「日本型長寿社会」が姿を現すことになる。

ここで「長寿社会」というのは、青少年・中年・高年者すべてが等しくかわることになる「三世代現役社会」のことである。その基盤となる「高齡社会」というのは、高齡者が体現者としてみずから努めて形成する社会である。何も努めなければそれは「高齡者社会」ではなく、次世代にとってはいずれ大きな負担となる。

国が「高齡社会」対策を怠ることになったのは、「社会保障」政策が介護・医療・福祉・年金といった高齡者個人に対する施策でとどまってきたからである。

国際基準で「高齡化率」（六五歳以上の人口比率）が七%から一四%までを「高齡化社会」といい、高齡者の存在が目立ちはじめたとはいえ、ちらほらの段階である。余生もそれほど長くはなかったから、後人は「支えるべき先人」として敬愛し、介護・医療・福祉・年金などで余生を慰労することができた。わが国では一九七〇年から九四年まで二四年がその期間に当たった。

その後の高齢化率が一四%から二一%の間を「高齢社会」と呼ぶ。この間は高齢者意識をもつ高齢者による高齢期のための「しくみ」や「居場所」や「モノ・サービス」づくりの段階で、後人の手を煩わせないで「高齢社会」の形成をすすめることになる。わが国では一九九四年から二〇〇七年までの一三年がそれに当たった。

この間には一九九五年に「高齢社会対策基本法」が制定（村山内閣）され、翌一九九六年には「高齢社会対策大綱」が閣議決定（橋本内閣）され、一九九九年には国連の「国際高齢者年」の記念事業（小渕内閣）が全国的に展開され、二〇〇一年には「高齢社会対策大綱」が見直されている（小泉内閣）。そして二〇〇二年にはマドリードで第二回の「高齢化に関する世界会議」がおこなわれている。

この間になされるべきであった「高齢社会」形成にむけた高齢者意識の醸成も高齢者の社会参加も成果をあげたとはいえず、高齢社会対策一〇年の延滞によるひずみ

が露呈しはじめている。

そして二〇〇七年の高齢化率二二%以降は「超高齢社会」あるいは「本格的な高齢社会」あるいは世代を超えた「長寿社会」と呼ばれている。

いまや世界最速で、高齢化率二五%、三三〇〇万人、四人に一人に達したわが国の社会は、全世代のみんなが参加して形成する「長寿社会」の段階であり、わが国に独自の経済、文化、伝統のもとで、独自のプロセスを案出しながら達成にむかっている時期に当たる。

そう理解しているのは、学者と一部の官僚と高齢社会活動をしている人びとだけで、多くの高齢者にその意識がなく、ましてや若い世代には遠い話でしかない。

二 長寿を楽しむ三つの秘訣

「長寿時代のライフサイクル」

* 「高齢期」には三つのステージがある

これまで「ライフサイクル」というと、ふつうには「乳幼児期」「少年（児童）期」「青年期」「成年（壮年）期」「老年期」という五つの階層にわけて説明されてきた。

この発達心理学から生まれた「五つのステージ」は、自分の経験としても、あるいは子どもの成育の姿や父母の生き方をつうじて、だれもが納得できる分け方として認めている。

ところが史上新たな「高齢化」という状況にあつて、「高齢社会」の実情をつぶさに考察しようとすると、上の「五つのステージ」ではうまく把握できない。

なぜといって五つのうち三つまでが二〇歳代の「青少年期」に当てられていて、高年齢層にとってきわめて窮屈だからである。

「高齢社会」の把握には、加齢学（ジェロントロジー）的な観点から高年齢層に配慮し高年齢者が納得する別途の「長寿時代のライフサイクル」が要り用なのだ。それが

「人生九〇年時代」への意識変革をもたらし、暮らしやすい新たなステージを創出する契機となる。

本稿がここでいう新たなライフサイクルは、「青少年期」「中年期」を過ごしおえて「高年齢」にある人びとに手厚く、納得されるものでなければならない。

青少年期 〇歳～二四歳 自己形成期

バトンゾーン 二五～二九歳 選択期

中年期 三〇～五四歳 労働参加・社会参加期

パラレルゾーン 五五～五九歳 高年齢準備・自立期

高年齢期 六〇～八四歳 地域参加・自己実現期

高年齢前期 六〇～七四歳

高年齢後期 七五～八四歳

長命期 八五歳～ ケア・尊厳期

（自立・参加・ケア・自己実現・尊厳の五つは国連の提唱する「高年齢者五原則」）

暮らしやすい「モノと居場所の高齢化」を成し遂げ、「新しいしくみ」を創り出し、さまざまな分野の成熟した活動が展開される新たなステージであること。

このあたりが、高齢者がみずからを顧みて納得できる「長寿時代のライフサイクル」といえるだろう。ここでは学問的にうんぬんするつもりはなく、生活の実感として納得していただければいい。

「バトンゾーン」(二五〜二九歳)というのは個人のライフ・スタイルによって生じる幅であり、青少年期にいかか中年期にいかか、モラトリアム期として過ごすかは個人が選択すればいい。また「パラレルゾーン」(五五〜五九歳)というのは「バラレル・ライフ」(ふたつの人生)期にあることで、「高年準備期」である。窓際族でヒマつぶしをしている時期ではなく、二五年の「高年期」を自分らしく生きる自己実現のための模索(自立)期でけっこう多忙なはずなのだ。

「定年後は余生」などと考える旧時代の「老成」タイプ

の高齢者意識が、長寿時代を先行して迎えているわが国の「高齢社会」形成に自然渋滞をもたらしている。「高年期」での地域参加・自己実現の二五年をどう体現して暮らすかの工夫が人生の差をつくることになる。

もちろんその活動は、高齢世代のものであるとともに次世代のためのものであり、青少年・中年者を支援するものでなければならない。別のところでも引用したが、「自分がその木陰で憩うことがない樹を植える」(W・リップマンのことば)という志向を持ちつづけること。

わが国の実情をよく観察した上で本稿が採用した「長寿時代のライフサイクル」は、成長期のそれとは逆に六〇歳以上の「高年期」を三つの時期にわけている。

高年前期(六〇〜七四歳)、高年後期(七五〜八四歳)、長命期(八五歳以上)で、体現者である高齢者のみなさんが納得してくれればいい。これは標準だから個人的には自在に判断すればいい。

基本的なステージは、二五年を区切りとする「青少年

期」「中年期」「高年期」であり、さらに「高年期」に「長命期」を合わせた三つのステージに分けることで、当面する実情に見合ったステージを設計することになる。

同じ「五つのステージ」でありながら、高年期を三区分に厚く分類しているのに気づかれるにちがいない。

自己形成期にあたる「青少年期」と労働・社会参加期にあたる「中年期」の人びとは、改めて「高年三期」の存在の厚みに気づくであろう。「高年期」にあるみなさんは、いま自分が人生のどんな時期にあるかに実感が持てるだろう。それがこの表の意味なのだから。

先ごろ「後期高齢者」（七五歳以上）の医療費支払いが話題になって、七五歳で階層を刻むことの意味が問われたが、七五歳で截然と人生が変わるわけではない。

しかしからだの機能のどこかで「有訴」がはじまる時期であることには注意する必要がある。同年の著名人や友人の他界の報に接するものころからである。

本稿の長寿時代の新ステージの特徴は、「長命期」（八

五歳〜）を設けていることにある。「高年前・後期」（六〇〜八四歳）の二五年のあとの「長命期」が、八五歳〜という刻みについて、女性の側から異議をとなえる人があるかもしれない。

男女を分けたほうが現実的かもしれないが、ここでは「平均寿命」（女性）が八六歳十であるという現実に留意してほしい。まずは素直にご自分の人生と重ねあわせてみていただきたい。とくに男性はここを越えれば長命のうちなのである。そこで「長命期」と呼ぶが、ここからなら「余生」といってもさしつかえない。

「賀寿期五歳層」のステージ

* 同年配の仲間とともに賀寿を迎える

見定めえない人生の前方に次々に賀寿を設けて、先人は個人的長寿のプロセスを祝福してきた。いまも「何何先生の賀寿の会」はそれぞれに祝われている。しかし長

寿時代になって同年配の仲間とともにお互いに励まし合
いながら百寿期を目ざすのもいいではないか。

聖路加病院名誉院長の日野原重明博士が百寿に達して
話題になった。その後、現役映画監督の新藤兼人さんが
到達した。すぐ亡くなったが、百歳到達は前向きな人生
の目標として実感をもたれるところまできている。この
「賀寿五歳層」は「長寿時代」のパイオニアとして知る
と知らないとは高齢期人生に雲泥の差が生じるだろう。

還暦期 (六〇歳〜六九歳)	昭和二九年〜昭和二〇年
古希期 (七〇歳〜七四歳)	昭和一九年〜昭和一五年
喜寿期 (七五歳〜七九歳)	昭和一四年〜昭和一〇年
傘寿期 (八〇歳〜八四歳)	昭和九年〜昭和五年
米寿期 (八五歳〜八九歳)	昭和四年〜大正一四年
牟寿期 (九〇歳〜九四歳)	大正一三年〜大正九年
白寿期 (九五歳〜九九歳)	大正八年〜大正四年
百寿期 (一〇〇歳以上)	大正三年以前

前項の表の六〇(六五)歳から一〇〇歳までの間を「五
歳層八階層」に分けて、その年齢層ひとつひとつを迎え
て過ごす。まずは「還暦期」から。次が「古希期」「喜寿
期」「傘寿期」「米寿期」「牟寿期」「白寿期」そして「百
寿期」の八層のひとつひとつを仲間とともに迎えて過ご
してゆくことになる。

「六五歳定年」のあとを「余生」と決めて、見定めのつ
かない不安に耐えて生きるのが男の美学というならそれ
でもよい。中年期のしごとから解放されて、しばらくは
静かに暮らしたい、人間関係に疲れたからひとりになり
たいという人びとの自由を奪うことなどだれにもできな
いことである。

「牟寿期」には瀬戸内寂聴・水木しげる・鶴見俊輔さん
が、「傘寿期」には樋口恵子・岸恵子さん、石原慎太郎・
五木寛之・三浦雄一郎・仲代達矢さんが、そして「古希
期」には小泉純一郎・小沢一郎・松方弘樹・松本幸四郎・

青木功・尾上菊五郎さんなどが到達している。七〇歳になつたからといって老成することはない。ご覧のとおりまだまだ先がある。仲間といつしよに人生の新たな出会いを楽しむ日々が待っているのである。

「体・志・行」三つのカテゴリー

* 雑事をいとわなことが長寿のもと

家人がだれもいない時にでも、三面鏡に裸形の自分を映してみよう。

六〇歳十の「からだ」が眼前にある。上・下半身とながめて、男性なら腹部に、女性なら胸部に手をやるのが自然な「ふるまい」。そしてまあこんなものかと納得するのが「こころ」の動きである。

この「からだ」体(健康)と「こころ」こころざし||心・志(知識)と「ふるまい」行(技術)という三つが人間(人生)としての同時存在であり、この三つ以外

にないというのが、東洋の哲学が教える人間(人生)観なのである。

そういう存在の意味合いが納得できるのは、やはり「からだ」のどこかに故障(すすむと有訴・疾病へ)を生じたり、「ふるまい」が不都合(すすむと介護へ)になつたり、物忘れが重なつて「こころ」(すすむと認知症へ)に負担が生じるといった自覚が現れる高齢期になつてからのこと。

どれかに気づいたら、そこから「体・志・行」に配慮した人生を始めればよい。まずは健康に留意し、知識や夢をたいせつにし、技能はさびないようにして暮らすこと。この三つを常にバランスよく働かせることによつて、高齢期の人生は楽しいものになる。

「青少年期」「中年期」の六〇年間に積みあげてきた健康や知識や技術や有形・無形の資産には個人に差があり特徴がある。それらをバランスよく活かしながら「高齢期」を暮らしている人が、ここでの敬愛すべき「体志行丈人」

のみなさんである。

スポーツ界では「心・技・体」の順として認識されているのは、スポーツでは心の構えが技・体の差をつくるからである。

高齢期が「体・志・行」の順なのは、体が志・行を左右するからである。

・からだ 体 健康・食べる・休息・健康体操・運動・有訴・・・疾病

・こころ (ざし) 心・志 知識・しゃべる・考える・

情報文化・歴史・・・認知症

・ふるまい 行 技術・自分でする・歩く・芸能・芸術・

スポーツ・・・介護

たいせつなので繰り返すが、日々の暮らしの中でのこの「三つのカテゴリー」のバランスが大事になる。

とくに男性は長い間決まったしごとに従事してき

たために、三つの要素のバランスを欠いていることに注意が必要である。

デスクワークの多かった人は足腰を鍛えること、おながが出ている人は歩くことで時間をかけて少しずつ体形の回復をめざす。負荷をかけて「アンチ・エイジング」若づくり」に努める。雑事をいとわず、さかして担うのが何よりの三つの要素のバランスの回復に効果があるようだ。

過激にはなく長期計画で、そして「アンチ・エイジング」若づくり」には努力を惜しまないこと。健康と体力の保持、心おどる夢・知識、外出・活動力を鍛えること。奥さまと家事はもちろん炊事も洗濯もみんなよし、上手に共有して雑事をこなすこと。

長寿のためには現役時代の役職意識は、家でも外でも無用である。旬菜を使った得意料理(薬膳)をいくつか食卓に差し挟むようになれば、男女七歳の差はずっと縮まることになる。

第二章 世相

一 「現役人生六五年」をすこし終えて

「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」

* 強い荒廃菌が弱い善玉菌を食う

いまやちつとも希れではない「七十古希」をつつがなく過ぎて「喜寿」を迎えたのに、Tさんは喜べない。

喜べない理由はふたつ。これはそのひとつ。

少年の日に自分が蒙った戦争の惨禍や戦後の混乱を、繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えようとしてきた行為が、無力であり無益であると思うようになったから。

若者の言はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあると、Tさんはいう。

「非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な

体験だっけてみたい」

「戦場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まないよ。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいくせして、うるさいじいさんばあさんはいらない」

四つの若者のワル乗りのことばを引いて、Tさんはいう。一回きりの人生だから不幸な体験をしてみたいという若者に幸せであることを願うことも、戦争を避けて平和であることも、善意から話すことも、そして先人として何かを伝えることすらできない。

若者の知は先回りして善意からの「諫をふせぐ」域にある。人間が隠し持ついくつもの本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして、時代は移るものなのか。

Tさんの目の前のテレビ画面を、ある日の昼のニュースが流れる。二〇一三年一〇月*日。

・南海トラフ巨大地震 ・銀行暴力団融資 ・後見人

財産詐取 ・有名ホテル食材偽装 ・商品回収 ・送り
付け商品 ・公衆トイレ損壊 ・赤ちゃん放置 ・殺人
死体遺棄 ・。これがすべて。

こんなニュースなら見なくていい、とわたしたちなら
そうできるが、若者たちは避けるわけにいかない。

「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」という世相。

それを示すのが「荒廃菌」をもったことば。

夕刊紙や週刊雑誌の類からTさんが拾ったページから
溢れるほど数あるものの中から、ここでは五〜六行分だ
け、「荒廃菌」見出し語を並べてみよう。

狂気 抗争 挑発 怒号 罵声 悲惨 惨劇 醜悪
墮落 嫌悪 悪意 破壊 地獄 逆襲 不法 非道
欺瞞 汚辱 凄絶 悪徳 横領 餓鬼 殺人鬼 修羅
場 非常識 犬畜生 羊頭狗肉 魍魎魍魎 暴くぶ
つ壊す 騙す 淫ら 潰し 酷い 大嫌い スッパ拔
き いじめ ハレンチ アホ バカ クビ ウソ
ワ
ースト ハルマゲドン・・・。

巷の関心が「シラジラしい善意よりドスグロい悪意に
ある」というので、雑誌記者たちは悪意、悲惨、狂気に
満ちたニュースを、鬼神にでも魅入られたように競って
追いかけている。日夜、話題は途切れない。

売れるが勝ちの週刊誌だから、毎号毎号、悪逆非道な
人物を探し出しては暴きつづけてきた。強い「流行性荒
廃菌」に対しては、より強い免疫抗体を体内に形成する
ためにである。「負の公益」だとしても、長いあいだ善意
を信じて暮らしてきた高齢者のみなさんにはもはや理解
できにくい悪意の領域にある。

若者たちの胸のなかを、弱い「善玉菌」を食べながら
右のような「荒廃菌」がうようよ泳いでいるのである。

「歴史悲劇」再演のプロローグ

*衣装を替えて三文役者が登場する

いまやちつとも希れではない「七十古希」をつつがな

くすぎて「喜寿」に達したのに、Tさんは喜べない。

喜べない理由はふたつ。これもそのひとつ。

いま自分が、かつて両親が直面していたとよく似たシーンに立ち会っているのではないかとTさんは感じている。進み出したら引き戻せない「戦争の惨禍へのプロセス」をたどることになる気配。戦前への予兆。

歴史は学ばない者によって繰り返す、学んだ者によって繰り返す。

かつて、といっても父祖の時代に、今とよく似た世相があった。昭和のはじめのころのことである。

世界恐慌があつて、そのあと不況に。失業の嵐が吹き荒れ、閉塞感が巷の隅々にわたる。政党政治への絶望、国家改造（昭和維新）への青年の動き、独断で関東軍が満州事変を起こし、熱狂型の世論がささくれ立つなかで、挙国一致の軍国化と国際的孤立、リフレ金融緩和（財閥救済）。情報の統制、売れるが勝ちのマスコミ、そしてエロ・ナンセンス。

童謡（家庭）から軍歌（国家）へと少年（小国民）の意識と暮らしの振り子が、大きく振れていく。そして国家総動員へ。

そんな時期にTさんは四人の子どもの末っ子として生まれて育った。両親は明るい将来を約束できなかっただろうが、暗い家庭ではなかったと記憶している。子どもころは「童謡」といっしょに「軍歌」を歌い、戦争ごっこをして遊んで育った。

先の戦争の「敗戦」で得た平和の時期を六八年、つつがなくすごしてきた、次の戦争への予兆を感じるTさん。現役である六五歳以下の国民は、平和を当然のこととしてきたから何も感じていない。

衣装を替えた登場人物たちによって「歴史悲劇」の再演ということになるのではないか。

いままさに列島総不況と閉塞感、財政難、デフレ脱却の金融緩和による格差の拡大。軍国化と国際的孤立の気配。そして「歴史から学ぶ」想像力が感じられない政治

リーダー。拙速の特定秘密保護法案の成立、ペーパーからデジタルへのマスコミ情報の混乱、絶叫型の世論、大衆受けする映像（テレビ番組）、エロ・ナンセンス。

両親が直面していたとよく似たシーンに立ち会っているのではないか。いずれはだれも回避する術を持ちえなくなつて不幸な結末を負うことになるのは、何も知らない将来の子どもたち。

Tさんが「歴史から学ぶ」というのは、国際的に孤立（とくに近隣諸国）しない、国防を国防軍に頼らない、冷静な世論をつくること、そして何よりも国民に格差をつくらないことだという。

が、金輪際、わたしは関わりませんけれど。
しかし、Tさん。待ってください。

三〇〇〇万人に達した高齢者（六五歳以上）はまるごと黙止されて、「アベノミクス仮想好況」からはなんの恩恵もなく、格差だけが広がっていることに気づいています。この四人にひとりの高齢者の存在は、歴史の繰り返し

ではなく、史上初めてのことでないですか。

この国の高齢者が保持している潜在力を發揮してつくり出している「成長＋成熟社会」は、Tさんという国際的に孤立せず、国防を国防軍に頼らず、冷静な世論をつくること、そして格差をつくらないこと。これは新次元の「歴史をつくる」ことにはなりませんか・・・。

「・・・もう遅いような気がします」と、まっ白くなり薄くなった髪を撫であげながら、Tさんは真顔になつていて黙り込む。

「若年化・女性化・IT化」が優先

*時流(グローバル化)と潮流(高齢化)のはざままで

超大国「アメリカ一極化」と途上諸国主導の「グローバル化」によつて、きしみながら新世紀へと舞台は回つた。国連は、新世紀が「平和と非暴力」にむかうことを願つて、「文明間の対話」を課題とし、二〇〇一年を「文

明間の対話年」としたのであった。

ところがそれに逆らうように、ニューヨークの「九・一一テロ事件」、そして二〇〇二年三月の「イラク戦争」を引き起こし、報復テロの恐怖が世界を覆うことになってしまっている。

そして「BRICS」(ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ)をはじめとする途上諸国の台頭という激しいグローバルな経済的時流。

それに覆われてしまったから、二一世紀の国際的潮流である「高齢化」は波がしらす見えなくなってしまうている。国連は一九九九年を「国際高齢者年」と定めて記念行事をおこない、新世紀での国際的課題として各国に「高齢化」対応を要請したのであった。

アジア唯一の経済先進国として、また世界最速の高齢化先行国として、この時流と潮流のふたつを課題として世紀をまたいだ日本だったが、この一〇年余の際立った変容といえば、「若年化と女性化とIT化」という時流対

応のものだった。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もしいないヨボヨボの祖父を脇役とみるようになった。

Tさんは孫娘からも軽くあしらわれているのである。激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、家庭の途上国産の日用品と企業の非正規社員の増加によって実感されている。角度を変えて言い添えれば、わが国より一步遅れて成長期に合ったアジア途上諸国と向かい合い付き合うための「日本途上国化」なのである。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになった。それがもう一〇年余もつづいている。

政府が「高齢化社会」対策を講じないままに、わが国

の高齢者（六五歳以上）は、三二〇〇万人、高齢化率（人口比）で二五％に達し、四人に一人になっている。

単純に移譲できない「高齢者資産」

*「家計黒字」が財政赤字を補ってん

そこに「もう待てない」と言い出して、いらだちに近い懸念や要請を高齢世代に示しはじめたのが、企業の生き残りのために身を挺することを余儀なくされている中年の現役世代である。退職社友には理解できないほどに、中堅社員の立場は悪化しているのである。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員とアルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。その上で実質賃金の目減り。

企業の生き残りのためとはいえ、黙々と耐えてきた中年層の人びとの胸の奥に、将来への不安がわだかまる。同僚との間でも、同業者との間でも、親和の感性が少し

ずつ磨り減って働かなくなるのがわかる。

マクロ経済からの異次元の「金融緩和」という前払い政策によって企業は潤ったが、これから事業を起こして景気回復のために働くのは自分たちである。

そのうえ高齢者はなんなんだ。

現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

何より高齢者が資産として留保しているという約一四〇〇兆円の「家計黒字」（親世代が持つ平均で約二二〇〇万円の貯蓄）についてである。

五〇歳以上の世帯が七五％まで保有しており、抱えこんだ高齢者が「引きこもり」の余生を送ろうとしている。

海外では時代の推移と連動しながら人も動くしカネも動く。株式や出資金にまわるものが、日本では現金・預金（半分を越える）のまま動いていないのである。

功労者への敬意とない混ぜになって、胸のうちを右往左往していたらだちは、次第にふたつの方向に集約されて納得されることになった。

まずは懸念。そのために起きている「資産の塩づけ」についてである。

この先どこまでか判らない長い老後の生活の不安解消のためには、高齢者としては、底まで判った資産を抱えこんでフタをして「塩づけ」にして離さない。それが経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足をしばっているというのが「高齢者資産塩づけ論」である。

高齢者の不安解消のために、いま国の骨格を支えて働いている現役の不安を放っておいていいのか。

となる。ただし国の財政担当の現役官僚からすれば、安定した黒字財源としては動かないほうがいい。いずれ二〇年もすれば一過性のものとして、すべて相続とともに動いて解消されることになる。声には出さないが、それは自分たちの高齢期の安定財源となる。

もとはといえば「安心して暮らせる高齢社会」に対する国の構想さえあれば、この一〇年の間にその形成のために出資すべきものであったのだが、安心できる国の将来構想がないゆえに活用する機会を失ってきた貯蓄なのである。だから「使うところに使えない資産」になってきた。それは高齢者なら理解がいくことなのである。

それより高齢者側の言い分は、企業内では若手にしごとを譲って脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか、となる。

中年の側からはもうひとつ、使わない高齢者から使手の若年者へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかという「高齢者資産」移譲の要請が力を増すことになる。

こちらは楽天の三木谷浩史会長など、新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちの持論である。いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要

因が、高齢者層の支援の欠如にあるというもの。使わな
い、あるいは使えないのなら必要としている若手に譲っ
て資金を動かすことだ。

先ごろ「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非
課税措置が決まったときには「愛情口座」として、若い
母親たちの関心を呼んだ。高齢者がため込んだ資産を
子・孫のために動かそうという官僚の側からのヒツペガ
シ政策である。

それにしても孫の学問の支援のために、なけなしの福
沢論吉幣をすでに精いっぱい工面している立場からは、
実感がない高額であるし不愉快である。

そんなことで資産はおいそれとは動かない。
ところで「引きこもり」は、高齢者だけのものではな
いのである。

みなさんのまわりにも一人ふたりと居るに違いないが、
優れたIT青年たちが技術開発の作業の中で使い捨てに
されて社会と断絶していく。若い女性もアルバイトや派

遣社員なのに荷重な実務を引き受けて体調を崩してしま
い、嵩じてはうつ病に陥り、外界との関係を遮断してい
く。どちらも繊細な感性の持ち主ほど傷ついている。

この傾向は、正社員にも広がっていて、即戦力を期待
されて入社したものの、適性と将来に不安をつのらせた
「新入社員のニート化」が少なからずあるという。

そんな不安状況に包囲されている中年世代の人びとは、
気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥っ
てしまう。これ以上すすむと国の骨格である働く人びと
が骨粗鬆症に冒されてしまうほどだ。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできる
ものではない」と、若手の「団塊の世代」あたりからは
後輩の甘えへの不快感を隠さない声があがる。

世代間に亀裂が広がる。

中年世代に安心感を与えるためには、高齢者みずから
が資産ばかりか知識や技術を動かすことだ。若い世代も
巻き込んだ「日本型長寿社会」を達成する方向にむかわ

ねばならないのである。

中年社員のみなさんは、これから本稿が論じる「高齢世代によるみんなのための地域社会づくり」に期待して、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は将来にわたって大きいし、その成果はいずれは次世代の資産となるのだから。

二 三人三様の高齢期の暮らしぶりをみる

「急流勇退」の引きこもり

*「いさぎよい隠退」はかつて功いまは罪

われわれが負担している年金を受け取りながら、次の時代に「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしていると、現役世代からいわれれば、高齢者はだれにもそういう一面があることを否定できない。

しかしそれは個人というより「しくみ」のせいである。

かつては先輩の「いさぎよい進退」が、後輩に活動の場を残し、将来への安心感と励ましを与えてきた。

先ごろスタジオジブリの宮崎駿監督が引退したが、あいう引退のしかたを「急流勇退」という。まだしごとができる現役のうちに惜しまれて引退する。野球の松井秀樹にもそういうところがみられたが、なかなかできないことなのである。

だれもが穏やかに「余生」に入れたころはもちろん、企業や組織の「高齢者リストラ」がすすめばさらに、すぐれた知識、経験そして人格をもった人びとが、会社や後輩のために定年を持たずに潔く職場を去っていった。

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」という君子的進退がそのまま理解できた時期である。

後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこもり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができらるだろう。

しかしそれは「余生」が短かく、高齢者が少なく、熟

練期に仕事があったころのことで、しごとなしの高給社員は早めに消えていい。退職金と年金で何もしないで長生きするのは美談でもなんでもない。会社で培った熟練能力を使って新たなしごとをつくって、年金分くらいは稼いでほしいのである。しごとまみれの若手としては、忌々しい実情なのである。

ここでは典型的な引退事例として、六五歳をすぎし終えた三人の高齢者の三様の暮らしぶりを見ながら、それぞれの課題のありようをみてみよう。

まずは「急流引退」をし、あと「関わり知らず」として「引きこもり」の人生を送るDさんの暮らしぶりから。

「一陽来福型の高齢者」Dさん

*「隠退ウーピーズ」(豊かな高齢者層)

Dさんは、君子然としてあたりを払うような風采ではないが、聡明さだけは疑えない広い額に細い目で、とく

に笑い顔が安心感を与える温和な人である。

超とはいえないがだれもが知っている並一流の企業を定年まで二年を残して早期勇退してのち、家庭人として静かに暮らしてきた。が、古希を迎えて体力の衰えを実感して、これからは「老人」と率直に認めることにした。

新聞社の調べでも七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上という。あと残る一五年ほど、男の平均寿命である八〇歳を越えて余命の八五歳までの人生を、あれこれ身近に楽しんで過ごせると人生計算を立てた君子的「引きこもり」のひとりである。

自分でも幸せな「隠退ウーピーズ」(豊かな高齢者層)だと思っている。会社人間だったから地域に知り人はいないが、学友や同僚があちこちにいて、それにつかず離れずに暮らす妻と娘の家族。何よりも広い額に汗して食材をえる「自作菜園」の自営農が自慢である。

肝心の生活費はどうか。公的・私的年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮

のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これがけっこう費用がかかる）、そしてふたりの葬儀費用まで含めて、「生涯準備金」（預金と国債・株式が半々）はいまのところ崩していない。それでも小遣いは月八万円以上。以上というところに余裕がある。「引きこもり」に不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつづけていた資産が、「アベノミクス」の金融緩和・株高で、老後の安定した豊かな暮らしを支えるという四〇〇〇万円（高齢者の一六％）に補充をえた。住宅ローンがなく菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝している。

正直に言えば、健康に不安はなくはないのだが、一一六歳で亡くなった木村次郎右衛門さんが、郵便局長をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿であったことから、「農作業ができる間は」と安心してゐる。

平均余命が七〇歳なら男性は一五・一なので八五歳、女性は一九・五なので八九歳だが、健康に留意している

からそれより長く、さらに男性八五歳の余命五・九までを加えて九一歳、女性は五・八を加えて九五歳までは行ければと思っている。「自分はムリかもしれないが、同い年の妻はクリアできる」と予想している。

岳父同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはない。だから多彩な趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事でも会合でも、学友や同僚から声がかかって可能な時には積極的に参加し、浪費もする。

友人たちの会で名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くに有訴の記載がある。語られるだけその認知症や医療や介護の話を目にする、ドック検査による健康状態も良好な自分が、めぐまれたひとりに思える。

しごとに関しては、下降へむかう時期にあると感じているが、Dさんは「関わり知らず」と固く決めて、後輩が知恵を借りにやってくるのにも、「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくいって態度を崩さない。

それでも七〇歳の古希を迎えて、後輩からしごとに関する声がかからなくなり、みずからも体力の衰えを実感する日はさみしい。知人の訃報に接すると、テレビも見ず新聞も読まず、終日、気分の晴れないこともある。「君子的引きこもり」の独居を愉しむ境地にはなお遠いことは感じている。

「ウーピーズ」と自得したところで、父祖伝来の土地を切り売りして億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違う。「自営農家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が少しでも確保されるのは個人的に歓迎である。

「一陽来復型の高齢者」として日々を静かに過ごすDさんにも、高齢者の資産を「塩づけ」とする世論を背景にして、御用学者と財務官僚がさまざまな手法で余裕のある高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのがわかる。財務官僚のそんなやり口には、Dさんも「後人としてあるまじき行為！」として不満を隠さない。

といって、「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはなく、思いのほか早々とやってきた「高齢期じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。

せめてDさんくらいは生涯を安穩に過ごしてほしいのだが、このままの状況で推移するとすれば、みずから安全圏と考えているDさんほどの人ですら、生涯を安穩に過ごしきれるかどうかはむずかしい。ましてや「現役六年」をすごし終えて、平均平凡をよしとして過ごしている高齢者が、将来も平安であるとはいえない。

「先憂後楽型の高齢者」Iさん

*「ほどほどの赤字人生」が男の美学

Iさんは、父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」の高齢者である。

二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となった。だから六五歳を過ぎたが定年と

いう区切りはない。

父親が元氣だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけで、とりわけ家が豊かになつたわけではなかった。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのを見てきた。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、

「おまえは大学を出にやいかん」と口癖にいつて、家業の手伝いを強はず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していた人生を歩んでいないことを知ることとなつたが。

わが国の戦後復興期から高度成長期（一九五五〜七四年）のころに設立された中小企業では、Iさんのような跡継ぎ二世は決して少なくないだろう。

技術を尽くして質の良い日本製品をつくりあげてきた実直な父親と労苦をともししてきた社員に囲まれて育ち、

いま二代目として跡目を継いでいる。同じような経緯をもつ機械製造系列の子会社（親会社ではないが海外進出して元氣）から下請け品を求められれば、資金繰りをし設備投資を重ねて求められる製品を納めてきた。

そして迎えた世紀末の「列島総不況」。

その後、人を減らしながら景氣回復を待ちつづけてきたが、下請けに徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力再生の手立てはないところに来た。一〇〇〇万単位の借入金を返済する余力が出ない。負担が次第に重くなる。「生涯現役の跡継ぎ二世」のIさんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チームも、若者が減つて紅白戦が成り立たなくなった。

「中小企業退職金共済」で定年は設けているが、父親のころから技術と意欲があつてしごとができるうちは文字通りの終身雇用である。だから効率のいいしごとが減り収入が減つても残つた従業員には減収にならないよう給

与は払いつづけてきた。が、このまま推移してはそれにも限度がある。

先が読めなくとも「われ関わり知らず」などといつてはいられない。というより引くことなどできない。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしても、ほどほどの赤字ぐらしをするものだ」というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだIさんの負け惜しみ半分の人生哲学である。周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方である。それで満足して、働きづめで亡くなった。

製造ノウハウを持つ親会社は生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。ついには製品化までとなれば、子会社はともかく孫請けは回復どころではない。「ほどほどの赤字人生」ともいつていられない。朝起きるたびに借金が増し、倒産の日が刻々と近づいてくるのを感じている。

独自でのしごとにメドがたたず、下がりつづけた担保

資産との見合いの末に、いずれ不良債権の処理対象として銀行から見放されるだろうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。

さしたるぜいたくもせずに、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、「二世の星」（父の口ぐせ）たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしく地獄へでもどこへでもゆくつもり。

父の時代にゼロに始まって二代目の自分の時代にゼロに終わる会社人生を、Iさんは納得している。それはそれで男子二代のみごとな終始のつけ方ともいえる。

が、惜しいかな、Iさんは「高齢社会」を多彩にし豊かにする「高齢化用品」のユーザーでありメーカーであるという点でもまたゼロの人なのである。

「Iさんの会社が蓄積してきたような技術力は、高齢社会での独自の製品には活かせるのですか」

「孫請けのところではむしろかしいですね」

返答は明快である。高齢者の暮らしを豊かにする日用

品のために活かして、自力製品で活路を開くことができないものだろうか。

Iさん、良質な製品の製造に努めて下請けの現場で自得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかして仲間と知恵を出し合って道を切り開いてほしい。

中小企業の熟練技術者を必要とする「高齢化優良日用品」製造の時期がきているように推察されるからである。

高齢技術者の保持している技術と経験と意欲が「高齢化製品」の製造に活かされねば。それなくして、内需で湧くような経済活力は生まれないからである。

「戦々競々型の高齢者」Yさん

*「貯蓄ゼロの目」へのカウント・ダウン

給与所得者は、ことし四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、定年が六五歳まで延びた。

とはいえ経営トップはそのための新規起業には動かな

い。リスクを負わないためだ。だから退職を前にした高年齢社員は、業務替えになったり、収入減を余儀なくされながら「待ちの日々」を送ることになる。

なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族がどう暮らすかに思い悩むことになる。

改正安定法にかからずに定年退職したYさんは、技術員ひとすじに四〇年を会社勤めですごした。退職後も前職をいかして仕事があればと願っているが、このリストラ時代。「ハローワーク」を覗いて登録はしてきたが、特殊技術すぎて該当するしごとはない。資料はたくさん入手して帰った。失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率五%以下など信じられない。

Yさんは、少ない退職金から、住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまった。ほとんど病氣らしい病氣はせず健康だったから給料天引

きの健康保険料の負担は感じなかったが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。

先行きの不安はすでに身边に渦を巻いている。

財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。次第に現実味を帯びてきた「消費税の大幅増税」。長年つれそつてきた妻の持病といつわが身に降りかかるかもしれない「医療費」の自己負担。今回は金融緩和で回避されたが、企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもへの支援出費……。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きすればいつかは必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

退職したあとYさんは、旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らして「選択的支出の削減」に努めている。それでも生活用品の値上げや日常経費、医療費や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確

実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋めるしごとをしたい。「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウンは始まっているのだ。「薄氷を履む」ような日々がこれから長く続くことになる。Yさんは多数派である「戦々兢兢の高齢者」のひとりである。

「一私企業人でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもり自分分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」とYさんは国の将来と施策を楽観的に信じている。長生きすればいつかまた「スイートン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうとYさんは思っている。

通信機器の優れた技術労働者であり、つい最近まで会社の主力製品のひとつになっていた機器の共同発案者。とってYさんは、一社員が発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思ってきた。

「将来への希望は現場の活力にある」と技術者であった経験から確信している。

自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、NHKの人気シリーズ「プロジェクトX・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合いそうな人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。成果を自分のものとせず、みんなの協力の結果だという技術者がこの国を支えているという信念に今も変わりはない。番組はその後、個人の技能に転じた。

番組が終了してずいぶん経つというのに、胸の奥に刻まれたように、気がつくとき、いまでも中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節「つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」が体の中を繰り返して流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられない。

第三章 家族

一 「MY…」がないマイホーム

「マイホーム・パパとママ」の憂鬱

*アノヒトとかヒカラビてる人といわれて

マイホーム、耳にすると心安まる、なんともいえず響きのいいことばである。これほどまでに生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。

いま高齢者となっている人びとがそれぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語なのである。だから細部の意味合いは個人によって異なる。

ひよわなもの、よき（良き、好き、善き）ものを守る城として、「マイホーム」は先行の「わが家」や「家庭」などとともに、それに負けない温もりを日本語として持つに至っている。そのぶん「ホームレス」ということば

がわびしさを伝えてくる。

戦後っ子だったパパとママは「マイホーム主義」と先輩にからかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らし、必死に働いて、ふたりの子どもを育ててきたのだった。

夫婦と子どもふたりの家庭が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。

その後、職場までは遠くなっても、マイホーム・パパとママは、子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引越した。そういう体験をもつ人びとは少なくないだろう。それが「しあわせ家族」だったのである。

人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得し、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。定年後まで残る住宅ローン。長くもあり短くもあつた来し方を顧み、マイホームの当主としての存在感を確かめる

ために、じっくりわが家の中を見直してみよう。

家族の希望をかなえることを優先して、そのぶんみずからの希望を抑えてきた結果、不相应な応接セットや家具といった家族共用品はあっても、みずから求めた専用品というのは少なく、「モノと場」に表わされる当主の存在感が意外に希薄なのに気づくであろう。

そこでここでは夫婦と子どもふたりの核家族、Fさんのマイホームを覗いてみることにしたい。

娘と息子が「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。サッカートのイーローカード一枚ずつといった子どもと暮らす「団塊世代」であるFさん。

上の娘は短大を出てからフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。下の息子はごく普通の大学をごく普通に卒業して、親のひいき目でもしつかりしてきたように見えるのだが、就職試験を受けて勤めはじめた有名輸送会社だったのに、短期でやめてし

まって家にいる。大学を出たのだからと自主性にまかせているが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをして過ごしている。

時折り出かけて「職さがし」をしているとはいうものの、「ニート化」（NEET。就業希望を有しない若年無業者）への気配もただよう。

娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親に面とむかって「キミ、元氣かね？」と呼ぶなど、軽くあしらわれていると感じることがたびたびある。

「この家はわたしが名義人なのだ」などというのも愚かしい。壁面に娘が貼った「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁に存在感があるわけではない。

「ヒツペガシ娘 vs ツカエナイ親父」

*「ツカエナイ親父」とはなんだ

「塩づけにできる資産などどこにもありはしないし、いまでさえわが家では子どもたち、とくに娘によつて強奪に近い形でヒツペガシ（資産移譲）が行われている」とFさん。

二二五〇万円余が高齢者の平均貯蓄額で、暮らし向きに心配のない人が半数を超える？ そんな調査を同居の娘と息子をもつFさんは「信じられない」という。

女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるのはいいのだが、どれほどの若い女性が自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそとデオールのパーティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、際限なしの「女性化」に懸念を

もっているのである。親の育て方がどうこうではなく、風潮なのだからとやかくいっても仕方がないが。

「時代の花」として娘たちを擁護し、女性の活力に期待する立場からは無条件に、両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じた家庭内ヒツペガシは当然のことと考えている。

「男女格差報告」（ダボス会議の発表。二〇一三年）では一〇〇位以下という外国にくらべた女性活用の低位置が話題になる。経団連も同友会も、女性の登用を「ダイバ―シテイ（多様性）の推進」としてすすめる。

さらに女性に活躍の場をという「女性の活躍促進による経済活性化」行動計画（働く「なでしこ」大作戦）が、二〇一二年六月に、野田内閣の関係閣僚会議で決定された。小宮山（洋子）大臣も乗り気の事業であった。そして安倍総理も国連総会の演説で女性重視を打ち出している。

女に生まれてよかった。笑顔で「お・も・て・な・し」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すではしゃぎまわる女性たちで占められている。

人並みに応じられないと、「ツカエナイ親父！」としてあしらわれる。お前こそ「ツカエナイ娘！」といい返せないところがつらい。Fさんばかりか、うかうかしていると心優しい高齢者から居場所もない、おカネもないになりかねないのである。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに強く輝いているはずだった高齢者が、居場所すらなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではIT音痴と軽視され、売れ筋ヤング製品の現場からはずされ、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見た「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後すぐころの「ふりだし」へと戻って行くよう

に思えてくる。「逆風行舟」である。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」の気配

*居場所は図書館・ファミレス・パチンコ屋

何としたことか、わが家において、「ホームレス」とさほど遠くないわびしさを感じている戦後ツ子。パパが増えていくという。パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりこれまでもなかったのである。

テレビのチャンネル権はない。というより見るに値する番組がない。クルマは一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どものようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・JAFまですべて親持ちである。食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。自分では作りようがないから仕方がな

い。つまり「ステージ」がない状態は深まりつつある。

聞けばだれもが同様で、会社がなくなつて、家に居場所がなくなつて、「ホームレス」になる。といつて屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスか公共図書館かパチンコ屋の休憩室くらい。高齢者の「ステージレス」である原因は、自分たちにもあるが社会のしくみにあるとは判つていても、どうしたらいいのか解らない。

このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かつていけると感じられる暮らしは招き寄せようもない。

「MY・」がないマイホーム

*わがブランド品はオメガの時計だけ

Fさんは改めてじっくりわが家の中を見直して見る。

本だなの本が動いていない。家具はどれも一〇年以上

まえに購入したもののばかり。二〇世紀のものだ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均やスーパーものが多くなつた。シャツはユニクロかアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物のなかには先進国ブランド品もあつて、ルイ・ヴィトン (LOUIS VUITTON バッグ) やプラダ (PRADA バッグ) やディオール (Dior 化粧品) やシャネル (CHANEL 化粧品) などといったものはFさんにもわかる。スーパー品とのアンバランスさに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

しかしFさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ (OMEGA 終わりの意) の腕時計だけ。家族のために優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないか。家庭内に自立した存在としての拠点がない。

「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であつて、最も優遇されている

仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていないのである。

「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状に不満なのである。

両親に対する不満との葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の「潜在的ワル度」をFさんはつかめていない。

タブロイド版夕刊紙が長年ふりまいてきた「悪を暴く記事」によって家庭内にもちこまれた「荒廃菌」が、抗体的ない子どもたちに取り込まれて、いまや胸中をうようよ泳いでいるのだ。そこから発せられる配慮のないナマのことは、家族にはない他者の悪意が混じる。

当主として当然のこととしてきた家族への配慮が、「人生の第三ステージ」にはいった自分を支える磁場の不在となつていることに、Fさんは危機感を覚える。

マイホームに「MY・・」がない。では「新宿ホーム

レス」とどこが違うというのか。

高齢者の自立のためには、存在感を同居人にきちっと示すような家庭内の拠点が必要なのだ。そのための専用スペースとモノの確保。

といって、夫婦と子ども二人で最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋なんていう余裕はない。子どもたちが親ばなれをせずにいるから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋である。

部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、獲得に失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点どころか「家庭内ホームレス」の確認になってしまう。

となると共用スペースであるリビング・ルームの一面。たとえ不在であっても当主の存在感をきちっと示せるようなコア（核）をつくることにある。

「家庭内リストラ（高齢化）」は、させるのではなく、黙って自らするものである。たとえ不在であっても、当主

の存在感を示せるような「不在の在」としての「わたしのもの、MY・」の形成。

傍らにあつてわが高齢期人生を輝かせてくれる「高齢化粧品」を意識して身のまわりに配置することにしよう。いまリビング・ルームを見渡しても、何もかもがそうであるようでそうでない。おおかたは共用品なのだ。

六〇歳すぎではじめる「家庭内リストラ」は、これまでそういう意図がなかったのだから、際立って「わたしのモノ」といえるものなどないのが当たり前。

後にすると述べるが、これまでに蓄えてきた知識や積んできた経験や技能をさらに深化・発展させることに資する「わたしのモノ」を、いつでも利用できる状態に置いておく。知識や経験や技能は、地域社会への参加にかかわるだいいじな「個人資産」になる。

身近にあつて「わたしのモノ」という役割を担えればいいのだから、ブランド品である必要はない。日ごろから愛用しており、それなりの存在感があればいい。

これと決めた「わたしのモノ」を基点にして「家庭内リストラ」をすすめる。長い高齢期の住環境を少しずつ、さりげなく整えようというのである。

まずはひと昔前まではNO・1の愛用品であり必需品であった机と文具類。いまやインターネットとEメールの時代だから、卓上パソコンと周辺機器に主役を奪われて久しく脇役に耐えてきた。これからは「人生第三期」の活動を支える「高齢化用品」の基点として、馴染んだ机は新たな「高齢者意識の据え置き場所」として確保して活かすことになる。

二 「家庭内リストラ」による存在感

「家庭内リストラ」のコア用品

*「MY・チェア」には即座の効用がある

「団塊シニア」のひとり、Fさんには親ゆずりの骨董品

など何も無い。リビング・ルームを見直した末に、小さな庭と室内の双方が見渡せる窓際に、高齢者特別席「シニア・スペシャル・シート」を据えることにした。

会社でも窓際だったし家でも窓際でいいと、居心地を合わせることにして。そして文字盤が気に入っている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。

Fさんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢化時代を表現する「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。重量感より意匠センスより何よりも座り心地を優先する。いくなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」である。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座なのだから、「マイ・チェア」として大切に扱うことしよう。すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「MY・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日か

ら明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で本心に落ち着いた気分を味わえるのではないか」というのは、マイホームを建てたときから気にしていた建築家の提言で、まことにその通りと思っても、家族思いの当主としてはそこまで自己主張をしなかった。いまその実現の時なのだ。

老い先長い高齢期を通じて使い込むことよって座り心地を熟成させてゆく「MY・チェア」。

Fさんのデパートめぐりの調べによれば、さすがに「座る文化」の歴史が長い欧米の製品はさまざまに意匠をこらしていて、見るからによく、座り心地もよさそうだという。最高の座り心地を誇るのは頭と腰がほどよくフィットする北欧製のリクライニング・チェア。競うのはドイツ製スツール、イタリア製アームソファ、カナダ製スウィング・チェアなど。いずれ劣らぬ居ずまいがあるし、値段も思いのほか幅があるようだ。

長い高齢期を安らいで過ごすための拠点が「MY・チエア」なのだから、これといったイスと出会ったら思い切って投資（浪費）をする。後半生が始まる還暦の祝い購入するのもいい。

一日のしごとを終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心を静めてひとしきり一日をふりかえる。「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。

それでいい。それが「MY・チエア」の即座の効用なのだ。どっしりと座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。それなくして何の人生か。

「モノ同士のモノ語り」

*専用用品をつなぐ暮らしの動線

静かに「家庭内高齢化リストラ」が動き出す。そのう

ちに同居人が「パパのもの」として気づくだろうが。

候補はいろいろ。デジタル化で実用性を失ったが、シヤッター音と手触りの感触には変わりがない高級一眼カメラ、部品の揃わないオーディオといった愛用機器の類。楽器。それにあちらこちらに散在していたのを、全員集合！をかけてあつめた一二〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はそれで十分だ。

碁・将棋盤やゴルフ・釣り具セット。手仕事に感じ入っていた碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。

日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・・・。

どれもお気に入りの「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補だが、その中から五〜七点を選び出して、活動の基点になる机と椅子のまわりや動いて見える範囲に置き場所を決めて配置すればいいことだ。

家庭内に「高齢期のステージ」が立ち上がる。

地球儀なんか意想外におもしろい。東アジアの隅にある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角にあつて、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋国」であることを宇宙飛行士の視点で納得することができる。極東の「小日本（シヤオ・リーベン）」であるとともに、パン・パシフィック（PP）での「海洋大国」としての多重性を活かすことを教えてくれる。

手にいれるのは困難な貴重種だそうだが、蝶の皇帝といわれる一頭の「テングアゲハ」なら、華麗に舞う姿を思うだけで気分は晴れる。胡蝶に同化してひらひらと舞った壮年の莊子の「胡蝶の夢」は、味わって損はない。

旨し「天の美祿」（酒）をとくとくと注ぐ「しりふくら」（徳利。掌の上でのぬくもりはなまめかしい）でもいい。

親ゆずりの高価な骨董品などがあれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」だから候補はいくらでもある。なければレプ

リカを置いてホンモノを探し出すこととなる。

季節に応じて差し替えるのが「季節小物」である。わが家のリビングに四季折り折りの「モノ同士のモノ語り」がはじまることになる。

こうしていくつかの「高齢化コア用品」とそれをめぐるいくつもの季節小物、それに合わせて奥方の持つ「わたしのモノ」の応援をえて、あちらこちらに配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママのありようを伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかつた同居人は、「パパのチェア」や「ママの手編みクロス」や壁飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。

それでいい。モノの「家庭内高齢化」の成立は、モノを通じた親子語りのはじまりを意味する。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた高齢活動家とはいえない。

「家庭内高齢化」が初めの始まり

* バランスいい「三世代ステージ化」が目標

家庭内の「高齢化コア用品」として、「MY・チェア」を推奨したが、高齢期の自己目標にむかう能力を支えてくれる愛用品でありさえすれば何でもいい。

とはいえ、傍らにおいて生涯にわたって愛用していく「コア（核）用品」となれば、数年でモデルチェンジするような消耗品では役不足。だから日新月异で変化する電化製品や車などは高価であっても評価が成り立ちづらい。といって「千年杉」を細工した違い棚のような鮮やかな年代主張はなくともいい。

どうだろう、ここでの「高齢化コア用品」というのは、六〇歳から終生あるいはもう少し先まで考慮した「超人生耐久品」（遺産として残るほど）といったものとして、およそ三〇年利用というあたりをメドとしよう。

「高齢化」の意味合いは「長年化」「優良化」でもあって、だから高齢者だけが利用するという狭い意味ではない。

「長年愛用する優れた日用品」といったところ。

家の中を眺めてのとおり、オープン・スペースに置かれているのは多くは家族共用の家具つまり「三世代ミックス」型用品である。そのうちでも花器や草花の鉢植えや観葉植物や床の間の軸といった「季節の気配」を屋内に取り込む用品・用具は「家庭内高齢化」にはほどよい素材である。高級家具はそろっていても、季節の気配が動かないリビング・ルームや客間なら「高齢化ゼロ！」としての評価を下しておこう。

高齢者の立場からの「家庭内リストラ」を主として述べてきたが、家族構成にもよるが、「三世代同居」のお宅だと、青少年、中年、高年の三世代が暮らすわけだから、共有するものとともに、それぞれが優先的に専用する「三世代のステージ化」が課題になる。

これまでの家族共用品はそのままとして、同居人それ

ぞれの生活動線を考慮しよう。同居人から生活の自由を奪うものでないことが理解されないと先に進めない。

何よりも、わが家に親しい友人を迎えいれるような優れた「高齢化コア用品」がほしい。Iさんのような熟年技術者のみなさん、みずからが納得できるような国産の優良日用品を創り出してください。

ここから熱いエールを送って先に行くとしよう。

三 暮らしの知恵を次世代に伝える

「エンプティネスト家族」の孫育て

* 近居よりも同居が未来型

ここでは六〇歳代の「還暦期」よりやや高齢の「古希期」にある人のお宅の場合を見てみよう。

すでに哀楽をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」と

して想い見るほどのスペース（「エンプティネスト」。空になった巣）を、そっとしておくことができている（家庭も多いことだろう）。

Wさんの場合も、中年期にぎりぎりまで工面して借り入れをし、都市郊外の戸建住宅を購入して転居した。

子どもがそれぞれに自立した後には夫婦ふたりで暮らしているマイホームは、「二世代型住宅」と呼ぶことができる。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるが、子育て期のいくつもの困難をクリアしてきた父と母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、子どもたちとくに娘にとってはひそかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%が同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%台に。大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「TSUNAMI」がトップという時代に、場違いと

いった感じでベストテン入り（二〇〇〇年度の一〇位）したことがあったが、「孫」との同居の減少傾向はなお続いており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

「古希期」あたりの高齢者の「マイホーム家族」のありようは、ここから「わが家の三世代同居型」と「ひとり暮らし型」とに分かれる。後者の場合には、夫を失ったあと（逆も）にはひとり暮らしになる。

ここでは本稿が本来の「日本型標準家族」として想定する「三世代同居」型家族のありようを追ってみた。孫はかぎりなくかわいい。傷みは目立つものの住み慣れた「二世代住宅」に暮らしている父と母は、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、わが家の三代目を養育する場を用意することになる。

「近居」ができている場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。若い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもた

らしてくれる。そこで出合いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあちゃんになる。

だれもがきちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっている、現状ではこのあたりが高齢者にとっては標準的しあわせ家族となっている。

「近居」がうまく機能しているみなさんのご家族のしあわせをここで祈りつつ、このところ減りつづけてきた「三世代同居住宅」の課題をみてみたい。三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。

いままさにその瀬戸ぎわの時期にある。「三世代同居」型住宅は「わが家三代の暮らしの知恵」を子子孫孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。

かつてのヨメ（嫁）の忍従によって成り立っていた農家型標準住宅ではなく、三世代がそれぞれのプライバシー空間を保持しながら、同等の意識で暮らしをとみにす

る大きめの家族住宅である。

「実家依存症」といわれても

* 女系家族の支援で真一文字型就労

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。

近ごろは「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを待つよりも、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー（孫）」がやってくる。

二五歳までの並みの出産期をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代に。これでは少子化に歯止めのかげようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どもをと覚悟はきめたものの、夫婦の不安定なしごとでは養育・教育費が家計の重圧になるのは先方に見えている。

公立でも約一〇〇〇万円、私立だと約三三〇〇万円になるというし、就学前の時期のたいへんさを聞き、マス

コミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、「カアさん力を借して」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。国は夫婦ふたりによる子育てを「新エンゼル・プラン」以来の目標として推奨しているし、若いカップルを対象にして子どものしつけを教えるしごとをしている専門職側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていないのである。

驚いたことには「次世代育成」や「子ども・子育て」の現場では「祖父母」という文言すら文書のどこにも示されていない。これではわが家三代の暮らしの知恵は、祖父母の立場では子・孫に伝えようがないのである。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦がいる。

かつてシュウトメにわずらわされないよう専業主婦を

求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避け
て真一文字型の就業により専業課長でありたい娘世代に
よる「三世代同居」へのUターンである。ここは女系の
母娘とするが、それでも三割強は十分に確保できる。

「三世代同居(三同同)型」住宅

*暮らしの知恵を次世代に伝える

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の
娘家族の要望もあつて、建て替えを覚悟して「世帯同居」
型の住居を建築することになっている。

メーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なく
はない。各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に
対応できるノウハウを持っており、住宅内のバリアフリ
ー化はすみずみまで意識されている。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段
差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩く

したり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下に
したり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・
などが実現されている。「家族とともに成長する住まい」
を提案しているメーカーもある。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお
宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。

そこで、Wさんは参加してみた。大手メーカーによる
広域造成地での建て替え住居だから外形も安定しており、
年月を重ねて街並みに落ち着きを与えていることがわか
る。樹木も育つて、かなり大ぶりのサクラが庭の隅にあ
つて、それを囲むようにL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事に
してきた樹でしてね」

Wさんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻の
ほかは高校生の娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋
と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビン
グ。一角に書斎もあつて、「マスオさん」として「三世代

同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。

上下階の雰囲気違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。

「三世代同居型住宅」として申し分ないが、それでも義母の方の孤立遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省。「高齢社会対策基本法」が成立）が出て二〇年近くになる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもつとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、まだまだ共用スペースのつくりつけがミドル（＋ジュニア）主体に寄りがちになっている。「三世代型住宅」

とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられるのが実情なのである。

これではほんとうの高齢化時代の三世代住宅とはいえない。「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期をゆつたりと暮らす家ではない、とWさんは気づいている。

ここはわが妻であり子の母であり孫たちの祖母である高齢女性の出番である。孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての共有スペースはもちろん、「三世代のプライベート・スペース」と生活動線を等しく織り込んだ住居を目標にして、メーカーの技術者と設計にはいつている。

いま三世代が揃っているにかかわらず、三世代が等しく扱われる同居住宅が「三世代同等同居型」住宅。（長いので「三同同居住宅」と呼んでください）である。「家族みんな考えていろいろ解決することができません

から」と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三代
が出くわすさまざまな場面での処理に期待をこめていう。
「三同居住宅」をいま実現できるW家は「超しあわせ家
族」である。すべてのご家庭にできるわけではない恵ま
れたケースではあるが、多くあつていいケースなのであ
る。超優遇措置を講じて、「しあわせ家族」を増やすこと
だ。おだやかな国民性は三世代あるいは四世代同居に培
われ継承されていくにちがいない。

「三世代同等同居型住宅」の標準化のために、国や自治
体はさまざまな優遇措置をおこない、建設業者はノウハ
ウを蓄積し、企業側は女性社員の地元勤務型キャリアの
設置とともに、子育て期の女性が男子社員と伍して能力
を十分に発揮できるよう支援する。地域と家族は総出で
次世代を育てることとなる。

これまで女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」
とその後アルバイトというM字型就業にかわって、入
社時から高年齢まで真一文字型にしごに集中できる女

性人材として処遇できるようになる。

そして何より次世代に、「わが家の暮らしの知恵」を母
系のつながりを有効に活かしながら伝えることが可能に
なる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父
母と接することによってもたらされる孫世代へのメリッ
トには計り知れないものがある。父は凜々しくしごこと
向かい、家族を包容する。

「うちのジージがね」といつて自慢するジュニアが三分
の一ほどいないと、この国の先人が残してくれた「暮ら
しの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。国の骨
格がもろくなってしまうのである。

同居しながら高齢者をたいせつにするジュニアを育て
る機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築する
ために重要な「三つのステージ化」の一環なのである。

第四章 モノ・職場

Ⅰ 「MADE IN JAPAN」の時代

「サンパク以後（三八九一五）」は片下がり

＊経済的デフレと人的パワーの萎縮

晴れやかだった記憶として思い起こせば、東京株式市場の「大納会」で「東証一部の株価」が三万八九一五円というピーク値を記録したのは一九八九年一月二十九日のことだった。「三八九〓サンパク〓三百」というのは正月三日日に降る祝いの雪をいうが、九〇年正月の東京の空高く株価が舞って「サンパク以後」（三八九一五）はひたすら右片下がりととなった。

それに先立つ一九八九年一月七日に、一〇〇日を超え、る闘病をつづけた「昭和天皇」が八七歳の高齢で亡くなったのだった。八九年六月二十四日には、「東京キッド」や「私は街の子」以来、戦後の日本を体現していた歌手の

美空ひばりさんが、最後に「川の流れるように」を歌って五二歳で亡くなっている。

「やれやれ、これで戦後が終わったのだ」とつぶやいた人びと。「昭和」が終焉し、「平成」とともに始まった日本経済の下降。「明治・大正生まれ」や年長の「昭和生まれ」の人びとのなかには、みずからの戦後を顧みても終息感と、その後の「経済の萎縮（デフレーション）」とを体感として重ねて理解した人が大勢いたのだった。

戦乱で亡くなった人びとへの鎮魂の思いは消えずとも、自分の肩にかかる荷だけは静かに降ろし、長かった緊張を解いたのだった。将来の高齢期の新しい目標「日本長寿社会」構想も見当たらなかったし。

「われにかえった」一人ひとりに「内在する萎縮（デフレーション）」は、ゆっくりとした静かな変容であり、外から気づかれることはなかった。

しかし戦争を知り貧しさを知るといふきびしい経緯をもつ自分たちの後を、戦争も知らず貧しさも知らない若

い連中が一对一で引き継ぐことなどできないだろうという自負と憂慮をない交ぜにした感慨は、仲間同士の会話のうちに繰り返された。

それがすべてではないにしても、企業現場からの自分たちの隠退（労働力・構想力の消滅）が、総体として「日本経済や社会の萎縮」をもたらす要因となるだろうことは予測しえても、まさかこれほど早くに高齢者となった自分たちの医療費の負担増や年金の減額や消費税増税が現実になり、あろうことか若年層から不公平との反発まで浴びようとは、思いもよらなかったことである。

「九割中流社会」はどこへいった？

＊誇るべき「社会主義的平等主義的自由経済の国」

一億人を超える国の国民の九割までが「中流と感ずる社会」を実現し、しかも長期継続（一九七〇年～一九八九年）したことは世界にも例がないだろう。

八〇年代に、「日本は社会主義的・平等主義的・自由経済の国だ」と外国人に向かって紹介したのは、「大正人」のひとり、盛田昭夫さん（当時はソニー会長、経団連副会長）だった。盛田さんは、外国人に日本の「国のかたち」を問われると、自信をもってそう説明していたという。国際的基準の中で、世界の開発途上国から目標とされる先進国として立ち現れたのである。いま高齢者になつていくみんながその経緯と成果をリアルタイムで体感してきた経験をもっている。

「九割中流社会」というのは、中国で歴代の為政者が目標としてきた「大同社会」にほど近い社会（いまの中国は「小康社会」をめざす）であり、したがって歴史的にも貴重な体験なのである。

『礼記』では「外に戸を閉ざさず、これを大同という」（「礼運」から）といい、『水滸伝』でも「路に遺ちたるを拾わず、戸夜に閉ざさず」（「第一回」から）という太平の世を夢見ている。「夜に戸を閉ざさず」に暮らせる社

会。「セキュリティって何？」という社会である。

また「路に遺ちたるを拾わず」は、拾わないのではなく、落とした人のところへ戻ってくる。そういう時期が一九八〇年代までは確かにあった。

いまや世界が狭くなり、どこからでも侵入者、破壊者がやってくる時代。大戦後の局地的な小世界「日本」だったから可能だったのだろう。ポートピープルがめざした国である。つい三〇年ほど前のこと。

いまも「シニア海外ボランティア」の高齢者や日本企業の現地駐在の高齢社員が、開発途上国の現地の人びとから心からの信頼をかち得ているのは、生産者としてユーザーが満足する品質（モノ）にこだわるとともに、背後に息づく品格（ヒト）がおのずから伝わるからだ。

「みんなが中流」という意識に亀裂をもたらすこととなる日本経済の「萎縮」（デフレーション）がはじまったとされるのは九〇年代初めのころである。

『MADE IN JAPAN』6時代

* 丈夫で長持ちする中級品が国外での評価

物質的にはしゃにむに近代化（といっても多くは戦勝国アメリカ化）をすすめた日本は、外国から素材を買い、丈夫で長持ちする良質な製品を作って売る「加工貿易立国」として第二の開国を行い、国土の再建をめざした。鉄のカーテン（ソビエト）や竹のカーテン（革命中国）のむこうの「社会主義」にも関心を払いながら。

日本経済の頂上期に、盛田さんが書いた『MADE IN JAPAN』（一九八七年）は、そのあたりのことをこう記している。

「国内のマーケット・シェアをかけた激しい競争を通し、海外での競争力を養うのだ。エレクトロニクス、自動車、カメラ、家庭用電気製品、半導体、精密機械などが、その代表的なものである」

日本製品の多くは高級品ではなかった。「良質な中級

品」、つまり一般の人びとがもつとも必要とする良質なものを作ることに活路を見い出してきたのだった。良質というのは、「使いやすく、丈夫で、長持ちする」という意味でいわれた。

前記の商品は国内でよく売れば、それは外国とくにアメリカで評判がよく、「MADE IN JAPAN」のトランジスタラジオ、カメラ、テレビ、小型車など良質な中級品は、実用品として認められてきたのである。それがまた日本人みずからの生活を平均的に充足し、中産化する事になった。良質な技術者が「良質な中級品」をつくり提供することがわが国の立国の基盤であることは、心に銘じておかなければならないことである。

二 途上国産の中級品に囲まれて

「家庭用品の途上国産化」

* 平和裏に「アジアの共生(豊かさの共有)」へ乗り出す

家庭用品は、丈夫で長持ちする優良国産品があたりまえだったところへ、「途上国産品」が混じり出し、目立つようになり、はては国産品はどれというようになるまでにせいぜい一〇年あまりといったところだった。

経企庁長官だった堺屋太一さんが、流行語になった「日本列島総不況」といったのが一九九八年だから、そのころから本格化してのことだろう。

それまでは舶来品といえば、おおかたは欧米からのブランド品で、途上国からの輸入品などはさして見られなかった。ただし食品だけは別で、「山海珍味」として早くからあって、これは東京では明治屋や紀ノ国屋の店頭をにぎわしていたが。

その後「衣料品」からはじまった「家庭用品の途上国産化」。ほかの製品への広がりには、日新月异の勢いで進んだ。暮らの中、「MADE IN KOREA」か「MADE IN CHINA」や「MADE IN THAILAND」・・・とあったア

アジアの国々からの日用品が次々に国産品に入れ替わる度
に実感されてきた。

「エッ、これもか」と驚くほど早く「モノの途上国産化」
は進んで、精密機器にも及んでいった。

国産品の将来を危惧しながら、不況下で収入が減った
わが国の消費者は、「安価」をよしとして購入した。途上
国製品は、悪貨（ここはマネーでなくグッズ）が良貨を
駆逐する態で家庭内に次々に侵入した。

丈夫で長持ちする純国産の優良品に囲まれて暮らして
いた一九八〇年ころと比較すればよくわかる。一九八二
年が小売店のピークだったという。そのころは全国に商
店が一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所もあったと
いう。数もそうだが商店街には人をひきつける活気があ
った。商品知識ばかりか人生の先輩があちこちにおいて、
元気がもたらえたのである。

商店街はモノと暮らしの情報源でもあった。歳末の商
店街の活気はなつかしい記憶になった。そのころ購入し

た優良品のあれこれがまだ暮らしの中で生きている。

日本企業の海外進出は、生き残りをかけてといわれる
ほど業績悪化の果てであったが、アジア市場ではヨーロ
ッパ系企業や韓国企業にあきらかに時期遅れではじまっ
たものの、現地での歓迎と期待はすこぶる大きいものが
あった。

ひところポルトガルが掛けていったあこがれの
日本から企業がやってきたのである。

「日本の製品を使って日本人のような暮らしをしたい」
というアジア途上各国の人びとの願いが叶いつつある。

これは少し言い過ぎを承知でだが、「アジアの共生（豊
かさの共有）」へむかって、私企業による公益的成果とし
ての日本ブランドは、アジア各地にしっかりと着床して
いるのである。歴史的視野でみて、日本が誇っている世
紀の国際貢献である。

日本ブランドの輸入製品を逆にたどれば、アジア諸国
の人びとの暮らしに日本企業の進出が大きな変化をもた

らしている経緯と成果が推察される。

いうまでもなく現地を仔細にみれば、韓国企業や中国企業の進出もあり、日本企業は生き残りを懸けて事業を展開しており、現場での誇るべき成果は派遣社員の並みならぬ指導を身に受けて、日夜を徹して移入に努めている現地従業員の熱意の結果なのである。

東アジア(東亜)の現場に遣いする技術者のなかには、「企業戦士」と呼ばれた高年技術者も多数ふくまれていくはず。技術伝播の熱意は欠かせないからだ。途上国に渦巻く「グローバル化」という経済時流の荒波は、わが国の家庭を「日用品の途上国化」という形で席卷した。

国内でほどなくして、「百均」(一〇〇円均一ショップ)が成り立つほどに製品が多種多様になって、製品も「安かろう、悪かろう」という粗悪品の時期を足早に過ぎて、品質が安定してきている。「中級品」の時期にはいったと云うていいのではないか。

海外の現場ではそれぞれの事業ごとの仔細な理解が必

要であろうが、海外進出した「ユニクロ・UNIQLO」や大創(ダイソー・DAISO)の動向をみれば「アジアの共生(豊かさの共有)」が時流の奔流となっていることが理解される。

前世紀に戦場となった地で、「平和裏」に展開される「モノと人」の交渉や交流を通じて、各国の民衆は、わが国が平和国家であり、民主主義によって「しくみ」をつくり、暮らしの場を構成し、ユーザーが納得する優れた「モノ」づくりをし、従業員に差別なく接していることを理解しているにちがいない。言い過ぎでなく日本企業とその社員はわが国を代表する平和の遣使なのである。

「政冷経熱」を繰り返すのは政治家であるが、かつて日本が富国のために軍事力をもって海外進出した時期と環境が違うことを歴史的経緯として理解していない。

当時は中国もソビエトも革命の混乱期にあり、アメリカは太平洋国家ではなかった。いま三国はわが国をめぐる三大国である。「小日本」はいま国防軍の強化や憲法改

正を声高にいう時期ではない。交流の本流を「アジアの共生（豊かさの共有）」という国際主義に位置づければ、アジアのどこの国とも「平和」を前提にした「互利互惠」が指向されるはずである。

大戦後を思い起こせば、新生日本は中立国スイスのような国際主義・平和主義国家をめざした。各種の国際会議が開かれ、国際団体のブランチが数多くあるような、海外からの訪問客が常時いるような。そして民族・宗教・性別・年齢の差別なく、どこの中小国をも等しくあつかう平等主義の国家として。

国から地域へ、いま住民と中小企業と自治体が地域の活性化を国民運動とすることで国を守る意識を醸成する。「特性ある地域」の発展と地産品の形成が「平和の証」となる。それとともに自治体がアジア諸国の友好都市との市民交流を深めることが「アジアの共生と平和」を厚く確かなものにする。

途上国産の中級品に囲まれて日本の家庭がまあまあな

のは、「アジアの共生（豊かさの共有）」が着実にすすんでいる証なのである。

途上諸国包围による「日本途上国化」

* 家庭内の日用品と企業の非正規社員化にみる

中国へ進出した日本企業は、上海だけでも三〇〇〇社を超えるという。それぞれ社名の漢字表記に苦労しているのはご存じのとおり。いくつか例をあげてみよう。

たとえば「優衣庫」（ユニクロ）、「三徳利」（サントリ―）、「索尼」（ソニー）、「施樂」（ゼロックス）、「佳能」（キヤノン）、「樂天」（ロッテ、まぎらわしいが音ではルオ・テイエン）、「華歌爾」（ワコール）、「百樂」（パイロット）、「養樂多」（ヤクルト）、「日波」（サンウエーブ）、「可果美」（カゴメ）など、「資生堂」「富士通」「麒麟」「味之素」「朝日新聞」などはそのまま。

製品化の現場では、技能も人格も優れた多くの派遣社

員がことばや生活の不便さに耐えてしごとに当たっている。前項でもみたように途上国主導の「グローバル化」の対応に日本企業がサバイバル（生き残り）をかけて選択した荒療法が、生産拠点の途上国シフトと社内リストラだった。両方ができる企業はそれを急いだ。できない企業は社内リストラをしながら社会の萎縮（デフレーション）に耐えてきた。

わが国は前世紀にアジア地域でただひとつ、「欧米追随型の先進国化」をなしとげて途上国を脱していたが、アジア諸国の人びとの近代化への熱い思いを理解していなかった。そのためになすべき役割をはたさなかった。背後から起こった途上国主導の「グローバル化」の進展にうながされて、資金、人材、ノウハウを移出して、途上国の需要に見合う日本ブランド品の生産をめざした。対応の遅れで、企業は「生き残り」を懸けた進出となった。その結果として国内での対応が混乱し、これまでの「終身雇用」型の正社員では経営がもたなくなり、アルバイト

トや派遣社員で支える「日本の途上国化」対応が急速に進んだのは、現れて当然のグローバル化症候群であった。日中間でも友好交流が進み、平和裏に「互利互惠」の経済進出がみられたのに、「政冷経熱」といわれる政策選択によって繰り返し状況を悪化させたのは政治の側である。ひととき電球や電池は安くなったがすぐ切れる粗悪品になった。メーカーを見ると日本を代表する企業である。

広州では「日本の優良企業の索尼（SONY）がこんな製品をつくっているのか」という風評が立たざるをえなくなる。これがアジア共生のための「日本の途上国化」の実態であり、「余儀なく受けざるをえない悪評」である。高齢者なら体験としてわかることだが、かつて日本が成長の途次にたどったX地点まで戻っておこなうアジア共生のための「共同歩調」であり、日本のなすべき責務なのである。現地で尽力する日本人社員が現地職員に「ありがとう」と率直な謝意を受けることはしあわせなことであり、その謝意の半ばは戦後に会社をつくった先輩に

捧げるべきものだろう。

踊り場で「足踏み」して待っていた日本の熟練技術者は、「家庭用品の途上国化」のために被害をこうむりながらも、理解者として眺めてきた。それゆえの「足踏み」であったから、時をまつて再開する国産化（地産化）のための技術や意欲まで失うことはなかったのである。

やや高安心の「国産優良品」が再登場

*「足踏み」して待つ各地各界の熟練技術者

国内の高齢者の暮らしが、企業の海外進出によって快適になったわけではなかった。この間、高齢者は、アジア途上国でのプロセスがいつかたどったわが道と重なることを心得て、「足踏み」をして見守ってきたのである。アジア途上国産の製品が「中級品」に達したのを見定めて、国内産の「やや高だけれども品質が安定しており、安心もいっしょに買うことができる日用品」（高級品では

なく優良品）から製造に取りかかる。

その好例として今治のタオル（IMABARI）がよく引かれる。吸水性のいい「使って気持ちが良いタオル」とことん追求してえた技術結集の成果であり、「やや高だが安心して使える優良品」のモデルになっている。

こうした日用品の中に「MADE IN JAPAN」を見つけると、国民は技術の保持にほっとするし、滞らせていた生活感性がもどってくる楽しみも生まれる。途上国製の電動をやめてチタンコートの手動ヒゲソリを使ってみよう。剃り味抜群であっばれの心地よさなのである。デフレ（萎縮）からの脱却は、こういう小さな生活感性の再生が本筋なのではなからうか。

わが国の高齢者層が、このままでこれ以上に途上国製品に埋もれてしまうことなどありえない。優れた生活感性をもつわが国の高齢者にとって使って心地の良いものとなる「国産・地産優良品」が、とくに若手高齢者「団塊の世代」ユーザーからの要請によって動きます。「雨過

天青」といった明快さで技術レベルの高い国産の新製品が現われて、暮らしを明るく豊かにするだろう。

都内のデパートは、さすがに変わり身がはやい。この秋には顧客ターゲットを若者・女性層から高齢者層に替えての改装をおこなった。「モノ」の生産現場より顧客に近い流通現場のほうから反応がはじまる。イオンの「G G (グランド・ジエネレーション)」戦略に人生を楽しむグラジェネ世代がどう応えるが注目されている。

サービス部門では、「セブンイレブン」や「イトーヨーカドー」や「J P (日本郵便)」が先行している。

しかし注意すべきは、デパートの若手担当者が口をすべらせたように、「高齢者の富裕層を対象にして」と格差の存在を認めていたことにある。わが国の熟練生産者は、高級品をつくるのではない。途上国産品を見たらうえでその上をゆく優良中級品、みんなが心地よく使える優れた国産品を、多くの人に提供しようとしているのである。

だれもが体験したように、家庭の暮らしの場に急激な

グローバル化がもたらしたものは、総不況で稼ぎ手の収入が不安定になり、実質的に減ったところを、家族みんなが安い途上国産品で補いあって収支を合わせ、「家庭内国際化(途上国化)」を時代の要請として受け入れてきたことといってよい。

世界中から運ばれてきているそれを逆にたどれば、現地の人びとの暮らしを便利にしている日本商品がたどり着いた水際の広さが知られる。

その対価として運ばれてきた「安価な輸入食品」は、「飽食の時代」といわれるまでにこの国の食卓を豊かにした。その中であって、日本各地からの食材は苦戦を強いられてきたが、モモ(山梨) もリンゴ(青森・長野)もサクランボ(山形)も、産地の努力がうかがえるほどに質の差が歴然とし、価格がほどほどに収まっていれば、「やや高だけども優良な国(地)産食品」は品が良く安心な季節ものとして受け入れられている。それはわが国のユーザーにモニターされた「優良な輸出品」となる。

一次産品でもそうなのだから、他の商品ならなおさらだろう。生活感性の高い高齢者は「モノの途上国化」に納得しながら、購買者として「生活水準の途上国化」に耐えながら、「やや高安心の国(地)産優良品」の登場を待っていたのである。

「高齢化経済活動」が財政難を克服

*「成長+成熟」社会を創出する

マイホームでの「M・Y・・」が増えて、肌で感じられるほどに「国産・地産優良品」が身のまわりに安定した存在感を示すとき、「日本高齢社会」を下支えする「高齢化経済活動」の安定した姿が見えてくる。

再度確認しておくが、優れた生活感性を持つわが国の高齢者層が、このまま途上国製品に埋もれてしまうなどということとは決してありえない。

たいせつなのは、生活を支える良質なモノの創り出し

に乗り出す供給者となるとともに、すぐれた製品の味わいを享受する需要者となること。生活感性の高い「現役シニア」としての活動を活発にすることである。だれもが「高齢化優良品」のメーカーでありユーザーであること。そうしてはじめて各地各界の中小企業は、熟練技術者を中心にして新開発に挑む体勢がととのう。引退した社友も参画して、みんなが愛着をもって使える製品を送りだす高齢化ルネサンスである。

その成果として、幕張メッセを賑わすような「国際高齢化製品展示会」が催されて、外国人バイヤーが集まることになるだろう。これは広州でも上海でも不可能な日本が独走するイベントである。

一つひとつは小さくとも、着実に優良製品化が成功して増えることで、現有の経済圏にさらに「高齢化製品経済圏」を上乗せする「子ガメの上に親ガメ」といった趣きの経済活動が展開されることになる。

「高齢化製品」の開発に成功した業種がふえ、地域高齢

者が参加した地産品がふえることで高齢期の生活を豊かにし、それによって内需を安定させる。海外の高齢者が求める良質の「日本製高齢化製品」は、「加工貿易立国」としての伝統を引き継ぐことになる。

今がその歴史的に優位な時期なのだが、日本高齢者の持つこういう「世紀の役割」を感知できず、能力を發揮する環境を整えることなく渋滞させてしまったのは、だれか。わが国の「新世紀の役割」を感知できなかった責任を歴史的に負わなければならない。

三 新日本型マネジメント

「新・終身雇用」と「新・年功序列」の展開

*「日本型マネジメント」の新しい企業樹形

「終身雇用制と呼ばれてきましたが、実際には六〇歳定年制が一般的だったですよ」といわれれば、そのとお

りである。

たしかに「終身雇用」といっても終身ではなかったものの長期（無期）であり、先輩から後輩へとわが社流儀を伝えながら生涯支えあう信頼と平等の絆の表現として「終身雇用」は引き継がれてきた。定年後も、終身のつきあいを建てる前とする「愛社意識」として保たれてきた穏和な伝統なのである。

「モノ・職場」を論ずるこの章で、日本型企業の基本とされる「終身雇用」を避けて通るわけにはいかない。異論はいろいろ想定されるが、本稿の立場は明快である。

入社したての新しい能力を秘めた若手社員は先輩社員を敬愛し、中堅社員は会社や製品を育ててくれた引退社員を敬愛する。それが率直に表わされることが「終身雇用」の安心感となり、「年功序列」として先輩への敬意となり、「和の絆」の信頼感となり、最良の製品を提供することをめざす日本型企業の基本となり、国の骨格を支えている「日本型マネジメント」による生産活動である。

思い起こせば、一九八〇年代には「日本型マネジメントは世界一」(ジャパン・アズ・ナンバー・ワン)とみていた海外投資家に、二〇年後には日本企業の利益率が低いのは「終身雇用のせい」といわれるようになる。原因は「終身雇用」のせいではなく、企業内の人的パワーが弱体化したせいなのだ。いまでも七〇%以上の労働者は終身雇用制を支持しているのだから。

企業にとって社員同士が信頼しあい生産技術を共有し、将来にわたって安心して働ける場であるということ、つまり「終身雇用」や「年功序列」といった日本型企業の基本樹形をつくっている「日本型マネジメント」のどこがいけないというのか。

業績がいいトヨタやキャノンだから支えられたのではなく、いずれの企業も根・幹として守ることができるはずの慣行なのである。「終身雇用は高コスト」と評されて納得してしまうのは、現場において全容と本質が見えない社員の自己保身の判断なのだ。

いまある企業は、いまの社員のためではあっても、いまある社員のものではない。

先人が敗戦の焼け野原の下に温存されていた根っこから、「生き残る」ために敗戦後の状況に適応させ、試行錯誤を繰り返しながら樹形を整え、枝葉を茂らせてきたものである。苦難の中で模索し、選択してきたのが「終身雇用」であり「年功序列」と呼ばれる企業慣行であった。

それも経緯が穏やかであったわけではない。

企業の存続をゆるがすような社内争議を、「起て飢えたる者よ・・」で始まる「インタナショナル」を歌って社屋を包囲する労働者側と、受けて立つ経営者側との間で何度も繰り返したすえに形成されてきたものである。だから若い社員が思うほどにやわな企業樹形ではない。

先人が戦禍の跡から苦闘のすえに育てあげてきた基本樹形である「日本型マネジメント」を、まるごと伐採してしまうような軽率な改革は避けなければならない。

といって頑なに固定的に捉えることではないだろう。

「グローバル化・途上国化」には若年層を当てて対応しながら耐えてきて、いま顕在化して迎えている「高齢化」製品のためには「高齢化社員」で対応しなければならぬ時期なのである。それを成功させることが、先人がたどってきた苦難から新たな「日本型マネジメント」を作り直すプロセスではないか。

若年・中年中心の社会であるアメリカと違って、「経済のグローバル化」とともに「社会の高齢化」を合わせ迎えている日本社会の変容に、どう企業システムを対応させていくかに苦慮している時に、「日本型企業」の全否定にむかう意見が先行するのは困ったことだ。

「新商品開発の遅さ、人事異動の不活性、非採算性など、みな日本企業のもつ特殊性です」といつてのけ、個人の能力にインセンティブを期待する「個人主義」、社内競争による「成果主義」といった手法を導入する。したがって給与も能力優先の「職務給」にシフトして、終身・年功型給与の基本である「年齢給」や「勤続給」を縮小あ

るいは廃止する。

本稿の立場からすれば、たいせつな幹に傷をつけるような愚かな変革にも着手してしまふ。わが国の企業風土では、成果を個人に還元する「アメリカ型の成果主義」はインセンティブとして効果を生まないだろう。国家の根幹を支えている日本型企業の活動をよわらせ、企業風土をよわらせ、製品の輝きを失わせてしまふであろう。

導入してみてもアメリカ型マネジメントのもつ脆弱性に気づけば、日本企業の「終身雇用」と「年功序列」がいかに有効な「日本型マネジメント」の骨格であるかに思い及ぶはずである。つまり加速する「社会の高齢化」を支える良質な「高齢化製品」開発のために高齢技術者を温存し、「終身雇用」をわが国に固有の企業インセンティブとして捉え直すこと。そうして初めて日本企業の「成長+成熟」への道が見えてくる。

そのためには外国からはうらやましがられていいほどに好都合な「終身雇用」と「年功序列」という在来の企

業風土としくみがあり、世界レベルの経験も知識も技術も気力もある現役シニア（本稿の「昭和丈人層」という良質な高齢社員・社友がいるという歴史的優越性に気づくことになる。

「日本高齢社会」を礎のところで支えていくのは「日本的企業風土」に根ざした「日本型企业」であり、熟練高齢社員である。いま輝いているグローバル化企業というのは、時流による外圧に対応する緊急処置としての業態であり、やがては「日本型企业の基本樹形」に回帰する「宿り木業態」なのである。

日本企業の苦境脱出のために、再逆転の思考「高齢社員優遇の再リストラ」がすすむ。グローバル化（途上国化）に対応するために若手・女性・中年者の優遇によってなされた時流対応の「リストラ」の契機は、今度は世紀の潮流である「高齢化」に対応する「再リストラ」として、わが社の「高齢化優良品」の創出をめざしてすすめられることになる。

その過程そのものが「終身雇用」や「年功序列」という伝統の愛社意識の新たな表現であり、「日本型マネジメント」の真髄がよみがえる愉快な局面である。

「社は」を読み返す。愛社意識を醸成しながら「再逆転」に立ち向かうには、なによりも「和の絆」によって培われた製品開発でのわが社の来歴を活かすことだ。これが日本企業の「伝家の宝刀」なのである。

「窓際。パラレル・キャリア族」の模索

* 定年延長で「高齢化自社製品」が登場

将来構想に秀でていうことでトップについて人に替わって、目前の業績悪化に歯止めをかけられる人物として推されて座についた経営トップたちは、まず何から手がけたか。

社内では一円を争うような細かな経費節約をなりふりかまわず徹底した。社業として歴史があっても赤字事業

ならやめて「ダウンサイジング」（適正規模まで縮小化）をし、目前で利益が見込める製品にシフトして売り上げ増を督促した。そして人件費圧力に対しては、アルバイトや派遣社員で対応し、返す刀で企業の発展を支えた仲間の「高齢社員リストラ」をやつてのけたのである。

どこからも拍手は沸かない。

「グローバル化」時代に生き残るためには、まずは速やかにそうするより他に手立てはないと信じて強行した。

部局単位の採算性を採り入れ、IT化・アルバイト化をはかり、遅速はあっても製品の「若年化・女性化」を推し進めた。そのプロセスの背後で高齢社員の作業意欲は萎え、リタイアした先輩には想像ができないほどに「経営者不信」と「モラル・ハザード」（社員倫理の崩壊）を社内に広げることになった。

「日本高齢社会」を構築するプロセスは、先進他国から学んで後追いするのではなく、国内にあるみずからの内的条件によって自力で創出すべきものである。

ここは「日本での解決がモデルとなる」という推測を残してくれた故P・F・ドラッカー教授の洞察を脇にして考察したい。

教授によれば、マネジメントされる存在だった働く者（知的労働者）が、みずからをマネジメントすることによって現出する新しい社会、日本でのその解決が他の国のモデルとなるという。

「終身雇用制によって実現してきた社会的な安定、コミユニティ、調和を維持しつつ、かつ、知識労働者に必要な移動の自由を実現すること」と洞察していた教授は二〇〇五年に九六歳で亡くなったが、その示唆は実態が後追いするように生きつづけている。

日本の高齢知識（技術）労働者の模索は、その方向に着実に動いている。それは「本格的に踏み切る前からの助走」の時期、つまり五〇歳代の人びとが将来に心躍る人生を見出すための「パラレル・キャリア指向」として確認することができる。もうひとつの人生を指向する五

○歳代の高齢社員の先方に現れるものは何か。

「自立と自己実現」の高齢期人生である。

これが日本型企業の将来を左右することになる。社会構造の「高齢化」を見据えて、それに見合う社内の「ミドル化」と「シニア化」という多重標準による企業改革への契機なのである。

パラレル・キャリアに関して、Eさんの例をひとつだけ記しておこう。

Eさんは、定年間近かの高年社員のひとり。「あと数年だから」と定年を待つ「定年待望族」（六五歳まで）としてはいたくないと考えている。高齢期に経験を活かして意欲的に何かをやる時がくると思ってきた。ところが近ごろ胸の奥に居座っていたはずの「愛社意識」を押しつけて、「モラル・ハザード」の波がとめどなくやってくるのを感じている。

胸の内のそれが許せない。かつての同僚の無視する視線や若手社員のかせぎ頭意識やアルバイト女性の言動が

起すささいないらだちが溜まる。職場での集中力が落ち、しごとへの意欲も萎えていくのを感じる。これまでなかった自宅と職場での感覚のズレが意識される。

会社人間としての緊張が薄れるにつれて、「起業」はどこにいてもチャンスがあるのだとEさんは気づいた。そこで他者として自社が所有している地図原版を生かして、自分と同じ年配の人びとの暮らしに役立つような「高齢者向け地図」という「わが社製品の高齢化」の企画を試みることにした。

社内の逆流の中で提案しても「ゴミバコ騒がせ」にしかならないから企画案として出すつもりはないが、やっていておもしろい。一時間街歩きのリゾート所、老舗、古書店、史跡、寺社、並木、高齢者向けのスポットはいくらでもあるからだ。とりあえずは職場での気力の萎えに歯止めをかける。Eさんの「窓際パラレル・キャリア族」としての意識は前向きに働いている。

「社内ミドル化部門」と「社内シニア化部門」

*多重構造による「攻めの再リストラ」

「改正高年齢者雇用安定法」が二〇一三年四月に施行されて全社員が六五歳まで働けることになった。

これを機に、若年・中年社員が働きやすいように、これまでのリストラ体制をいっそう推し進める「社内ミドル化部門」と、高齢者が高齢者みずからの生活を支える自社製品を企画・製作する「社内シニア化部門」という多重化への変容がすすむことになる。

後者の中心になるのが、いわゆる「窓際族」として会社の内外を見ながら待機してきた高齢社員である。「社会の高齢化」にそれに見合う「企業の高齢化」対応によって、日本型企業の変容がはじまる。新入社員が安心してふたつづきの職場を選べる「新・終身雇用」の導入でもある。それは先行き明るい心はずむ入社になる。

途上国側では創業だが、歴史の長い日本企業は、グロ

ーバル化のための「社内ミドル化」で対応した。これからは「社会の高齢化」対応の「社内シニア化」を同時進行する。企業は高齢社員の「パラレル・キャリア」指向を支援することになる。堀田力さんが提案してきた名刺両面利用はここでやつと現実となる。五〇歳をすぎた社員のウラジロ名刺は恥ずかしいことだからである。

「グローバル化」対応の時期に、企業が高齢社員を「窓際族」や「出向」として冷遇せざるをえなかった経緯はそれとして、「高齢化」対応のためには高齢社員の経験と知識を活用して「わが社製品の高齢化」を模索することになる。高齢社員は「社会の高齢化」と重ねて、高齢期人生を豊かにする「製品の高齢化」を実現する。そうして初めて「企業の高齢化」がすすみ、「社会の高齢化」を支える企業人としての手応えが確かなものになる。

この「高齢化先行国」の課題を解決するマスターキーは、メーカー主導で展開しているアメリカ型企業にあるのではなく、製品のユーザーでありメーカーである日本

企業の高齢社員が持っているはずである。

優れた技術力を持ったまま退職した前出のYさんのような人なら、みずから顧みればおわかりいただけることだが、自分の高齢期の暮らしの基礎となる「製品の高齢化」を果たせずに引退しておいて、他の業界からの優れた「高齢化製品」を待っても得られるわけではない。業界でもっとも製品企画や製造技術や販売戦略に精通していた高齢社員として、「わが社の高齢化製品」の開発・流通を果たすチャンスを逸してきたことを、退職したあとで指摘されても、Yさんだって返答に窮するだろう。

企業としては「グローバル化企業」に変容して、アルバイト、派遣社員を導入して必死で「途上国化」に対応している時期に、「社会の高齢化」にみあう「企業の高齢化」や「製品の高齢化」まで考えることはむずかしかつたにちがいない。よし世紀の潮流だとしても。

しかし企業現場で、Eさんのように「製品の高齢化」を考えることはできる。その努力が「企業の高齢化」を

もたらすことになる。一方、Yさんは「製品の高齢化」に応ずるシステムを整えるどころか、愛する企業の生き残りのために後人に期待して席をゆずり、蓄積してきた技術と経験を惜しいとは思いながら退職したのだった。企業側もそれを当然としてきたのである。

二〇一三年四月から「改正高年齢者雇用安定法」が施行されたが、高齢社員にとっては、高齢期の人生設計と「製品の高齢化」・「企業内の高齢化」は同時進行で試行されねばならない企業内努力なのである。

「社内長寿社会構想会議」を設置する

*「超高齢社会」にみあう社内改革の拠点

ここでは「高齢社会」に対応する企業リストラの本題である「社内シニア化部門」のありようを論ずることになる。これまでの「六五歳定年余生型」ではなく、人生の成熟をどこまでも追い求める「九〇歳長命現役型」の

意識をもつ高年社員が中核となった「社内長寿社会構想会議」が、「自社高齢化製品」の考案・開発を討議する。

これまで長く主要事業だったが現状では赤字回復が見込めないという理由で停止してしまった製品でも、自社ブランドの「高齢化製品」として優れた特徴をもつものなら蘇らせることもある。それとともに、「異業種高齢化製品」にも関心を広げて新製品化を検討することになる。

メーカーであるとともにユーザーである強い生活意欲をもった高齢社員が「攻めのリストラ」に力を発揮する。「長寿社会構想会議」のスタッフとしては、社員・社友から企画力と想像力の豊かな人材を動員して構成し、生括者として発想した「わが社の高齢化優良製品」を開発する。それは具体的な製品化にふさわしい総合力を発揮することになるだろう。

「長寿社会構想会議」は、現有製品のひとつ上のレベルのリニューアル製品や高齢者の暮らしを支える新たな「高齢化製品」を企画し製作をすすめる。かつて企業の

業績を支えたスグレモノ製品を作り出した引退社友もまた要請に応じて参画する。また異業種からの人材を採用する。いずれは厚生施設の運営費用や企業年金分などは「社内シニア化部門」と「長寿社会構想会議」企画の製品が稼いだすが、将来性のある日本型企业である。

高齢社員が総力をあげて当たる高齢者みんなのための「わが社製品」、新たな歴史を刻む「日本高齢社会」のために「優れた高齢者専用品を送り出そう」と決めて、新ブランド商品をめざした企画にはいる。

「社内シニア化部門」は、さらに将来の国際的な高齢化時代の到来にも目をむけて、品質のよい「日本製高齢化製品」として、将来かならず海外の高齢者が競って求めるような輸出製品の準備をする。「日本高齢社会」達成への途上での心躍る情景ではないか。

「社内ミドル化」と「社内シニア化」という多重標準による「攻めのリストラ」は、終身雇用を伝統とする日本型企业ならではの企業改革なのである。

明治維新期と昭和大战後と今回の新世紀初頭期の三回の外圧を乗り越えて根をはった「日本型企业」は、二一世紀中葉にむかって大きく枝を広げていくだろう。

企業多重化の改革は、時流である「グローバル化」と、潮流である「高齢化」に見合う企業改革となる。前者は若手・中堅社員を中心にして製品の国際化に対応し、後者は高齢社員を中心に引退社友をまじえて、わが国の高齢化の進展に見合った国内需要に備える。

社内体制を固めるに当たっては、成員を定年までの社員ですませることなく、引退社友を加えるとか、さらには異業種からの社友を迎えろとか、職種や社内事情に見合った構成になるだろう。

両部門では異なった就労形態や給与体系が検討される。このあたりの対応の仕方が、日本型企业の「新・企業樹形」を新たに作ることになる。

このわが国に固有の有利な特徴である「終身雇用制」を生かした日本型企业の多重構造、つまり「社内ミドル

化」と「社内シニア化」という二部門を両立させる改革の成功なくしては、わが国の企業ばかりか、社会もそして家庭も、固有のよさを保ちながら「高齢化時代」に応ずることができないのである。

「SWIT会議」による日本型企业指向

*「新・企業家族主義」が全人標準に

スウェット (sweat 汗をかくきつい仕事) ではない、「スウィット」 (swit) である。シニア (Senior) 社員、女性 (Women) 社員、IT (Information Technology) 社員による新製品開発のための合同会議が「SWIT (スウィット) 会議」である。

ここにひとつの「新・日本型マネジメント」の生き生きした現場が登場する。新製品開発の場で、それぞれ生活者として異なった立場からの多角的な検討を、とことん加える社内協議の体制ができた「日本型企业」が、家

庭向けにコーディネートした最強の商品開発力を発揮する。個人の成果にインセンティブを置くアメリカ型マネジメントを学んで改革に動いた企業に圧倒的に勝利する新製品を登場させることになるだろう。

生産者側のマーケット・リサーチと利己的判断に基づいて製品化するという現在の「グローバル・スタンダード」(国際標準)を超えて、わが社の利とともに、それにも増して消費者の益を願う「モノづくりの志」が明確に表現される日本製品を、「SWIT会議」を通じて示すことになる。

新製品開発の場で、さまざまな視点と知識と経験をない交ぜにして展開する「SWIT会議」は、日本企業の「新・企業家族主義」への可能性を蔵している。未知の領域に挑む「IT製品」と、日本社会を質的に多彩に変える「女性向け製品」と、経験を裏打ちにした成熟度、完成度の高い「高齢化製品」を開発する部門の社員が、それぞれに論じ、さらに合議する場合は、穏和な職場環境

を醸成する核として機能する。

コーディネートされた新製品は、外国企業からうらやましがられる存在になるだろう。個人の成果主義に片寄らず、日本型企業ならではの企画・製造・販売のプロセスを経た製品だからである。

他企業の製品は、店内でこそ個性的にかがやいてみえるが、家庭内ではそんな主張は意味がないひとりよがりのデザインなのだ。コーディネート製品への「新・企業家族主義」の導入、これが家庭内でおだやかにかがやく製品を可能にする。

「SWIT会議」の導入は、「終身雇用」を基本として持つ日本企業の来歴を活かした社内改革である。現有の活動を支える中年パワーと合わせて、「IT青年」「女性」「高齢者」という多重標準のパワーが製品開発の現場で凝集して発揮される。そうしてはじめて「成熟した日本社会」の形成に立ち向かう「日本型企業」のヒューマン・スタンダード(全人標準)の姿が見えてくる。

第五章 暮らしの「和風回帰」

一 「四季と特性」が息づく地域に

「唐突な天災」と「温和な天恵」

*見失っていた「天恵」を活かす地域再生

「TSUNAMI」は国際用語になっている。昭和八（一九三三）年の三陸津波の惨状が世界に知られて。

その「TSUNAMI」への万全の備えとして、田老町（宮城県）の高さ一〇メートル、総延長二四三三メートルの津波防潮堤は世界にも知られて、「田老万里の長城」として観光名所にもなっていた。

二〇一一年三月一日、東日本を襲った津波は一〇メートルをはるかに超えて到来し、まさかの「田老の防潮堤」が破壊されつくしたのだから、地元の衝撃はただごとではなかった。

津波は「未曾有の災害」をもたらしたが、未曾有とい

ってもいまだかつてあらずというわけではなく、記録にのこる貞観地震（八六九年）を超える一〇〇〇年単位で起こる大地震（マグニチュード九・〇）に遭遇したということがある。

「天災」は忘れたわけではなかったが、人知を越えてやってきたのである。

いまここでその「天災」のほうの仔細を述べないが、たいせつなことは忘れたころにやってくる「天災」とともに、忘れていた「天恵」に気づくことなのである。

わが国は一四〇年の近代化の経緯のなかで、はるかに長く地域の暮らしに息づいていた「天恵」を見失ってきたのではないか。

それは「四季折り折り」の暮らしを彩る伝統行事であったり、「地域特有」の物産や旬の食材であったり、名も知れない草花や小動物であったりした。

「地域の四季」という暮らしにやさしい「天恵」を見直して、暮らしに活かす「四季折り折り」の風物の復興が

日本再生のキイなのである。「和風回帰」と呼ぶ。

新旧の「双暦」に慣れる

*旧暦・農暦・和暦の「季節感」を呼びこむ

ここで採り上げる「時の移りゆきに関する多重標準」は、国際標準(グローバル・スタンダード)とされる「太陽暦」と地域標準である「太陰暦」のふたつである。

「太陽暦」は西暦・公暦・グレゴリオ暦ともいい、「太陰暦」は農暦・旧暦・天保暦とも呼ぶが、どちらかの良し悪しを論ずることではなく、双方の良さをどう採り入れたら高齢期の暮らしを快適にできるか。つまりふたつの暦「双暦に慣れる」といった柔軟さと謙虚さをもって、「天恵」の復活に対応しようということである。

国際標準とされる「太陽暦」と地域の農作業のめぐりに根ざした「陰暦」との関係については、わが国では一四〇年前の明治五年二月三日(陰暦)を、明治六(一八

七三)年一月一日(陽暦)とすることで「西暦」が始まった。双暦はちょうど一四〇年である。

その後、農作業や祭事との繋がりが濃かった陰暦を「旧暦」として遠ざけ、陰暦に由来する行事を陽暦になし崩しに移して使いならしてきた。敗戦後はアメリカ模倣の「暮らしの洋風変容」がいつそう進んだ。

みなさんの地域にも、陰暦から陽暦に移したり、観光用に曜日を移した行事があるにちがいない。

ケタ違いに長い年月を刻んできた旧暦の暮らし。地域の季節感を取り込んだ暮らしの知恵を率直に体感することなしに終わる人生が、どれほど殺風景なものかは知れば知るほど驚くことなのだ。

暮らしの「和風回帰」

*めぐりくる「地域の四季」の変化を際立たせる

明治の初めに外国から近代化した文物の移入は必要だ

ったのだし、暮らし方は「文明開化」によって大きく良好に変化した。

その中で「地域の四季」の移りゆきに根ざしていた伝統行事は各地でたいせつに保存・伝承してきたのだが、とくに季節に関する行事では形は残ったが季節感を失ったものが多い。意識して「双暦」を重ねて、「暮らしの和風回帰」を試みようというのである。

はじめからそれほど厳密に考えることなく、一九七〇〜八〇年ころまで普通に見られた地域の風物を想い起こすことから始めればよいのではないか。

「初詣」「ひな祭り」「七夕」「夏祭り」「お月見」「紅葉狩り」「除夜の鐘」など、年中行事としてだれにもそれぞれになつかしい記憶があるだろうし、また新しい「バレンタインデー」「母の日」「クリスマス」といった行事も、だれもがどこでも楽しめる祭事・歳事・催事として親しまれている。

煩雑なほどに再生する必要はないが、高齢期になって

地域の季節行事のよさに気づいて、関心をもって参加する人びとはけっこう多く、静かにそういう行事の保存活動をしている会も知られる。

「二五年百季」の人生

*「一年」とともに「四季」を折節の基準に

季節行事をおざなりに扱ってきた暮らしを顧みて、これからの高齢期人生を豊かにする契機を与えてくれるのが、「地域の四季」なのだということ。

そう意識することで、住んでいる地域でしか得られない四季折り折りの風物の存在がひとしお感じられるようになる。つまり「地域の四季」が、高齢期を過ごす者に等しく与えられている自然からの恵み、「天恵」なのだということに思いあたる。「地域の四季」のめぐりに「からだ・こころ・ふるまい」をゆだねること。それだけで、高齢期の暮らしが生き生きと変容するものになる。

そこで「二カ月一年」とともに「三カ月一季」を重ねて時節のめぐりの基本とし、暮らしの意識としては都会指向から「身近な地域」へと指向する。時の移ろいの感覚というものは相対的なものだから、ひとつずつの季節をていねいに迎えて過ごすことにより、一年は四倍の長さで密度で充実して感じられるようになる。自在に過ごす高齢期は、「二五年一〇〇季」にもなる。

あと残り二五年と意識することと、あと残り一〇〇季と意識すること、これを上手に重ね合わせることが「時の移ろいに関する多重標準」であり、高齢期人生に豊かな変化をもたらすことになる。

六〇歳からはじめて八五歳までの二五年を、あるいは六五歳からはじめて九〇歳までの二五年を「高齢期一〇〇季」として、「一季三カ月」を時節の基準として迎えます。す。「地域の四季」一〇〇シーズンを楽しんで暮らす。出遅れた人や新たな展開をまじえて、七五歳から一〇〇歳でもいい。また思い立って独自に「高齢期一〇〇季」

を始めてもよい。

そんな「百季人生」をこれまでの生活に重ね合わせることで、高齢期を「四倍の豊かな時節の変化」とともに過ごすことができる。それでいい。

たとえば七一歳の春季、夏季、秋季、冬季・新年、七二歳の春季・・というふうに。

「地域の四季」の変化に素直に向かいあい、「二〇〇季」のうちのひとつつつをていねいに迎えて過ごす。そう考えただけでも心弾むではないか。

一年を二カ月として平板に流されていた日々、四季を基準として「地域の四季」の変化とともに過ごす日々と重ねて、「双暦による多重標準」と意識して暮らす。これが高齢期の人生を豊かにするのにふさわしい「エイジング・イン・プレイス」での処世法といえるだろう。

Sさんは六五歳直前の定年待ちの高齢者のひとり。

今年四月の「改正高年齢者雇用安定法」によって定年は延びたが、それで新たな魅力あるしごとが増えるわけ

ではないし、このまま定年まできちっと与えられたしごとをこなして過ごすつもりでいる。その先の計画はまだ固まってははいない。しばらくぼんやりのんびり過ごしたい。だから県が主催する「生涯大学校」地域分校で「陶芸」か「園芸」でもやろうかという程度。

いま心躍るのは、季節の催事との出会いや、旬の料理づくりや、俳句仲間との「四季吟行」の小旅行やである。

「一年」ではなく「一季」を基本にして暮らしている高齢者のひとり、Sさんを「四季丈人」と呼んでもいいのだが、ややせわしいので、ここでは「百季丈人」と呼ぶことにしよう。

「四季カレンダー」 古風な民家づくりの居間には、重厚なサクラの机にそろいの「マイ・チェア」もある。「百季丈人」のSさんは、「チェア」に座って眺められるほどよい壁面に、実用を兼ねてビジュアルのしやれた「四季カレンダー」を掛けている。季節ごとの三カ月のもの、春なら三・四・五月というように、四季それぞれ三カ月

の日付が視野の中に呼び出されていることに意味があるのだという。

年末恒例の東京銀座・伊東屋の「カレンダー展」などを見て、「四季カレンダー」と称するものはあるが、実際に四季ごとの三カ月九〇日間のものは見かけない。あのほうが目立つほどにはない。カレンダー会社が競って制作する「季節しごと」になる時がくるのをあわてずさわがず手製のもので待っているというのが、Sさんのひそかな楽しみなのだという。

「四季カレンダー」はカレンダー展でも見当たらないから、例年入手している馴染みの中華料理店のカレンダーを、四季ごとの三カ月（春三〜五月、夏六〜八月、秋九〜十一月、新年・冬一二〜次年二月）の三枚を切り貼りして仕立てたもの。

だから新年・冬は一月が、春は四月が、夏は七月が、秋は一〇月がそれぞれ中央に据えられて、季節の早仲晩の順になっている。よく見ると月と月の間を貼っていて

手製であるのがわかる。季節行事や旧暦が記されているから、「地域の四季」はカレンダー上に鮮明に表現されている。サインペンの赤マルは、Sさんが参加する催事や「吟行日」である。

「季節小物」あれこれ 「四季」を取り込む小物や仕掛けを、Sさんは「マイ・チェア」に座って眺められるほどよい位置にいくつも配している。年四回の季節はじめにおこなうモノの配置の「季節替え」（大掃除）を、負担にするどころか楽しみにしている。三カ月の新しい季節を待つて迎えて送る楽しみである。

花鉢、紋のれん、玉すだれ、星座図、扇絵、雛人形・五月人形・菊人形、鯉のぼりや風鈴や蚊やり豚や丸火鉢といった「季節小物」の置物や飾り物を入れ替えたり移動したりする。季節の移りに応じて、住い方にかんする春もの、夏もの、秋もの、冬ものを目立たせるとともに、衣・食それぞれの変化をも楽しんでいる。

「茶道や華道も、そろそろ男性回帰の時期ではないです

か」と、Sさんは文化勃興期の変容は男性が主導するが、完成期以降は形式美として女性が静かに支えるという持論を述べる。双方とも奥さんより自分が上手という。

和装もまたしかりで、これまで主として女性の儀式用の盛装として技術も意匠も素材も女性と職人によって支えられ保存されてきたが、「季節感と地方性を享受する高齢男性」の登場によって、「モダン変容」する時期にあるとわが身に引き寄せて熱心に語る。

「床の間春秋」 「どこのお宅にも四季を取り込むために先人が残してくれた仕掛けがあるのに活かされていませんね」とSさんがいう仕掛けというのは、「床の間」のことである。

和風建築のお宅にはかならず和室があり、床の間がある。ところが軸が年中かけっぱなしの一幅だけでは、せっかくの「床」が動かずにさびしい。というより無いに等しいのである。

気づいてみれば、Sさんとこの床の間も入居時のお祝

いに頂いた中国画家の「牡丹」のままだった。花の軸なら「梅」「牡丹か桜」「蓮か蘭」「菊」の四幅の「四季花軸」がほしいところだが、「桜」と「菊」は入手した。

春は「桜」にして新年には華やかな「牡丹」（寒牡丹もある）とすれば五点である。まずは春秋一幅ずつそろえれば「床の間春秋」が楽しめる。それでも床の間は季節で動くことになる。有名画家のものは高価だから、習作期の画家や素人画家の力作に魅力がある。

ぶんぶんクーラーを回して密室ですごく無季節、無機質な「常春」指向を修整して、「地域の四季」を家庭内に取り込むこと。切り貼りのないしやれたデザインの「四季カレンダー」が季節を伝え、「四季花軸」が床の間を飾り、さまざまに季節小物を配して、繊細に个性的に「百季人生」の一季また一季を迎えて享受して過ごす。

いささかささやかともいえるSさんの人生目標ではあるが、「地域の四季」を个性的に享受する心意気が暮らしの形として息づいているのは新鮮である。

もうひとつ、Sさんお気に入り「エイジド用品」を見せてもらった。チクタク振り子が行き来するウルゴスの古時計。いいものだ。

百寿期の「おおきなつぼの古時計」とまではいえないが、形と数字の表現に古風の味がある小振りな柱時計である。遅れに気がついたところで直すのだという。振り子の音も気づかないほど柔らかい。傍らにデジタル時計も置いていて、

「二もとの梅に遅速を愛す哉、です」などと、蕪村の句を挟みながら、新旧の時計の遅速をもまた楽しんでる。

「祭事・歳事・催事」を心待ちする

*迎えて楽しみ、惜しんで送る

前項では時節の基本を一年ではなく「一季」に置いて、「地域の四季」の移りゆきとともに暮らす「百季人生」を紹介した。「地域の四季」に関わる歳事のうちには、地

域の暮らしにリズムをつける催事として、門前（社前）市があちこちで復活している。旬の農産物や花卉、竹製品、包丁・めん棒、骨董・古本、植木・・・など。

だれもが参加して楽しめる「祭事・歳事、催事」をすこし詳しく追ってみる。

年初の「初日の出」「初詣で」や「書き初め」ではじまり、「初荷」「初午」など初ものがつづいて「節分」。春を迎えて「ひな祭り」「お花見」「端午の節句」や「新茶つみ」。季節が動いて「しょうぶ湯」「七夕」「お盆」に「夏まつり」、全国各地の「花火大会」や「薪能」。そして「お月見」（中秋名月・十三夜）や「菊まつり」「七五三」と季節は移って、暮歳の「酉の市」「大晦日」・・・
そして、季節の移ろいの節目を次々に追うのは、

立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨
立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑
立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降
立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒

という「二四節気」。中国の中原地域の生まれなので、すべてとはいかないが、多くが実感をとまなつてよく知られている。

それに八十八夜、入梅、二百十日や、さらには開花日、初鳴日、初見日といった「雑節・生物季節」など。この国で生きてきた先人は、それらを合わせて新しい季節の訪れを心待ちして迎えては楽しみ、名残りを惜しんで送って、人生の「こま」こまを刻んできた。

日本の民衆文芸として親しまれている俳句の季節感を支えるのが「季語」。そこには時の移ろいととも動く季節の突っ先をとらえる感性のエキスが詰まっている。そこで「百季丈人」であるSさんに、俳句仲間ならだれでも知っているという近代秀句を選んでもらった。

まさをなる空よりしだれざくらかな 富安風生
万緑の中や吾子の齒生え初むる 中村草田男
をりとりてはらりとおもきすすきかな 飯田蛇笏
湯豆腐やいのちの果てのうすあかり 久保田万太郎

など、折り折りの味わいが巧みに捉えられていていい
ものです、とSさんの評。

稀れにみる短詩だけに五・七・五の文字づかいにきび
しく、句境には天地雲泥の差がある。仕上がりの巧拙は
風にまかせて、新年・春・夏・秋・冬の五句くらいは、
なんとか自作の「秀作五句」として選定して心にとどめ
ておきたいところ。特に気に入ったひとつは、ひそかに
「辞世の句」として内定したりして。

一日を「八方時刻」で暮らす

*三時間ごとに課題を据えて

国際標準の一日を二四時間に刻んで過ごしてきたから、
一時間の体感はかなり正確である。テレビの一時番組組
や十五分ニュースや三分コマースシャルがあつて、およそ
の体内時計が動いている。

ここではそれに重ねて、高齢期に入ったみなさんに推

奨するのは、三時間ずつ八つの刻みを意識して一日の予
定を織り込んでいく「八方時刻」を取り込むこと。ゆつ
たりとした暮らしの日に鮮明な記憶を残してくれるこ
とになる。

更（ふけ） 〇～三時

明け方 三～六時

朝方 六～九時

午前・昼前 九～一二時

午後・昼過ぎ 一二～一五時

夕方 一五～一八時

晩方 一八～二一時

夜 二一～二四時

「更」は五更まであつて三更から日替わりだが、夜更
けや深更として日替わりの感覚としてはじめに据える。
「明け方」と「朝方」は異論がないだろう。正午をはさ
んで「午前・昼前」と「午後・昼過ぎ」そして「夕方」
を迎える。そのあと「夜」までの間を、気象庁は天気予

報で「宵のうち」(午後六時〜九時)と呼んでいたが、人によって捉え方が違うからという理由で、二〇〇七年四月からは「夜のはじめごろ」に変更した。本稿では朝昼晩として実績をもつ「晩方」を据えた。使いならすことで何時と刻まずに、「八方時刻」(八分時刻)を実感してほしい。「八方美人」ほど目立ちほしくないが、「八方丈人」には着実な生活感がある。

たとえば某月某日。朝方には朝刊を読んでから学校へ出かける孫の翼にひとこと。昼まえにはBSテレビの海外ニュースを見て、米寿を迎えた先生に手紙を書き、昼すぎには郵便局と図書館へ。夕方には近所のスーパーへ絵菜を買いにいったから夕刊を読み、晩方には晩飯をすませてTさんに電話とFさんにファックス。そして夜にはEさんへEメールと読書。でも夜更かしはしない。

時の過ぎゆきを三時間ごとの活動を刻んで過ごす「方人生」には、日また一日を着実に刻んでいるという充足が感じられる。その間、食品の一部を自分で管理し、

海外ニュースと新聞・読書と交信で認知症を制し、よく歩くことと雑事をいとわないことで行動力を保持する。

二 品位のある和風の暮らしを創出

「地域季節和装」で街をゆく

*「季節和装」は各地でモダン変容期にある

まずは「衣」の部門から。

「和装」といえば、長着、羽織、帯、野袴、そして足袋、履物。履物は草履、下駄、雪駄。それに襦袢に袴まで。かずかずの和装小物類、さらに財布や名刺入れまで。

京都西陣をはじめ各地の産地がそれぞれに、和装の復興に努力をつづけている。伝来の意匠や素材を生かした男女の「季節和装」が、高齢者のふだん着の趣向として各地の街頭に見られるようになるだろう。

戦前の街頭の写真をみると、和洋ほぼ半々の街着であ

る。男性の和装も少なくない。洋装の凝った風姿としてではなく、ふつうの人のふだん着として登場している。そのころの地方の街には、この上なく自由で闊達な地域和装が街の雰囲気や穏やかにしていたにちがいない。

とくに男性の「和装街着」は、戦後に急テンポですすんだ容赦ない近代化の過程で、欧風のスーツとシューズによって街頭から追われてしまい、日常の暮らしの場での「モダン変容」の機を得ずに日常性を失っていった。

わずかに男性の「袴」や女性の「晴れ着」として儀式衣装に閉じこめられながら、意匠も素材もそして何より高度な製作技術をもつ職人も、生産地のみなさんの努力によって保たれている。それらを引き継いで後代に残すためにも、「地域和装街着」の復活が急がれるのである。高齢者による和装の「モダン変容」は、高齢女性の和装ファッションショーとして広がりを見せはじめている。「地方の四季」を特徴づける「モノと場の高齢化」のきっかけは、まずは身近な「衣」の部門から。

衣は「地方の四季」をもっとも率直に表現できる分野。

地域に残されている意匠や素材は、どんな些細なものでも「四季の衣装」に素早く取り込んで生かすことができ。つまり伝来の形や素材を大切に作る地元住民の衣装への趣向が仔細に発揮されているうちに、「地域和装街着」という地域高齢者ファッションが登場する。

リードするのは、「洒々落々」の風情を季節ごとに楽しむ「和装丈人」のみなさんである。ゆつくりと移ろっていく季節に対応する合わせ、単衣、薄もの、単衣、合わせへの変容とめぐりを、地元の意匠と素材とで繊細にとらえた「地域和装」は、着けても楽しからう。

こだわらなく着用して街をゆく和装姿が、僧衣と作務衣だけではなんとも心もとない。とって、いかにも窮屈そうな女性の晴れ着や男性の袴姿ではなく、着付けもほどほどで、カミシモを解いたふだん着の和装への回帰が、本稿が希求している衣の情景である。

身近な問題なのに、あまり実現されていない衣の暮らし

し方がある。春先と秋口に出くわす不順な天候や昼夜による温度差（一〇度を超えることもある）の時期に、高齢者が体調を崩す。それを避ける「高齢者向け重ね着」の工夫についてである。

各地に特有の春先と秋口の不順な時期を重ね着によって乗り切る「高齢者衣装」の着替え（衣替え）の習慣をつくり出すこと。「衣の季節表現」として取り込んでゆくことで、夏もの、春・秋もの、冬ものの四季三分類による「四季型衣装サイクル」が完成するからである。

衣装づくりに熟練した人びとが、地域のみなさんと語り合いながら、「地域街着」のために「折り折り思考」を働かせることで形ができていくだろう。

「ローカル・ローカル街着」

*反パリコレの国際ファッション

「洋装（欧装）」の基本は「北方（狩猟）系衣装」だから

活動的で冬の寒気をしのぐにはいいのだが、わが国の夏の日中にだれもがシャツとシューズ、それに「クールビズ」では、画一的で暑苦しい。もっと気楽に夏の風情がかよう「南方（農耕）系衣装」の意匠と素材を採り入れた衣装がいいにきまっている。

民族衣装も「欧装」に変容した「エスニック」や「サファリ」といった「らしきファッション」ではなく、本国から訪れる人びとの民族衣装は、着る側からいって「地域和装」に属するが、明るくていかにも開放的である。

迎える側も夏むきの「日本和装」で対応するのが自然のように思える。ここにも「衣装の多重標準」を巧みに率直に活かす暮らし方への転回がありうる。

歯に衣を着せずにいわせてもらえば、優れたわが国の衣装デザイナーがヨーロッパの衣装のために日本的な素材と意匠と才能を提供してきたが、今度はわが国の風土に似合う衣装のために、世界のトップ・デザイナーが「日本和装のモダン変容」を競う場としての「トーキョー・

コレクション」を開催するくらいでいいのではないか。そうして初めて、ヨーロッパ中心の硬直した「洋装(欧装)」指向から脱した、おおらかな国際性が開けてくる。

はつきりと「衣装の多重標準」を意識した舞台を演出して、黒人モデルが「洋装(欧装)」を超脱した「日本和装」や「ネイティブ」の衣装を着けて、いきいきと登場することのほうに、だれしも豊かな国際性を感じるだろう。「トーキョー・コレクション」ならそういう流れをくれるはずだ。

二〇世紀を風靡したのが「洋風(欧風)」ファッション。地域の意匠はその中に取り込まれてきたが、新たな世紀での世界各地での「地域和風」の登場が待たれる。

四季折り折りの地域素材と意匠を活かした「和装街着」が各地に定着し、競われて話題になる。隣家のジージが「春の街着ベスト・ドレッサー」なんてあっていい情景である。

海外の姉妹・友好都市から地域素材や意匠を移入して

個性的な「ローカル・ローカル街着」をつくり出せば、欧風とは違ったファッションで街がはなやぐ。街着は和洋折衷という「衣装の多重標準」を活かせる分野である。

「自作旬菜料理」でもてなす

*「厨在丈人」の銘入り出刃一丁

「食」の部門。

「鎌倉は生きて出でけんはつがつお(芭蕉)なんて旬の旬を口ずさみながら、水気を切った旬のカツオの一切れに、香ばしいシウウガ・ミソを載せてはおぼると、江戸前の旬の旬の風趣をともし味わうことができる。

これまでは一日置いてセリにかけていた魚を、小田原水揚げの直後に搬送して朝の東京の市場でセリにかけて、当日に食べられるしくみも動きました。

季節なしの冷凍食材への恩恵はそれとして、季節の恵みと先人の食の嗜好を伝えるのが、四季折り折りの旬の

食材を生かした「季節料理」。そんな料理もまた外に求めるよりは、みずから「厨在丈人」として食材さがしにゆき、みずから包丁をとって調理に立つのがいい。「わたしの旬菜」が四季の食のシーンを賑わすことになれば、高齢期の人生はいよいよ楽しいものとなる。

「旬菜」といえば、当日入荷した食材によって「メニューなし」で供する「旬菜料理」をウリにする店が増えている。熟練の板前が丹念に調理する場で、畑土に配慮して丹精してつくった農作者の工夫や海の食べごろの獲物を追う漁師のこだわりを、菜卓（カウンター）をはさんで語り合うのは、伝承してきた日本の食文化の最良のシーンである。

食は「医食同源」の立場から素材と調理法の蓄積が進んでいる分野である。といっても昨今のTV料理番組のように、レシピで効能をあれこれたわって、「耳視目食」に陥ることはない。季節を伝える旬の食材をさがして「自前菜膳」に仕立てあげればいいことだ。地域のレストラ

ンで、季節メニューの中に「地場菜膳」を発見したら素材はしっかりとキャッチしておきたい。

けっこういけるコンビニ味覚に慣らされてきたが、高齢期ともなれば、登場を心待ちして時節とともに現れる新鮮な食材を求めて調理した自作「わたしの旬菜」の創出を試みる。さらには「厨在丈人」として、旬の食材を吟味して「自前菜膳」を考案する。時に朋友を招いて、できたての「菜膳料理」を前に「しずかに新酒の数盞を嘗め、酔って旧詩の一篇を吟じる」（白居易）のもいい。季節の恵みによる贅をつくした食のシーンが楽しめる。高齢の男性が「食」を知らないでいては、いつまでたっても女性との長寿の差（平均寿命は女性が八六・四、男性七九・九）の七歳は縮まらない。

高齢期に入ったら、男性は健康状態（からだ）を年齢より若くするアンチ・エイジングのために、志（こころざし）を立てて厨房に入り、調理（ふるまい）の腕を振るうことにしよう。

まずは日本橋・木屋や京都・有次あたりの包丁三丁（出刃・刺身・菜切）は吟味して入手する。「銘入り出刃一丁」は、脇において頼りになる「高齢化コア用品」である。無銘包丁の奥方や卒業記念の包丁を使う娘の前で、それだけでも存在感がある。タイまではいかなくとも、中型のイナダやシマアジなんかを手ぎわよくおろして食卓に供する。

さらに「旬の食材」をみずからのために用意する。今夜の口楽であり生涯にわたる悦楽である食の道楽。味覚とともに調理もまたきわまりなく熟達しつづけていく「丈人型能力」なのだから、おおいに腕を振おうではないか。同居人が期待するような季節メニューがひとつ又ひとつ増えれば、口楽は倍になる。

次には食器。これは形や感触を楽しめる専用品となる。自作のものを含めて「これは。パパのもの」という食器が、食のシーンでの存在感を示す役目を担う。その際には同居人のものとの調和に配慮すること、押しつけるような

存在感は避けなければならない。品性のただよう柔和な存在感。費用対効果の高い逸品がいくらでもある。

「厨在丈人」によるキッチン「高齢ステージ化」は、なごやかに緩やかに形成すべき愉快なテーマである。得意料理を得意がつてつくることから入らず、食器の片付けや用具の手入れや調味料の整理あたりから、さりげなくそれとなく構築していくことに秘訣がある。

「口楽文化人」のたまり場

*歌う、しゃべる、食べる三楽がカラオケ文化

食べて語って歌うというのは、口が求める三つの楽しみであり、「口楽文化」ともいうべきもの。カラオケ店に「高齢者専用ルーム」（「カラオケSSルーム」。VIPではない）があつて、「口楽丈人」がたまり場にして、「歌う、しゃべる、食べる」（うるる三楽）ということになれば、ここは三味一体の「シニア文化圏」となる。

「年少と春風を争わず」に、高齢者が好みの曲を選ぶことができ、映像にも工夫をこらし、高齢者好みの食ダネを揃えて供するホールを持つカラオケ店なら、これは与楽効果が満点の町の文化施設である。レストラン系カラオケ店の「うるる」構想に期待しよう。

若者受けを狙って新曲争いに走ったり、やすく提供するために曲想と関係のない映像の繰り返しでは、「カラオケ途上国化」というより衰弱化のうちではないか。

カラオケ店は、三世代がそれぞれに、またみんなしてこよなく愛し育てる街の文化娯楽施設なのである。

戦後平和期の歌謡曲は、まとめて世界に誇るべき文化遺産である。戦後歌謡を歌い続ける「歌謡大会」は、さまざまに開催されている。施設費用は個人用なら一〇万円以内で済むし、業務用でも一〇〇万円以内で歌謡データー費用が毎月二万円ほどかかる程度という。

世界の料理を食べて歌が歌える「国際カラオケ」店で外国からの客人をもてなすことができれば、文化技術立

国日本の「口楽文化」の拠点としてどれほどの効果があるか測りしれない。観光客はそれを楽しみのひとつにしてくるだろう。

高齢社会のための技術を研究開発する「ジェロンテクノロジー」は、ロボット開発が主流のようだが、市民の暮らし支援への参入も期待される。国際的「口楽文化」を日本「口楽文化人」の「うるる」嗜好が施設を保存し内容を蓄積していくのは愉快な情景である。公営カラオケがあってもいい。

「四季型（通風）住宅」の工夫

*外向的に折り折りの風を取り入れる

「住」の部門。

住居については可能なら実現したいありようとして、家族それぞれの生活感覚やプライバシーに配慮した「三世代同等同居型」住宅（三同同型住宅）というやや大きな

めで耐久性に優れた住まいを別項で取り上げた。ここでの「四季型（通風）住宅」は、だれもが住宅に対する考え方として納得してほしいところである。

この国の標準住宅としては、全室冷暖房つきという「常春型（エアコン）住宅」が主流だが、それが快適さのすべてではないということである。

古来、わが国の風土に適応した住宅は、「地方性」を活かした素材や様式をもち、一年の「季節感」を巧みに取り込みながら、一年を通じて過ごしやすい工夫をめぐらせたものだった。いまでも古都の町屋や各地の古民家として、少なくともはなつたが実物がたいせつに残されている。みなさんもそういう古風な日本住宅を活用した旅荘やレストランなどで、「風土が息づく住まいの良さ」を実感したことがあるにちがいない。

最新の無季節で無機質で多産型のプレハブ住宅に住んでいるうちに忘れてしまった「地域の四季」。それを活かした住まいの味わいや安らぎを、いまに引き継いで活か

す「モダン変容」の住宅が、現代の匠たちによって実現されていることに注目しよう。

一部に「常春型（エアコン）住宅」を取り入れながら、住宅全体としては繊細に季節感を取り込む「四季型（通風）住宅」にするのが、「住宅に関する多重標準」である。すべてを通風に回帰するのではなく、一部は冷暖房付きで一部を通風型にすることで、電力を節約しながら季節の変化を享受する暮らし方が可能になる。

高齢期の「成熟した生活空間」は、いろいろと多重意識をはたらかせることでの発見からはじまる。機密性が保たれ、常温が得られる住宅構造（すきま風のこない家はうれしかった）とともに暮らしの意識を一変させたことも確かである。

クーラーは急速に普及して「住」による安らぎをもたらし、カラーテレビは「知」の領域を広げ、マイカーは行動範囲を自在にした。だれもが「3C時代」を謳歌してきたが、「住」生活を便利にし快適にした家電製品を

ひたすら支えてきたのが電力だった。夏ごとに「クールビズ・ファッション」をはやしたててすむようなレベルの問題ではない。環境ファッションの議論では天然の樹木や水や風への基本的な認識がないばかりか、本格的取り組みを見失う過ちを隠すことになる。

東電の「でんき予報」をみて、自宅のクーラーや電気使用の判断をしている家庭がどのくらいあるかはしれないが、七〇九月の「夏期のでんき予報」は、だれもが関心をもってみるべき情報であろう。

内向きに閉じた常温型住宅から、「地域の四季」つまり外界と向きあうたたずまいを持った住宅への回帰。これがこの国の「住まいの良さ」の本流なのだ。地方へゆくと、瓦屋根のしっかりした母屋と新築のプレハブ住宅が同じ敷地内に建てられているのをみかける。統計的には同居ではないが、「敷地内同居」である。親子二世代の住み分けだから、ここで提案している「三世代同居型」住宅とは異なるが、子ども世代の人びとの「季節感」と「地

域性」への関心と配慮が、庭などを通じて外向きに表現されている。そのあたりに街と住宅の中間領域に安定感を与えて、空間を閉ざさない開放的で外向的な住宅街を実現する可能性がみられる。

「季節感」や「地域性」を取り込むことによって住み心地は変わる。新築や改築にあたって、個別に現場で工務店側の熟年技術者と細部の検討がなされれば、その成果が共有されて、時をへて地域の特徴を表現した「四季型（通風）住宅」を中心にした家並み、街並みが形成されていく。高齢者の人びとが「地域の四季」を意識することによって、少しずつ平常な姿を取り戻すことになる。

内向きに閉ざしすぎた「常春型（エアコン）住宅」の暮らし方を少しずつ修整して、外向きに開放的に「季節感」と「地域性」を取り込んだ「四季型（通風）住宅」が主流になることが「和風回帰」だが、三世代のみんなが工夫をこらした「わが家」が増えることによって、三世代がそれぞれに内でも外でも暮らしやすい家、家並み、

街並みが姿を現わすことになる。「プライバシー」を強調する住宅が、季節感や地方性まで閉ざしてしまう家並み・街並みをつくってきたことの反省が求められる。

それに代わって「地方の四季」を表現する地域特有の「外向的街並み」が新幹線の車窓からも眺められるようになれば、この国は本来の美しい風物を回復したといえるようになる。

「二五年百季」の庭 わが庭の公開

*「地域の季節」の移りゆきをみんなで楽しむ

「地域の四季」の変化をじょうずに取り込んだ住居での暮らしが、高齢期の日々の充足とどれほど深く関わっているかについては、すでに述べた。

季節とともにまわるわが家の庭の「四季の小ステージ」を演出するには、大道具・小道具がいる。そこでまずは伝来の園芸用具、新しい工具や設備など、庭いじりの業

の要所を習うことになる。スーパ―の園芸係員も詳しい。自治体の生涯学習や高齢者大学校には「園芸」科があるし、クラブ活動もある。そして頼りになるのが近所の先輩である。

若手の「百季丈人（高年前期）」であるSさんは、隣に住むベテラン「作庭丈人（高年後期）」のGさんに習いながら、花期や実入りに配慮した植栽を手がけている。植物が繊細に表現してくれる「二五年百季の庭」にひとつずつ迎える「四季の庭」を実感しながら過ごしている。

街並みにかかわる庭木のうち、高木は周囲と合わせて土地にあったものにし、狭いながらもわが庭やベランダを通じて折り折りの「地域の四季」の変化を享受しながら、街並みの構成にわが庭も参加していることを実感している。こんな街なら紛れ込んだ旅人も安心して時を過ごし、思い出を得て立ち去ることだろう。穏やかに風土・伝統が息づく街だからである。

「地域の季節の花」が観光名所になっているところは数

知れない。多くは観光協会などが管理にあたっている。梅や桜の名所は全国的に分布している。

その一方で、寺院や個人の持つ庭園が「季節の花」のころに入場料をとって公開されて、「地域の季節」を楽しむ人びとに支持されている。梅、桃、牡丹、菖蒲、薔薇、紫陽花、藤、菊などの「わが庭の公開」が話題になる。もちろん果樹の場合には摘果による楽しみが加わることになる。

第六章 高齢期・居場所

一 「エイジング・イン・プレイス」

高齢期から終末期をすくす場所

* 「ふるさと生活圏」再興の原点

夜空に舞うホタルの光は、過去に出会って失った何か
なつかしいものを想い起こさせる力を持っている。

「おヨネだろうか、コハルだろうか」

外交官を辞した後、徳島に住んだモラエスは、闇に弧
を画くホタルの光に、先立ってしまったふたりの女性を
実感した。「ホタルの飛翔」は終わりではなく次の何かへ
のリード・ライトなのだろう。「ふるさと」の何を蘇らせ
たらよいかを探っている人びとに、新たな発見をうなが
す契機となっている。「水は清き故郷」のシンボルとして
ホタルは広く全国各地で蘇った。「ほたるサミット」も開
かれている。

春になると、きまつて蠢動（宇づらも音もい）して
いた小さい生きものが姿を見せなくなる。目の前で次々
に失せていくのだが、失ってしまった小さな「自然環境」
の変化に気づかない。環境省レッドリスト（平成二五年
公表）によれば、日本で絶滅の恐れのあるものは一〇分
類群三五九七種という。そのなかに、なんとニホンウナ
ギまで含まれている。

ウナギが絶滅の恐れ？ かば焼きと肝吸いがなくなる
心配？ こゝまできてやつとドッキリ。朱鷺・トキ
nipponia nippon の絶滅（二〇〇三年、キンが最後）と
再生（佐渡での中国トキによる）は物語の世界であつた
が、ウナギとなるとにわかには実感がわく。なんとかして
自然ウナギを回復しようと思ふ。

ひとくちに「環境」の回復といっても意味がひろい。
ヒト中心の利用がすぎて自然の再生力に乱れや崩れを生
じさせた「自然環境」の回復がいわれる。消費の現場を
無視して生産活動を優先したあげくに壊された「生活環

境」の回復がいわゆる。生活環境の保全のためには、廃棄物をリデュース(出さない)・リユース(再利用する)・リサイクル(資源化する)の3Rがいわゆる。

そしてもうひとつの環境である「ふるさと生活圏」のまちづくりということになれば、先人から引き継いできた「歴史・伝統環境」の再興がある。前章でも取り上げたが、祭事や歳事の再興と保存である。

保存の形はいろいろで、よく例に引かれるのは北国の夏の夜を彩る青森の「ねぶた」と弘前の「ねぶた」。前者は観光化して伝統を保存し、後者は地味だが風土に根づいた伝統の形を守る。ねぶたは立体的な人形型でねぶたは扇型。掛け声も「ラッセラー」に対して「ヤーヤドー」。ふたつの祭りのむこうに、北国の闇の奥に鎮まった先人の農作業と明かりとのかかわりを遠く思わせる。

人出の多い祭事ばかりでなく、身近な衣食住にかかわる風習などの仔細な点検もある。それらが重なり合う現場で何をどうしたらいいのか。

「歴史・伝統環境」の保存を検討するということは、「ふるさと」が息づいていた一九八〇年ころまでの経緯に詳しい高齢者のみなさんの再興への意欲と若い人びとの継承への熱意との両翼の働かないと飛び立てない。

地域にみずからの命を越えて生きつづけるものを発見して、その保存に身を投ずるのも、高齢期での「エイジング・イン・プレイス」の選択のひとつとなる。

「ふるさとの原風景と現風景」

*ニシキを飾るより地域をつくる仲間として帰る

少年時代に将来の大成を期待されて「ふるさと」を離れた人びと。都会に出てそのまま職業に就いたり、大学で学んで都会暮らしをし、結婚をし、次世代を育ててきた人びと。定年後も住み慣れた都市郊外に住んで、そのまま「都市浮遊型の人生」(Q字型)で終わる人も多い。長く居住していたところに居つづけるか、「ふるさと」

へ回帰して高齢期から終末期を過ごすかで、「エイジ
グ・イン・プレイス」での人生の成果の違いになる。

しごとを終えて高齢期から終末期を「ふるさと」にも
どって過ごそうと考えている人びと、「ふるさと帰巢型
(U字型)の人生」を思う人びとには「ふるさとの原風
景」があつて、静かに「ふるさと」を歌えば、なつかし
い山や川、うさぎやこぶなは変わることなく眼の裏に浮
かぶことだろう。

「いかにいます父母・・・」となると、父母はすでになく
記憶の中の存在としてよりほかなくなっている人が多か
ろうが、あるいは大正生まれの母上がひとり、ご健在で
おられるかもしれない。

先の大戦ののち半世紀あまり、「ふるさとの現風景」は
求めていたものと違う姿になっている。わが国の「ふる
さと」が、ここ二〇年ほどの間に失ったものが多いこと
にも気づく。

得たものといえば——舗装された真っ直ぐな道路。メ

カニツクな騒音。コンビニ、スーパー、駐車場。コンク
リート造りの新校舎と新庁舎。郊外のゴルフ場・・・そし
てマイカーとプレハブづくりのマイホーム。

失ったものといえば——安心して歩ける小路。緑ゆた
かな雑木の里山や鎮守の森。ヒバリやカエルの声。商店
街の活気。わら屋根の篤農家・・・そして野外で遊ぶ子ど
もたちの歓声や腰の曲がったお年寄りの笑顔。

「ふるさと帰巢型(U字型)」を思う人びとの「エイジン
グ・イン・プレイス」は、「ふるさと」再興につながる。

だからニシキを飾って帰るのではなく、地元に残って
いた仲間とともに「ふるさと」の再生・創成につながる
事業に加わる覚悟を持つて帰ること。「帰らんいざ、田
園まさに荒れなんとす」である。休耕田の時代もおわる。

違和感のある邸宅を建てて地域と絶縁した暮らしをす
るような人は期待されていない。「ふるさと生活圏」をす
くる気構えが求められている時節なのだから。

合併のあと、どれほどの地域がどれほど元気であるか

を知るためにおこなわれた調査（内閣府「地域再生に関する特別世論調査」）がある。その結果では、思いのほか「地域に元気がない」ことがわかった。

新世紀の新たなまちづくりをめざした合併協議とその後を経緯にかかわるので、少し間をおいたデータ（二〇〇五年六月中旬）だが、ここで取り上げておきたい。

合併協議は、「生活圏の広域化」や「少子高齢化」などを課題としたが、自治体にとって何よりも特例債付き財政支援が魅力だった。ひと段落したところで、どれほどの地域がどれほど元気であるかを調べたものだが、自分が住む地域に「元気がない」と感じる人（四四％）が、「元気がある」と感じる人（三三％）を上回っていた。「元気がない」と答えた人は、その理由として「子供や若者の減少」（五九％）、「中心街のにぎわいの薄れ」（五一％）、「地域産業の衰退」（三九％）などをあげている。そして活動の中心となるのが国（一八％）ではなく、住民（四八％）と地方自治体（三八％）であることがは

つきりした。国の一八％というのは、もはや活動の中心が「国ではなく住民のみなさんと地方自治体です」と国がいわざるをえないほどの低率である。

では住民と自治体としてはどうすればいいのか。

「子供や若者の減少」には「少子化」があり、「中心街のにぎわいの薄れ」には商品流通の変化がある。そして「地域産業の衰退」には大資本による系列化、グローバル化による生産拠点の海外移転といった事情がかかわっている。個別の自治体の手には負えない事情があるが、そのなかでも本稿の立場は明解である。高齢者がふるさとので子どもたちと暮らし、情報源になる街の中心をつくり、地域産業を起こす原動力になればいい。

要するに、全国各地に元気がいい「いきいきシニア」がたくさんいればいいのである。いま「いきいきシニア」はどこにいいのか。長期にわたって国の産業政策のなかで後回しにされ、やむなく高齢者が生涯現役で対応してきた農林・水産業の現場にみられるのである。

男性の出稼ぎ兼業から始まった三ちゃん農業（じいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん）だが、かあちゃんがばあちゃんになるほどに長い経緯をもつ。

ほかならぬ農林水産省が「地域おこし」の成功例を取り上げて表彰する「いきいきシニア活動表彰」があって、その経緯をみていると、農業・林業・漁業にたずさわる高齢者のみなさん（とくにばあちゃんが活躍）が、いかにしてきびしい環境のなかで組合や協議会をつくり、アイデアを出し合って特産物を作り出し、よろこびを作り出し、暮らしの安定に努めているかがよくわかる。

近ごろは各地で、農産物の六次産業化による御当地グルメの開発、産業観光（道の駅など）など、地域農業を活性化させた「特性のある地域の発展」が指向されている。「ふるさと」にUターンした高齢者もつ「知識、技術、資産」（高齢者の三本の矢）を、地域の風土にどう活かすかが課題となってくる。都会から田園生活へという「田舎ぐらし」を志向するみなさんが、どうしたら「地域い

いきいきシニア」になれるかが問われているのである。まずは地域の「いきいきシニア」である三ちゃんから教えてもらうこと。

「均衡ある国土」と「個性ある地域」

* 均衡を基盤に特性を重ねて活性化

新幹線の座席でうとうとした後で、身を起こして、列車の窓から外を見る。

「いま、どこさ走ってるん？」

流れ去っていく風景からでは、どこを走っているかの判別がつかない。外国での話ならともかく、わが国の国内での話。利用した人ならだれもが経験していることなのである。次々に展開する田畑も家並みも、どこも同じような風景なのだ。

新幹線の車窓からの風景の中に、「ここはR町 △△が特産」といった程度の看板くらいはあってもよさそうだ

が、地方特性（特産）がいつこうに立ち上がっていない。

「地方の時代」といわれずいぶん経つというのに。

しかし、これは見方の違いによるのであって、いずれの地も凸もさせず凹もさせずに、「富を等しく分かち合いながら、ともに豊かになる」という、先の大戦後にわが国の先人が選んで目標としてきた「日本的よき均等性」の成果なのである。

「豊かになれる者からなれ」とはせず、個人差や地域差をなくして、等しく成果を分かち合おうと務めてきた善意の人びとによる積年の成果なのだ。

その意味でなら、これまでも「地方の時代」だったといえる。東京一極集中の風潮の中で、優れた人材を提供しながら、地方に残った人びとは、「モノと場の平等な豊かさ」のために、たゆまぬ努力をしてきたのである。

みんなが等しく貧しかった時代、若者たちを大都市へ送り出し、地元に残って貧しさや不便さにも耐えながら辛苦しただ人びと。いまはもうその姿は遠く定かでないが、

地元のために尽くした先人の努力を無視しては、現状の公平な豊かさに対する理解の公平さを欠くことになる。

旧市町村長室には歴代の首長の写真がかかっている、高齢者のだれもがいい顔をして並んでいた。合併後はどうなったのかはわからないが、それに励まされ力をもらって現役首長はしごとをしてきたにちがいない。

新幹線を利用しながらこう語るのは失礼になるが、「善く行くものは轍迹なし」という先哲のことに耳を傾けたい。すべての業績を周囲の人に振り分けて、みずからは轍の跡を残さず去っていった善意の人びとの姿を忘れて去るわけにはいかない。

等しく富を享受するという先人の善意から始まった「均等化としての地方の時代」が、時を経て「横並びの安心感」による自意識の欠如となり、推進力を失ってしまっている。ここでも成果主義といった個人の目先の競争誘因を取り込まねばならないほどの転機を迎えようとしている。

そこで、その危機感の表現として政府が掲げたのが、「国土の均衡ある発展」から「地域の個性ある発展へ」という「骨太の方針」のフレーズ。そういう転機への要請としてわかりやすく表現されている。

たいせつなので再記するが、ここで注意すべきことは、「くからくへ」というのは「くを転換して」ではなく、正確には「くを多重化して」と理解すること。

「地域特性」の回復だからといって、「均衡」を一八〇度転換するのではなく、これまで国がリードしてきた「横並びの均等化」によって得た現況に、さらに地元の発想を「多重化」して地域の活力を呼び起こすことである。

そう理解しなければ先人が善意として積み重ねてきた営為をまるごと無視することになってしまう。そんなことは後人としてあるまじきことではないか。

「地域に根ざした暮らしの知恵がどの地方にもあったはずなのだ」と思いながら、新幹線の客は、どこかわからないまま車窓から目を戻す。前方の出入り口の上の小

さな空間をニュースが流れ、「あと三分でN・・・」というお知らせが流れた。

「特性の息づくわが町」づくり

*みんなで考案する「しくみ」と「特産品」

貧しいときは貧しいなりに、豊かさは豊かさでお互いに分け合ってきた。この「モノと場の横並びの平等」が敗戦後の復興事業の基本となってきたことで、地方の人びとに安心感を支えてきた。

その意味では国のしごとと携わってきた官僚の半世紀にわたる事業分配の業績といえる。だから新幹線の窓から見ても凹凸が際立たないようなまちづくりが目標とされ、実現されてきたのである。ほめすぎでなく、「モノ」における平等主義のみごとな時代表現である。

その証としてR町のような小さな町でも、隣の大きな市に劣らず、横並びの「基本課題」を共通して持ってお

り、それを担当する課係と職員がいる。そしてこれまでの末端地方議員の主なしことは、各地域に等しく予算と事業を配分することにあつた。

新たに「地域特性の息づくわが町」を創り出すには、まずみんなで手分けして地域特性を掘り起こすことになる。その上で、新しい課題を設定して担当する部署を構成するわけだから、従来の課係をなくすのではなく、その上に重ねて構成されることになる。

なぜと云って、「均衡ある国土の発展」はこれからも基本として継続するからで、その上に、「地域特性」を活かしたまちづくりをめざす活動が重ねられるからだ。

したがって従来の課係を解消する単純な対応は避けなければならぬ。職員も住民も混乱してしまふ。新旧ふたつの課題をうまくつないで対応する課をつくり課員を配置することにある。

すでに各地で活動しているのが、「まちづくり推進課」「子育て支援課」「高齢社会対策課」「伝統産業育成課」

などで、そのほかに二課を合わせた部署、たとえば「健康福祉課」「産業観光課」「スポーツ生涯学習課」などの活動も推進されている。

「シルバー人材センター」は、高齢者むけの求人に応じるだけではなく、高齢者メンバーによる起業に乗り出すこと。高齢者人材のもつ能力を蓄積し活かしてしごとづくりに導くことが中心でなければ存在の意味を失う。

「地域包括ケアセンター」は、全国で地域住民の暮らしの安心のために際立った成果をあげてきた。地域住民の心身の健康、生活の安定のために必要な支援を包括して担う中核的機関として、保健師、社会福祉士、ケアマネジャーはじめ自治体職員とNPOメンバーと多くの住民の善意を統合しながら機能している。さらに高齢者が健康なうちから関わる新しいしくみが合わせて考慮されることになる。

国交省の方針も「地域特性」にあることから、各地から具体的な実践事例が報告されている。京都や奈良はい

うまでもなく、名古屋、横浜、浜松、三鷹、市川、郡上各市の官民協働のまちづくりの経緯は、それぞれに特質のあるモデル事例として期待される。

「中心市街地活性化」の基本計画では「特性のあるまちづくり」が指向されている。

城下町では「街なか回遊」（彦根市）・「回廊」（会津若松市）、港町では「みなとみらい21・OLD&NEW」（横浜市）・「港町スクエア」（気仙沼市）・「海DO戦略」（下関市）、そして「まるごと博物館」（有田町）、「都市型高感度市街地」（宝塚市）・「体感スポット点在のまち」（久留米市）、「フアッション・ジュエリー都市」（甲府市）・「リ・グラスのまち」（水俣市）、「こみせ・まちづくり」（黒石市）・「詩情公園都市」（小諸市）・「市（いち）の復権」（市原市）、「まちななかづくり」（臼杵市）・「そのまちのへそづくり」（富良野町）・・・。

街並みの整備、歩きやすい環境づくり、いきいこの場の設置、観光資源や歴史資源の活用、イベントなどに特性

を活かしたまちづくりが企画されており、地域開発の参考に事欠かない。

身近な事例として各地からは、農業の六次産業化によるご当地グルメや新製品。環境に関する「エコ・ライフ」「スロー・ライフ」による活動や居場所づくり。「ホテルの里」や菜の花・レンゲ・コスモスといった「花の里」や「そばの里」「和紙の里」といった各種の地産品の里づくり。そして地元の焼き物・織物の再生。和太鼓・歌舞伎・踊りなどの伝統文化・芸能の復活。民俗・ことばの保存と伝承など地域特性を活かした活動の成果が、暗いニュースに割ってはいって明るいニュースとしてテレビで紹介される。

その紹介場面には、中心になって活動をリードしている地域の高齢者の姿（「エイジング・イン・プレイス」の現場の事例）が映し出される。

「地域ブランド製品」としてこれまでも地域で生まれて国の代表になった製品は数知れない。地域名のついた製

品は、地域での並みならぬ努力のたまものである。みなさんにも親しいものの例をあげてみよう。

松前漬、石狩鍋、津軽塗、南部鉄器、喜多方ラーメン、益子焼、桐生銘仙、草加煎餅、安倍川餅、信州蕎麦、岐阜提灯、加賀友禅、九谷焼、瀬戸物、伊勢海老、松阪牛、宇治茶、奈良漬、吉備団子、讃岐うどん、今治タオル、伊予柑、博多人形、伊万里焼、薩摩揚げ・・・。

特性を生かした地域の発展のためには、地元企業は「モノづくり」に、自治体は「まちづくり」に、そして住民とくに高齢者はこれまでになかった高齢期の暮らしのための「モノ、サービス、居場所」をこしらえる活動や事業を案出して展開することになる。

「地域特性」である「地域の四季」を際立たせる地道な挑戦と試行が、「地域の個性ある発展」であり、「地域生活圏の高齢化」の道程であることは間違いない。ここには知識、技術を活かした高齢者の「エイジング・イン・プレイス」の現場はたくさんある。

地域で暮らす高齢者が終生にわたって愛用できるレベルの「地域特産品」をいくつも持った「個性のあるわがまち」がお互いに競いあう。あるまちの製品が周辺地域で人気を得れば、それは「地域ブランド製品」として定着するばかりか、さらに地場物産の成果を集めて開かれる「地域特産品展示会」でも人気になるだろう。新地域ブランド誕生の時節なのである。

二 「世代間交流」の生き生きした現場

「家族総出の子・孫育て」

* 地域が担う「少子・高齢化」社会

かつて、明治生まれのひいじいさんのころには、五郎がいて、いや八郎がいてその下に末吉がいた。大正から昭和のはじめ生まれの人は四、五人きょうだいが当たり前。わが国ばかりかどこの国でも「近代化」の過程では

「人口激増（爆発）」の時期を経験している。

地方の家庭は、産み育てた子どもたちを、戦前はお国のために、戦後は大都市の企業のために、労働力として送り出してきた。長男が農家を継ぎ、次男坊、三男坊、

*男坊は一人前に育つと都会へ出て行って働いた。ハワイやブラジルへの移民もあったし、ひところは中国東北地区へ開拓のために渡った。

モノ育てとヒト育て、地域でのモノ育ての力は「少子化」時代の子育てにも発揮される。

いまや、地方には送り出せる余力はない。それでも地方の家庭では、「家族総出の子育て」で女性の社会進出を支えて、子育ての伝統を引き継いでいる。子どもたちは初めから、おじいちゃんおばあちゃん存在を当然とし、「うちのおじいちゃんがね」といって、教えてもらった知識や技能を仲間にも自慢する。それが「わが家三代の暮らしの知恵」の伝承である。

しかしこれ以上に家族に過大な期待をよせることはで

きない。そこで国は介護、医療期のお年寄りを「地域包括ケア」によって地域で守り、企業はワーク・ライフ・バランスで子育て期の女性を守り、家族の負担の軽減を図っている。地味で忍耐のいる作業なのである。

「子育て」には、とくに都会で生活する若い夫婦への支援が急務とはいえ、本来である地方の伝統的な子育ての基本は「家族総出」によることを合わせて理解する必要がある。

少なくとも三割ほどの「三世代同居」を確保しないと「わが家の暮らしの知恵の伝承」が途切れてしまうし、別項で触れるが、医療が病院中心ではなく在宅中心にむかうことになれば家族の絆は欠かせない。

ここは高齢者のみなさんに実感として知ってほしい。ここ一五年の育児施策において、「祖父母」の「孫育て」はまったく期待されていない。「両親以外」あるいは「地域住民」として扱われてきた。わが国の次世代の育成にとって「祖父母」という存在は評価ゼロなのである。こ

れはなんとしても行き過ぎであろう。

国の施策の上で軽視して扱われていても、実際には孫の傍らにいて親の目と違った目を見て、知らないことを教え、こまかな技能を伝え、励ましを与え、孫から二重マルの似顔絵をもらう祖父母は数多い。

九月第三月曜日の「敬老の日」に花束をもらったおじいちゃんおばあちゃんは、「孫の日」（一〇月第三日曜日）にお返しをする。過保護や板ばさみを避けながら、社会適応性のある子どもたちを育てる役割を果たしてきたのは、おじいちゃんおばあちゃんではないか。

「ひとりじゃないよ、みんなで育てる未来に輝く子どもたち」、いいキャッチフレーズである。家族総出で、そしてさらには地域みんなで、地域の子どもの成育を支援し見守っていくことが、もっとも有効な「少子化対策」であり、「少子・高齢化」対応の家庭・社会・づくりなのだから。高齢者にとって身近で優しい心根の生きる「エイジング・イン・プレイス」の現場である。

地域で育つ子どもたちのために、イモの苗付け、茶畑づくり、七草とり、すだれづくり、トンビ風・そして少なくなってしまった子どもの安全な居場所をこしらえるといった活動も、地域の高齢者のアイデアなしにはすまない。「世代交流」のリアルな現場である。

地域が湧き立つことを願わないものはない。次世代の育成を担うのは両親ばかりではなく、豊かな経験と知識と技能をもつ地域の高齢者のそれとなくさりげない参加が期待される活動なのである。

多くはないが、「育孫書」だって出版されている。自治体がすすめる「祖父母が孫と遊べる児童館」もあるし、「孫育て講座」や「孫育て教室」に出て新しい育児のやり方を知り、孫たちとどう接したらいいのかを考えたり話したりするチャンスも増えている。商店街の空き店舗を利用した「たまり場」もいい。

国の政策として期待されていないからといって放っておける時期ではない。街を元気にするのは自治体と住民

の協力である。そしてふるさとを愛する「子・孫」を育てるには、父母の「子育て」に加えて、祖父母の「孫育て」がうまく重なるのが自然であり当然である。

国の子育て政策は、課題が多い大都市型の「保育・教育施設の充実」や「夫の育児参加」や「育児休暇」といった対策に片寄ってしまったのである。

ゼロ歳～三歳児の保育と教育は、いうまでもなく家族のしごとであった。安倍総理の「三歳まで育児」提案も本来なら当然なのだが、家族観が古すぎるといふ理由でそっけなくあしらわれてしまう。

「子どもは女だけが育てるのですか！」という封建時代以来の女性蔑視を含む論理展開には二の矢が継げない。

就学前の保育と教育の問題だけは、厚労省と文科省による保育園と幼稚園の両立てで、長いあいだ働く母親を悩ませてきたが、平成二七年からの「認定こども園」の成立で解決のメドがついた。やれやれなのである。

「都市型子育て」と「地方型子育て」

* 地域の高齢者と子どもたちとの交流

もうひとしきり高齢者と「次世代」のことに触れたい。

ここでいうべきことは、制度上の問題より前に、「三世代同居」や子ども世帯が同じ敷地に家を建てて住む「敷地内同居」が可能なご家族は、ぜひそうしてほしいという要請なのである。

三世代の接触は多いに越したことはないからだ。いなか暮らしが保っている温和な家族主義は、時代に沿いながら変容すべきものであつて、都会型指向で丸ごと否定すべきものではない。といって「日本の美風」といって丸ごと固守すべきものでもない。

たいせつなことは、地方の町村と大都市での子育ては同じでなくてよいのではないか。それぞれの風土と生活環境に見合った住民にとってふさわしい多重標準として、「都市型子育て」と「地方型子育て」とがそれぞれに意

識されてよいのではないか。

遠出をしない高齢者は、子どもたちと同じ地域で高齢期を過ごすことになる。だからここでの「エイジング・イン・プレイス」は「孫世代」との交流の場である。孫たちとの接触は「わがまちの暮らしの知恵」を伝える世代交流の場となる。

「高連協」の樋口（恵子）代表は、カタカナ表記の「ローカル・コミュニティ」は、漢字表記では「老可留、子見新地」（ろうかる・こみにいち）だと説いてみせた。高齢者と子どもたちは同時期に同地域で暮らすことになるからだ。「老可留」（ろうかる・老いてはここに留まるべし）は「エイジング・イン・プレイス」そのことである。

同居ならいうまでもなく、近居の場合は「おじいちゃんち、おばあちゃんち」が成り立っているだろう。保育施設や幼稚園にはやさしい「保育おばあちゃん」もいる。公立小中学校の補助教員、塾の教師、通学路や公園や公民館、図書館、その他の施設で出会う子どもたちへの目

配り。事故や犯罪やいじめの被害から子どもたちを守るのに、高齢者の「次世代育成」への関心は欠かせない。

決まった遊具を置かず子どもたちの自主的な参加で遊び場をつくる「まっ白い広場づくり」には、かつて自然のなかで思いつきり遊んだ経験をもつ高齢者の知恵や手助けがいる。

マンガで育つてすぐにキレル子どもに、豊かで精細な表現力を身につけさせて、感情のコントロールができる子どもにしようという「読み聞かせ図書館」も重要だし、地元の伝統技術・芸能を伝授する活動などには高齢者の技と熱意が生きている。

国の政策は都市型の夫婦ふたりの抱え込みによる子育てに固執しすぎている。地方の住環境に配慮して、祖母や親類による「かわいい子・孫育て」の素直な愛情を活かすこと。とくに「祖父母の支援」による「孫育て」という伝統を引き継ぐことを軽視しては成り立たない。

「三世代会議」と「三代会館」

*だれもが暮らしやすい地域づくりの合流点

これまでの世代間の出会いといえは、「老人クラブ」と「子ども会」との間での交流が知られる程度。

「全老連」(全国老人クラブ連合会)がおこなってきた「地域を豊かにする活動」(旅や将棋など)がそれで、「伝承活動」や「世代交流」は組織あげての活動の柱になっており、できる力をもつクラブが、地域文化や芸能・民芸や手工芸、郷土史などを子どもたちに伝承している。若手会員の独自の活動も見られる。

しかしながら地域の子どもたちが当面している問題は、「老人クラブ」と「子ども会」との間では扱いきれないほど山積しており、もっと広い地域生活圏での高齢者による知的・技術的な活動が、次世代育成の事業と重なるものになることはまちがいない。

千葉県柏市では、東大高齢社会総合研究機構やUR都

市機構との協働の成果だが、ベッドタウンとしてきた高齢世代が優れた知識や技術を活かして地域での「しごと」に参加している。海外勤務の多かった商社マンなら、生きた英語の伝授などお手のものである。

さらに先駆的な活動として、「三世代交流館」(大洲市)、「三世代ふれあい館」(土岐市)など「三代会館」を称するものもすでにある。三世代の代表者が親しく交流、合議する場として運営するようになれば、それぞれの立場での活動を共有し、引き継ぐことになる。地域三代の集いや文化事業の施設として有効に機能するだろう。

それぞれの地域の特性や伝統を活かし、特産物を育て、篤農家を守り、若者を鍛え、子どもたちに生きる夢を与えられる地域にする活動に、自治体はもっと仔細に高齢者の能力を知って参画を求めべきであろう。それがこれまででない次元のふるさとづくりの拠点となる。

住民みんなが暮らしやすい地域づくり、車いすで行動できる「バリアフリー」による環境の整備など、「ユニバ

「サル・デザイン」の考え方に配慮したまちづくりは、厚労省の「バリアフリーのまちづくり活動事業」(二〇〇一年)として各地でさまざまに実現している。

さらに重ねて物産、文化、余暇にわたって「青少年」「中年者」「高齢者」の人びとが、それぞれの立場で暮らしを便利にし、またお互いの活動を支援し合議し合うのが「三世代会議」である。そのための常設の施設が「三世代会館」であり、それぞれの要望を具体化していくために、どこの自治体にあってもいい施設である。

さまざまな課題で「三世代会議」を開くこと。先人の事跡から学び、後人に伝え、いま暮らしている三世代がそれぞれの力を十分に発揮できる「三つのステージ」を形成する。その上でみんなが共有する「新しいふるさと樹形」を整え、幹を太らせる。

そんな活動の中で高齢期の日々を充実してすごすのが「エイジング・イン・プレイス」の人生である。

「地域シニア会議」

*国防意識の「地域からの逆流」は「」から

この項がこの章の胸突き八丁の正念場である。ごいっしよに考察していただきたい。

地域に暮らす高齢者には多様な人びとがいる。

ふるさとに残って地域の物産や伝統を守り、次世代を育ててきた人びと(O字型人生)、ふるさとを離れて大都市で活動した後に高齢期と終末期をふるさとに戻って過ごす人びと(U字型人生)。

お互いが蓄積してきた知識や技術や人脈や資産などを合わせて、地元を「地域特性を持つまち」にするには、双方が有効に働くための「しくみ」が必要であろう。

また魅力のある町には、これまで関係を持たなかった人びとも高齢期を過ごすためにやってくる(D字型人生)。その中には都市郊外の自宅を売り払っていなかに居宅を建て、地域には関係をもたずに特急で通って都会で過ご

すという「止まり木」的な住民（G字型）もいる。一部の
このようにタイプの高齢者は、ここでの「エイジング・
イン・プレイス」の欄外の人としておきたい。

U字型人生を求める人はニシキを飾って帰る必要はない
のである。保持する資産のうち三分の一でいどで並み
の住居をこしらえて、三分の一の資産は高齢期を過ごす
まちづくりに提供し、残る三分の一を私的に留保して暮
らすのがいいのではないか。

ボランティア活動を通じて「NPOの法人化」から「地
域包括ケア」まで際立った成果をあげてこられた「さわ
やか福祉財団」の堀田力理事長は、サラリーマン定年後
の男性の社会参加だけは未達成なのだという。

「新しいふれあい社会の創造」の旗印をかかげつづけて
二〇年、ご苦労されたが、いまやつとその機運が動きだ
したのではないか。定年後の高齢者が保持する「知識・
技術・資産」を活用して「地域コーディネーター」とし
て活動することが広く求められている。この活動なくし

て地域の活性化はありえない。地域の活性化なくして国
の活力も国防力もありえない。まさしく究極の「エイジ
ング・イン・プレイス」なのである。

自治体は仔細に「テーマ別」に「地域コーディネータ
ー」を認定して、協働活動を強めることになる。それぞ
れの「コーディネーター」は地域の高齢者と語り合い、
たくさんのお水玉模様のようなテーマ別の活動体を形成す
る。就労について、趣味について、まちの緑化について、
孫育てについて、あるいは健康（認知症や終末期医療）
について。世代間、男女共生についてなど。さまざま
分野の地域の課題について語り合い解決する機会と場を
こしらえる。

「地域コーディネーター」のメンバーのうちには、NP
Oのリーダー、元議員、元職員、名誉教授、芸道家（陶
芸や園芸など）、農産家、医師、僧侶・などが想定され
る。働く名士・名誉町民である。その活動の総体が「地
域特性を持つまちづくり」になる。

そして町の来歴に長くかかわってきた地元高齢者が中心になって、外部で培った経験や知識をもつ新住民である高齢者とともに「地域シニア会議」を構成する。

既存の権益を守るために排他的になってはいけなし、一方で外から加入した人びとも地域の伝統やしくみを無視してこれまでの暮らし方を持ち込もうとすることはよくないことだ。O、Q・U・J字型住民がお互いの長所を組み合わせた「地域シニア会議」が成立してはじめて、「地域特性を持つまちづくり」形成への拠点ができたことになる。この成立の遅速が活性化の差を産むだろう。それは同時に、まちの将来を担う子どもたちの「青少年期のステージ」、これまで地域を代表して活動している中年世代のための「中年期のステージ」に配慮しながら、これまでになかった新たな「高年期のステージ」をこしらえることになる。三者がバランスよく機能する態様をつくりあげる検討がはじまる。

この「地域の三つのステージ」の創出は、「少子・高齢

化」に即応する住民活動であり、それはまた三世代それぞれが推挙したメンバーによる「三世代会議」という新しい活動主体を成立させることで推進される。高齢者のイニシアティブによってつくられる新たな「しくみ」であり、それ自体が地域の特性を表現したものになる。

青少年・中年、高年齢の代表者による「三世代会議」の「高齢者部門」が「地域シニア会議」である。

これはこれまで活動してきた「老人クラブ」「社会福祉協議会」「地域包括支援センター」「シルバー人材センター」「生涯学習センター」「地域文化団体協議会」などと人脈が重なりながら、新たなまちづくり事業活動の中心拠点となる。「地域コーディネーター」でもある人びとのたまり場である。

ここに地域の歴史になかった「新たな歴史をつくる」活動がはじまる。この「三世代会議」の設立と運営は、キイになる人の立場がたいへん重要になる。

中心メンバーとなって運営にあたるのは、地域の隅々

を知りぬいたみなさんである。Uターンした名誉教授や企業経営者や高齢政治家も加わるが、中心になるのは地元で活躍してきた高齢者（O字型地識丈人）である。公開でまちの将来を談論する「地域シニア会議」は、地域が誇る「シニア文化圏」のひとつとなる。

公開の「地域シニア会議」は、地域住民の仔細な要望をしつかり聞きとることができる場となる。

たとえば高齢者の日用品の購入から、医院・病院への通院、図書館など公共施設の利用法、散歩道の整備、地産品情報、四季の伝統行事・風習、人物評など、共通した話題から個別の要請までいろいろである。

公開だから爆笑と拍手と思わぬ展開の議論のうちに会議は進行する。地域の課題を具体的にその解決法まで検討するのが「地域シニア会議」の役割である。

一般的には小学校区で三〇人ほど。課題ごとに七〜九人といった分科会を構成する。「わがまちのベスト・ナイン」か「シニア・イレブン」。他地域と異なる内容が、将

来の「地域特性のあるまち」をつくる契機となる。自薦、他選、互選、地域の実情を反映したしくみになる。

何より「地方からの逆流（地域民主主義）」をおこす潮目の時期だから、ありきたりの発想や表現力の人では当たれない。とくに公開の「地域シニア会議」では、未整理のままのナマの住民の意見を的確に整理したり、多様な意見を調整したり、党派的な利害を排して中立を保ったり、民主的な進歩を保ちながら即座に公平な判断ができ、柔軟な表現力のある人の選出が求められる。

「地域シニア会議」が中心になって「三世代会議」を呼びかける。「三世代会議」が討議を重ねて作りあげた「地域特性を持つまちづくり」（ふるさと創生二構想）は、住民をも自治体をも県をも納得させるレベルで「地方主権」「平和擁護」「民主主義」を具体的に担保する自治能力の表現となるにちがいない。国防軍ではなく国を守る。国民意識の醸成も「地域からの逆流」もここから始まる。というか、ここからしか始まらない。

「地域シニア会議」は、高齢者活動に理解をもち、成果を共有できる高齢者代表を推薦して議会に送る。もちろん現職議員にも役割を果たせる人は少なくないだろう。

住民の意向を集約しながら、地域の高齢者や子どもたち、そしてみんなが暮らしやすい生活環境を具体的に検討していく。できるかぎり多くのテーマについて、これまでの医療、介護、福祉などについてはもちろん、環境や物産や伝統やまちづくりや高齢人材養成といったテーマについても議論を繰り広げていく。

この高齢者が主導するしくみが成立して活動をするとき、その過程でいくつもの根つきがいい「地域民主主義」の現場を形成する。地域をまもるそれが「戦争の歴史にまなび、平和の歴史をつくる」活動の拠点となる。

「人生九〇年時代」を生きる高齢者（本稿の「昭和丈人」層）が、いままでの歴史になかった新次元の国土を後代に残す「歴史的なしごと」を仕上げるだろう。

三 「地域高齢人材」の養成

「市立高年大学校」（高齢人材養成センター）

* 「地域の歴史をつくる」高齢人材を養成する

ヒトづくりは「若い世代」だけではない。

明治と昭和のふたつの町村大合併のときには、新しい自治体が地域発展のための人材養成（教育）を重要な目標の一つとしてきたことに注目したい。

明治維新後の「明治の大合併」のときには、わが村の「村立尋常小学校」が合併のシンボルとされた。村立小学校は子どもたちに多くの夢を与え、地域を発展させる人材を育成した。その夢はいつしかお国のためとなり、半世紀の後には戦争へと子どもたちを駆り立てていった。三〇〇〜五〇〇戸の規模で教育、戸籍、徴税、土木、救済などが課題だった。

大戦後の「昭和の大合併」のときには、わが町の「町立新制中学校」が合併のシンボルとされた。子どもたちは町立中学校を卒業すると、地元の産業を守る者は残り、多くは都会へ出て行って高度成長の担い手となった。八〇〇〇人規模で、新制中学、消防、保健衛生などが共通した課題だった。

さて二一世紀の新時代をめざした「平成の大合併」では、新しい市は将来の地域を担う人材を育成するために、何をシンボルとしただろうか。

国（文科省）は、生涯学習のほかに明確な指針を示さなかった。

明治の「村立尋常小学校」、昭和の「町立新制中学校」という合併時のステップからいくと、「市立の高等教育機関」であり、それは合併協議の課題となった「少子・高齢化」にみあう対策である意味からいって、高齢者が対象の養成機関となるべきものであった。

「仮）市立高年大学校」といった態様のものが、今回の

合併の教育シンボルとなると想定された。すでに各県・各地に六〇歳以上を対象とする「地域生涯大学校」（高齡者大学校）は開設されていて、多様な成果をあげており、本来は文科省が地域自治体の主導において地域発展のために設置を検討するよう提案すべきだったのである。

残念だったのは平成の市町村合併の先駆を担った地方の自治体にはそういう構想がなかったことである。

どういう施設の構想がありえたのか。

地元の高齡者、地域に帰って過ごす高齡者を対象にする。地域のもつ課題を考えるとともに、長い高齡期を豊かに安心してすごすための知識・技術を学ぶ。つまり地域で元氣に高齡期をすごし、その能力をみずからと地域のために活用する高齡人材を養成し、同時に生涯の友人を得るための機会とする施設だったのである。

医療・介護・福祉の「地域包括支援センター」、就労の「シルバー人材センター」とともに、新たに高齡人材を養成する「仮）地域高齡人材養成センター」が構想され

て、その中核になるのが「地域高齢者大学校」である。「シルバー人材センター」が就労のほうにあるので使いづらいが、時代表現としてなので「シニア人材養成センター」でいいという意見もあるが。

「平成の大合併」時の重要な検討課題であったのだが、文科省からその提案はなく、省内に担当する部局もつくらずにすぎたことを、地域高齢人材養成期における歴史的欠落として受け止めねばならないだろう。

幼児教育、小中高大学教育とともに、新たな「高齢社会」に対応する高齢者教育機関が文科省によって検討され、自治体に新設が要請されなければならない時期だったのである。

高齢化が先行するわが国の国際的課題であることを文科省は認識し、早急な検討と対処が必要だろう。「生涯学習」だけに固執すべきではない。「人生六五年時代」から「人生九〇年時代」への意識変革を要請し、社会参加を訴えたのは、ほかならぬ国の「新高齢社会対策大綱」(二

〇一二年九月、閣議決定)であり、六五歳から九〇歳までの二五年の長い「成熟期の人生」を送るに当たった知識や技術や生涯にわたる友人は必須の条件である。文科省による追加提案は、一步を争う課題である。

そのための公立教育施設は、個人には豊かな人生を、地域には新しい活力を生む源となる。その設立の可否、遅速が「特性あるまちづくり」の差を生むだろう。

合併の結果、「個性ある地域の発展」という合併による地方分権の目標とは裏腹に、往年の特性や精気を失って萎えているところが見られる。「ひとり暮らしのお年寄りの死(孤独死)」の増加にも、高齢者とその人生への社会的関心の欠如があることを、「高齢社会対策大綱」を作成した内閣官僚は、自分の足元からはるかにつづく高齢期の人生として見据えて対処せねばなるまい。

新しい「地域社会」が、高齢者にとつてもだれにとつても暮らしやすい姿になるためには、「地域の歴史をつくる」高齢人材の養成が不可欠だからである。

「地域カリキュラム」

* 地域特性を知り活性化に活かす

多くの県が「教育立県」を宣言しているのは、何より地元で暮らして地元を豊かにする人材の育成に力を入れているからである。

すでに各地で成果をあげている「地域高齢者大学校」（生涯大学校ほか名称はさまざま）は、地域活性化を担う人材を養成するために、それぞれに地域性を加味したカリキュラムを構成している。

修学するのは六〇歳をすぎた高齢者で、これまでの経験に重ねて「人生九〇年時代」の高齢期人生を見据えて、有意義に過ごすための知識や技術を新たに習得し、生涯の学友を得ている。活動的な高齢者は増えつづける。その人びとが地域でいきいきと暮らす姿が増えるために「地域カリキュラム」は有用な要素である。

ここで注目すべき実例として、兵庫県の「いなみ野学園」を紹介しよう。

全国に先駆けて開設した四年制高齢者大学校で、六〇歳以上が入学資格。週一回の講義で、学科は園芸、健康福祉、文化、陶芸。クラブ活動には、さすがに高齢者らしく、ゴルフ、詩吟、ダンス、盆栽、謡曲、表装、太極拳、ゲートボールなどもある。より専門性をもつリーダー養成のためには大学院も設置されている。

「地域高齢者大学校」の名称はいろいろである。

沖縄県は「かりゆし長寿大学校」、島根県は「シマネスクくにびき学園」、橿原市は「まほろば大学校」である。

各地で各様の構想で実施されており、東京の世田谷シニア・カレッジ、江戸川区総合人生大学、成田市の生涯大学院などではそれぞれに独自の経緯と業績を重ねながら、個人的な能力開発、地域社会が必要とする多様な能力の養成などの目標を掲げて活動している。

自治体主導で全国展開が急がれる教育施設である。

「地方大学の多重活用」

*子は昼に親は夜に同学親子の談論風発

地方の公立大学は「国土の均衡ある発展」のために成果をあげてきたが、全国どこも同じようなカリキュラムを組んできたために特徴に欠け、駅弁大学などと軽視されて久しい。

が、「地域の個性ある発展」がいわれ、地方大学も独自の地域性を取り入れた講座によって変容するチャンスを迎えているのである。地域経済、地場産業、地方文化・言語・歴史、伝統工芸など「地域関連講座」が並ぶことになる。受講者は地域で「第三期の人生」を過ごす高齢者。「地方大学シニア大学院」である。

地域での暮らしを豊かにするための基本となる地域の特性を採り入れた課程を強化しているのは、時代に先手を打った生き残り手法でもあるからだ。

東京にはシニアの大学院入学を応援する「塾」もあるし、いち早く東京経済大学では二〇〇七年四月からシニア対象の大学院を開講した。出願資格が五二歳以上。立教大学でも開講。早稲田大学は学外キャンパスで開講している。埼玉大学は「充実した第二の人生を埼玉で」ということで、夜間コースをシニアに開放した。

地元にもどって高齢期を迎えようとする「Uターン」の人びと、高齢期を迎えて新しい情報を求める地域住民の要請に応じて開講するのが、地方大学の「シニア向けカリキュラム」である。人気テーマによっては、全国各地から高齢者が勉学にやってくる。長期滞在し、そのまま定住あるいは永住者になるかもしれない。

「地域の高齢化」事業に参画する人びとのための課題を中心に構成される講座は、物産情報・地方文化・人材の集積、発信拠点として機能をはたすことになる。

そしてなによりも愉快なのは、同じ時期に同じキャンパスで、オヤジやオフクロは夜間の「シニア大学院」で

人生第三期のための知識や情報と生涯にわたる友人を得る「エイジング・イン・プレイス」。そしてムスコやムスメは昼間の大学課程で人生第二期の社会参加のための専門知識を学び、活動期の友人を得るという「大学の多重化活用」である。

高齢化時代にあつて当然とする大学構想である。ここでも文科省は柔軟な対応を迫られるだろう。

六〇歳をすぎて長い高齢期を視野に入れた「シニア科カリキュラム」でスキル・アップして、前職の経験を活かした「第三期の人生」をめざすオヤジやオフクロや先輩たちの意欲的な姿が、同じキャンパスでグータラに過ごしていた現役学生に与える影響が大いに期待される。

「大学多重化活用」のメリットはもうひとつ。

「シニア大学院」には六〇歳をすぎてキャリア指向の熱心な人びとが学びにくるわけだから、名誉教授や「シニア教授」のスキル・ブラッシュ、つまり知識のさび止めにも大いに役立つことになる。

四 中心街は「暮らしの情報源」

「商店街」はモノと暮らしの情報源

*「地域の顔」も店じまいしたシャッター街

M市駅前通りの入り口にも「みんなに親しまれる商店街」という横断キャッチフレーズは掲げられているが、シャッターをおろした空き店舗が目立つ商店街からは活気が間引かれていて、親しい気持ちも間引かれる。

二〇年ほど前までは、あれほど住民みんなに親しまれていた商店街だったのに・・・。

「ここまでさびれちまった商店街にもう未練ないね」と通りすがりの人から言い放たれるのが一般的。

「シャッター通りに期待しない、コンビニとスーパーがありゃいいじゃん」と若者から無視されるのが風潮。

たしかに商店街を歩いていても楽しくない。店内から

の呼びかけがないからである。いまやものを買うだけなら、家にいたってインターネットの「電子モール（商店街。楽天やamazon）」で、何万件もの商品に出会える。購入すれば明日にも宅配される。

ほかにテレビ・ショッピングや通販。クルマで外に出れば、バイパス沿いに大型スーパー、ファストフード店があり、町なかには駐車場設備のあるコンビニが網をはっている。多くの商店街は再開への契機もないまま成り行きにまかされている。

変幻自在な商品流通の包囲網。そのなかで駅から旧市街へと通じる駅前通り商店街は、じわじわとさびれるにまかされてきた。

移動がクルマ中心になる一方で、日用品が国産から安価な途上国製品になるという「外圧」にさらされて、長く住民に親しまれてきた商店街が求心力を失い、顧客の足が遠のいていった。

「M市駅前通りに限ったことでないのは、同じ「外圧」

に屈したからである。貿易不均衡による日米構造協議、「大規模小売店舗法」の改正からはじまって、商店街をまるごと取り込んでしまう大型ショッピングセンターの登場。もはや小まめなモノの流通だけでは太刀打ちする手立てはない。

一九八二年が小売店のピークだったという。そのころは全国に一七二万店、商店街は一万四〇〇〇カ所あったという。商店の数もそうだが街に人をひきつける活気があった。商品ばかりか人生の先達があちこちにいて、元気がもらえたのである。

歩行型の住民にとって「モノと暮らしの情報源」であった中心街の崩壊が住民に何をもたらしたのか。

再興への努力がさまざまに試みられているが、後継者のことまで考慮すると、なお頑張って営業をつづけている老舗といえども猶予はない。

明らかな「構造の問題」だったから、どなたにも記憶があるだろう。まず細々と商いをしてきた小売店で儲け

が出なくなり、投資ができなくなり、将来に魅力を失って後継者がいなくなった。原因は商店主の才覚の有無に封じこめられ、煤を払った神棚にむかって何代目か前の創業の先人に不明をわびながら、商店主たちは店を閉じたのだった。

じわりじわりと鉄道客やバス客が減りつづけ、商店の店じまいの時間が早くなった。それとともに商店街に防犯用シャッターが増え、街を歩く人びとへの親しさを閉ざしたのはまず商店街のほうだった。めっきり人通りが減り、店内で話し込むお客の姿も少なくなった。

中心街の道筋の中心にどっしりと店を構えていた古手の商店までが、「え、あの店も？」といった話題になりながら消えていった。

まことに惜しまれるが、その中には江戸期からの歴史を持ち、「地域の顔」を支えていた特産品の店が含まれる。和紙・毛筆・べっこう・陶磁器といった工芸品の店、呉服・家具といった伝統品の有名老舗までが次々に失われ

ていったのである。地味に地方出版を手がけて、地域文化の拠点だった老舗書店も、大型店舗の出店のあと、しばらくして灯りを消したのだった。

そして地方の流通を支える砦であり、地域住民に馴染みの濃かった地元資本の百貨店、宇都宮市の上野百貨店や和歌山市の丸正百貨店といった有名店舗の経営不振が伝えられるのと前後してM市でも百貨店と家具店が倒産し、市民に商品流通の変貌と再開の不可能ことを納得させることになった。

二〇年ほどでこうも変わるものか。

「歩行生活圏」と「車行生活圏」

* まちの中心街に集う子どもと高齢者

全国のまちづくりの中にも、「歩くまち」（秩父市・倉敷市・安来市など）はテーマになっている。高齢社会への移行を見越して、「買い物空間にとどまらず、心地よく

歩いて過ごせる時間消費型の生活圏をめざす」として、街を歩行者モジュール化する都市もある。

地域のまちの中心街については「歩行生活圏」と「車行生活圏」との住み分けが必要であろう。

「歩行生活圏」のおもな利用者は、日課として小一時間ほどの散策に出動し、使いなれた小物や茶菓を購入し、暮らしの情報源としている高齢の人びと、日用の買い物をする母親たち、「居場所」をえた子どもたちである。

「街に子どもたちの姿や歓声が聞こえないようなら活性化に明日はないですよ」と商店会を代表して中心市街地活性化の「基本計画」作成にも参加しているUさんは熱意をこめてそう語る。

日課としてやってくる人びとが安全に過ごせる「歩行生活圏」の中心街。おじいちゃんと孫が、母と子が、安心して散策や買い物や居場所ので楽しめる「世代交流のステージ」である。

「三世代四季型中心街」をめざす

*日課でおとずれる「買い物＋遊歩空間」

「地域の四季」を組み込んだ「四季型中心街」づくりでは、街の景観としてどう取り入れるかが課題である。中心街もまた、はつきりと「地域の四季」を感じさせる「舞台づくり」が必要なのである。

まちづくりの中にも「歳時記の感じられるまち」（長岡市）や「歩いて楽しむ街、四季が感じられる街」（盛岡市）をめざすところがある。

商店街もこれまでは「中元」（夏）と「歳末」（冬）の二季だけだった催事を、季節ごとの「四季の催事」として構成し直し、住民が季節ごとの街空間を楽しむにくり出し、さらに次の季節への期待を抱けるような演出に、商店街の賑わいを取り戻す契機がある。

その演出者は地元の「街元リーダー」である店主と高齢店員と高齢住民が担う。二季型から四季型へ。そ

してさらに「三世代四季型中心街」へ。

これなんですよUさん。しかし商店会を代表するUさんは、理屈としてはわかるが、年二回でさえもすぐ次がやってくるというのに「年に四度はムリ」という。

ムリして二度ではなく、ムリなく四度、参画する高齢世代ボランティアがお手伝いして「季節ごと四つのわがまちの景観」を街空間に取り込んで賑いを呼び戻すのだから、といってもUさんは首をタテに振れない。

四季折り折りの風物を取り込んだ春・夏（中元）・秋・冬（歳末・新年）を表現する季節の装飾がほどこされる。

「三世代四季型中心街」の演出のために、わが町の歴史・伝統、産物、風物、人物、文化、芸能、技術といった「地域の特性」に目を配り、「わが中心街」の態様として取り込む。こんなまちづくりを、わが人生と重ね合わせる「エイジング・イン・プレイス」の現場がここにもある。

街の商店街の重要なテーマに、子どもたちの居場所である「青少年のステージ」づくりがある。たとえば遊具

を固定せず子どもアイデアで変化させる児童公園や「一八歳以上はお断り」といった「ブック&ゲーム・センター」。好きな本やメカやソフトに存分に触れながら、友だちと歓声をあげて楽しめる。そんな子どもたちのための安全な居場所づくりは、次世代を育て、街を活性化するための重要なテーマである。

高齢者といわず地元ユーザーが求めるのは、必要とする商品を頼めば手にはいるユーザー中心の流通である。そういう要望を取り入れた新たな流通拠点のひとつが、地元商店会が商店主と高齢店員と高齢住民の協議によって運営する「地域流通スクエア」（地域住民が主体の道の駅）といった形態の「みんなのおみせ」である。

お互いに「カオが見える流通」の拠点であり、商品性の高い「地場季節商品」を主力商品としながら、スーパーやコンビニでは入手できない超コンビニ商品を提供し、地域の人びとの要望をサポートする。商品知識の豊かな店員がいて、高齢者が継続して用いる日用品の注文と配

達を一手に引き受けてくれる。自治体の福祉健康課とも対応して介護者などへの物品の配達などもおこなう。「中心街の中心核」として、個別の商店、公共機関・施設の情報ネットワークでむすんで提供する。

そういう「みんなのおみせ」を組み込むことで、「商店街の求心力」をつくりだす。二四時間営業の「超」スーパー・スーパー機能をもつ頼りになる拠点が登場する。「歩行生活圏」での「三世代四季型の中心街」の姿をスケッチしてみよう。

町全体が「地域の四季」をたいせつにするようになれば、その中心街にも色濃く反映される。地産品をはじめさまざまな季節用品が集まる。街の伝統行事や風物が公開される。そして次の季節の訪れが待たれるような「三世代四季型中心街」がステージ化される。

そういう姿になれば、「車行生活圏」と共存する四季折り折りの「歩行生活圏」として、地域の暮らしを豊かにする「わが街の中心街」が再生され、新しい四季の暮ら

しが創出されることになる。

「商店街って、おもしろいじゃん」と、通りかかった無季節・無機質そだちの若者たちがいうだろう。

一人ひとりがそうして過ごすうちに生活圏にある「買い物＋遊歩空間」は「三世代四季型中心街」へと変貌がすすむ。近隣に住むだれもが小一時間ばかり、遊歩（散策）や買い物や語り合いのためにやってくる「暮らしの情報源」としての中心街。

「季節の風物」に安らぎながら、ふと出会った知人と気軽に談話を楽しみ、お菓子屋のテラスで一杯のコーヒールと店自慢の自家製ケーキを味わい、あるいは茶を商う老舗で一服のお茶と和菓子を味わう。

ひとときお国ことばで語りあい、暮らしの声や音を快く聞き、子どもたちの遊ぶ姿を見、歓声を聞き、街の臭いを胸に収めることができる街。だれもが小一時間ばかりやってきて、みんなでつくるそんな「三世代四季型中心街」なら、今日にでも行ってみたい。

第七章 高齢者

一 ひろしの「住民」として

「半熟の高齢者意識」

*この一〇年は「高齢者意識」が熟不足

自宅の居間のテレビ画面では、朝、昼、晩、コマーシャルも含めて、若い女性ばかりがはしゃいでいて、成熟した「高齢者」むけの番組がない。あっても目立たない。

「これで先進高齢社会のモデルなんていえるのか」なんてことも、高齢者が一〇人にひとりであったころには許されても、四人にひとりになった今になっては、家人の前で声を出していえることではない。

「いまさら何？」と、テレビの前でまたグチりそうな親父を察して、娘は目で言つて座を立つてしまう。

「超高齢社会」つまり「本格的高齢社会」またつまり「長寿社会」となると三幕目であり、全世代が参加する時期

だから娘も加わる段階なのだが、その前の一幕目の「高齢化社会」、二幕目の「高齢社会」の段階が欠落していたからわからせようがない。

自省をしつつ、娘にも伝えたいことはこういうことなのである。

高齢者が多くなるのは「高齢者社会」である。ほっといてもそうなるし、だれにでもわかる。多くなった高齢者が力をあわせて自分たちが暮らしやすい社会にするのが「高齢社会」。なにもしなければ「高齢者社会」のまま、対策を講じてはじめて「高齢社会」となる。だれにでもわかるはず。だがそうならない。

前者のままだから、若者から見ると、やたら目立つ高齢者が何もしないで遊んでいるように見えるのである。

これは別の項でも述べたが、ここでは別の角度から説明したい。

高齢者が増えはじめた「高齢化社会」（高齢化率七％～一四％）のころは高齢社会対策は準備期で、さらに高齢

者が目立ってきた、高齢者同士が力を合わせて暮らしやすい「モノ・居場所・しくみ」などをこしらえる段階が「高齢社会」（高齢化率一四％～二二％）の時期。またさらにそれを過ぎて高齢者が呼びかけて世代を超えてみんなでそれぞれに長寿のため対策に努める段階が「超高齢社会」（高齢化率二二％以上）あるいは「長寿社会」の時期ということになる。いまやわが国は、「超」がつく三幕目の段階にはいつているのだが、右のような姿になっていない。

一幕目も二幕目もなく、三幕目を迎えてしまっている。いずれにせよ高齢者が中心になって動かないでは「高齢社会」が成立するはずはない。だれにでもわかること。高齢者が四人にひとりまで増えた「高齢者社会」で、みんなが願うレベルの地域や職域が成立していないのは、すぐれた演出者がいなかったせいでもあるが、三幕目まで通しの出演者である高齢者自身が、役回りもせりふも知らないからだ。まずそう自省してみることが最初。

高齢者ならだれもが知っていなければならないプロログが、一九九九年に国連が提唱した「国際高齢者年」だった。二一世紀の国際的潮流である「高齢化」への「国際ドラマ」の開幕である。国連の要請に応じて、わが国も参加して、全国的な記念行事をおこなった。

これを機に「日本型高齢社会」のブランドデザインを掲げて、「高齢社会対策」を展開していれば、つまり優れた演出者がいれば、新世紀一〇年を経て、高齢者意識も定着し、「モノ・居場所・しくみ」もかなりの成果が見えてきて、国際的に誇れる「日本型高齢社会」にむかっただのモデル事例を形成する途上にあることが、娘にもわかったはずなのである。

この一〇年ばかり、高齢者はみんなであたつの面での成熟と達成に留意する必要があった。

ひとつは一人ひとりの「高齢者意識」の成熟であり、もうひとつは「モノ・居場所・しくみの高齢化」の達成へむかう活動である。当事者である高齢者一人ひとりが

意識して努めなかったのだから、成熟どころかなお半熟なのである。まずは「高齢者意識」の成熟が先。

「成熟した高齢者意識」をもって、だれもが願うようなレベルの地域や職域をこしらえるために立ち上がりたければならない。立ち上がって動かなければ。

娘に何かいう前にやる必要がある。

「高齢者は社会の被扶養者」か

*みんなでわたった「霞が関の赤信号」

どうしてこういうことになったのだろうか。

一九九九年の「国際高齢者年」の記念行事を終えて、新世紀を迎えて、国際的潮流である「高齢化」にむかって、政治リーダーは、その体現者である高齢者層が活動できるように「グランドデザイン」を掲げて参画を呼びかけねばならなかったのである。その時に、当時の首相は「所信表明演説」(二〇〇一・五・七)で何といったか。

あろうことか、将来の「ケア」における負担増を取り上げて、「給付は厚く、負担は軽く」というわけにはいきません」と言い放つありさま。それが首相ばかりではなく、おおかたの官僚と為政者の時代認識であった。「高齢者対策」であり「高齢社会対策」ではない。

「高齢社会」にむかう時代だからこそ、「給付は厚く、負担は軽くだけは、何としても保っていきたい」と訴えて、将来の国の財政難を説きつつ、国民にとくに増えつつあった元気な高齢者層に、「自助と自律」の意識とともに、高齢社会活動への参加を求めるのが政治リーダーの発言というものだったのではないか。

その所信表明演説を聞いて、天を仰いで慨嘆した学者や官僚や高齢社会活動家や高齢者がいたはずである。

その後も国は、高齢者の将来に不安を与えるような政策をとりつづけてきた。というか、とらざるをえなくなったのである。

このままだと、これは記したくないが、「心優しい老齡

者が善意で死に急いでくれて、日本型高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」なんて海外発信することにならざるをえない。一〇年余の延滞のためにその気配がみえてきている。来たるべき国際的な「高齢化時代」を展望する時、先行する「高齢者国日本」として、あまりにつらすぎるではないか。

新世紀のはじめ、先の「所信表明演説」をしたのは小泉純一郎首相である。

いま「原子力発電の全面禁止」で騒ぐ前に、一〇年余の「高齢社会対策」の延滞をつくった者を代表して「君子豹変」して事情を説明してほしいのである。今世紀はじめに、みんなを誘導して霞が関の赤信号をわたったのは、小泉総理だったのだから。

いま「アベノミクス」で何の恩恵も受けず、広がった格差の底で、善意の高齢者が、「この国の将来の姿はもう見たくない、少ないけれど子どもに資産を残せるうちに早く死にたい」とつぶやくような国をだれが望んだら

う。政治リーダーは一〇年後の「高齢社会」の姿を想像し構想できなかったのである。

この国はこの一〇年余、まちがった国づくりの道を選んで歩んできたことを知らねばならない。

「高齢者は社会の被扶養者である」と位置づけて、その上での「医療・介護・福祉」の施策ではたしかに国際的評価を得たし、平均寿命では世界一となっている。これは率直に世界に誇るべきことなのである。

重ねていうが、問題は「高齢者」対策ではなく「高齢社会」対策にある。政治リーダーは「日本型高齢社会のグランドデザイン」を衆議したか。先の「消費税」を小渕内閣のときに「社会保障」の完全目的税にするためとめてくれた長老政治家は、「そういう構想力は政治リーダーにはなかった」という。

政権内にその動きがまったくなかったわけではなく、二〇〇一年一二月、小泉内閣は「高齢社会対策大綱」の改正を閣議決定しているのである。紙背まで読まなくと

も、その記述の中に優れた官僚と学者によってなすべき対策は埋めこまれているのである。政治リーダーが時代を見抜けなかったといわれても弁解の余地はないだろう。いや確かで仔細な弁明はしてほしい。

「高齢者二五%（四人に一人）時代」

*「二一世紀日本型モデル」をつくる

一九九九年の「国際高齢者年」には、総務庁の主催で全国レベルで記念行事がおこなわれた。「すべての世代のための社会をめざして」というテーマである。当時六〇歳くらいで福祉のありように関心をもっていた高齢者のなかには、活動に実際に参加したり、「ああ、あつたね」という記憶がある人は少なくないはずである。

しかし問題意識は一般国民にまで浸透せず、何よりも残念なことには、その後、新たな高齢社会を要請する国民運動にまで発展しなかったことだった。

福祉関連の団体や活動家を中心にして事業は全国で開されたが、「国連の記念年」の行事を終えると、静まってしまったのである。政府にその後の構想がなかったから、総務庁内の高齢社会対策室も縮小してしまったのである。そのあたりのことを関係者は語ってほしい。

政治リーダーに構想がなく、主体者としての国民が動かない状況がつづくなかでは、将来展望をもつ官僚も学者も勝手に動くことができず、霞が関の政策ベクトルの総和は、結局は「高齢者は社会の被扶養者」と位置づけるところに引き戻されてしまったのである。国連の「高齢者五原則」のうち「ケア」だけは継続された。「超高齢化社会」を迎えて、政治の側は機能していない。

二〇一二年がいい例である。

「社会保障」の中身の検討のために、官僚と学者が一〇年ぶりに「高齢社会対策大綱」の内容の改訂をおこなっているのに、政治の側は関心を示さず、「社会保障」の財源となる「消費税増税」、つまりおカネのことばかりを議

論していたではないか。だから九月に新「大綱」が閣議決定されてもその新たな内容を知ろうともしなかった。国民の代表である国会議員が無関心なために、国民が知る機会を失っているのである。

新しい「大綱」は、「社会の被扶養者」つまり「支えられる高齢者」に対して、「支える側の高齢者」の存在を指摘し、「人生六五年時代」に替えて「人生九〇年時代」の到来を指摘し、それへの意識改革と対策を国民に呼びかけている。新世紀のこの一〇年を経てのこの大事な変更を国民は知らない。知らされていない。

「団塊の世代」という若手高齢者七〇〇万人が高齢期に到達した。この「現役シニア」と呼ぶべき「支える側の高齢者」は現実に高齢の父母を介護し、子どもの暮らしを支え、孫の面倒をみる。「支えられる」どころか、実際には「支える側の高齢者」なのである。

国としては目前で増えつつける「支えられる高齢者」への「医療・介護・福祉」のしごとが先決で、精いっぱい

いの施策をおこなっており、予算は年々一兆円近く増大しつづけてきたのである。

新たな対策は、二〇一二年九月に野田内閣が閣議決定した新「高齢社会対策大綱」の「目的及び基本的考え方」にしっかりと書きこまれていにもかかわらず、政策の基点にできない政治家が、「社会保障」のための「消費税増税」を論じることができらるだろうか。一〇年延滞の高齢者への負担は大きい。もう影響が見えているのである。

経緯はともかく、ここは高齢者自身のことを論ずべきところである。だれかれの責任を追究している暇はない。

この一〇年余、高齢者としての「主体者意識」を醸成できず、保持している「知識、技能、資産」を活かした社会参加の機会を持たず、遅延の時期であった。高齢者の主体性のなさが、「構想を持つ政治リーダー」の不在をもたらし、国の政策の不在を許してきたのである。

すべての延滞の原因は高齢者の側にある、と自省して活動を開始するよりしかたがない。

ここでもう一度、先進的国家であることを測る指標のひとつとしての「高齢化率」(六五歳以上の人口比率)で国際比較を見ておきたい。

これまで久しく高かったヨーロッパ諸国を追い抜いて、アジアから日本が二〇%に一番乗りをして、二〇一三年には「高齢者二五% (四人にひとり) 時代」に達した。さらに先駆けをする。

そして二〇二〇年(オリンピック年)、ヨーロッパ勢のイタリア、ギリシャ、スイス、フィンランド、スペインなどがトップ・グループを形成して続々と「高齢者二五% (四人に一人) 時代」に達するとき、アジアの日本がフロント・ランナーとしてさらにその先をトップで走っている。高齢化ゴールドメダル間違いなしである。

ヨーロッパ勢のあとを追って、アジア途上国の高齢化も進んで一〇億人を超える(世界保健機関WHO推計)という「高齢社会」が到来する。

二一世紀のなかばに途上諸国を含めて世界が「高齢社

会」に直面するとき、日本はどんなモデル事例をもって舞台に立つのか。いまのままでは絶対にありえない。

わが国はトップ・グループを形づくっている「高齢化先進国」のうちでも、最速のスピードで高齢化が進んでいる。国際的に「社会的混乱を起こさない手法での問題適応力に優れている」と評価されている日本は、アジアで唯一の先進経済国であり、高齢社会としては「二一世紀日本型モデル」の達成が注目されている先行国である。ということは、世紀初めの二〇年ほどの間は、「日本シニア」は主役として国際的舞台でスポット・ライトを浴びている時期であり、オリンピック開催の準備、原発事故対策とともに、その成果が国際的に注目されている時期なのである。

世界のトップへ躍り出た「日本型高齢社会」にはどんな姿が期待されているのか。

いうまでもなく、高齢者がみんなの敬愛を受けて安心して暮らしている社会であり、高齢者自身もそれまでに

蓄えた「技術や知識や資産」（高齢者の「二本の矢」）を自在に活かしていきいきと暮らしている姿であり、それを支える「モノと居場所としくみ」の豊かなありようだろう。さらには後人へのさまざまな支援活動もある。

成功のモデル事例へのプロセスとしては、「一人暮らしのお年寄りがみとられずに亡くなる」なんてことはあつてはならないことである。

後から続々やってくる世界のシニア世代の前に、何と説明ができるのか。しかも戦争で傷つき、焦土の戦後を復興させ、成長日本を築いた人びとである。先行する「日本高齢社会」は、日本型モデルとして立ち現れ、そこへ至るプロセスは世界で参考にされるのである。このままでは参考にされないかもしれないのである。

これはわが国ばかりでなく、ヨーロッパの先進諸国も併走状況のなかで迎えている課題であり、ともに二〇世紀前半に遭遇した世界争乱によって多大な犠牲を払ったあと、両親は「戦後平和」が長くつづくことを願いな

がら子どもを生み育てた。

その思いを託された戦後生まれの人びとが高齢者の仲間入りの時期を迎えている。終戦の年、一九四五（昭和二〇）年生まれの人びとは、二〇二〇年には七五歳にたどりつく。

「平和団塊の世代」（戦後ツ子）が主役

* 先進諸国の同世代とともに「平和を体現」

ご存じのように、一九四五年の敗戦のあと一九四七〜四九年に生まれた七〇〇万人の人びとを「団塊の世代」と呼んでいる。一九七六年に作家堺屋太一さんが『団塊の世代』を書いて、そのボリュームゆえの社会的影響を指摘して以来の呼び名である。

同じく二〇〇万人余が生まれた一九五〇年と、終戦の翌年である一九四六年を加えると、新世紀を迎える時点での戦後ツ子は一〇三七万人（二〇〇一年一月・国勢

調査)であった。

この一〇〇万人の一人ひとりを、敗戦後のきびしい生活環境の中で生み育てた両親の思いを想像して、本稿は新世紀高齢社会の主役として「平和団塊世代」と呼んで注目しつづけている。「団塊世代」では即物的にすぎ、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満であるかもしれないが。あわせて「平和団塊世代」と呼ばせていただくのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びととともに、この「平和団塊の世代」(戦後ッ子)が、平和裏に安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿をまっとうすることが、戦争の惨禍と混乱の中で両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証にちがいないからである。

わが国の高齢者の一人ひとりが世紀をまたいで「人類の願いを体現」しているのだ。こんな役回りは願っても求めても得られるものではない。お互いにたいせつに世紀の主役を演じることにしよう。

そして二一世紀半ばの二〇四五年、「日本国憲法」は平和に徹した高齢化先進国の日本が持ちこたった誇るべき「世界平和の証」となる。一〇〇年保持しつづけて「百寿」で迎える「日本国憲法一〇〇周年」は、国際社会からスタンディング・オベーションを受けることになるだろう。世紀のドラマまで、あと三四年である。

「社会参加への三つの契機」

*「意識と活動ふたつの成熟」がかぎ

高齢者が暮らしやすい社会で暮らすには、みずからどうすればよいのか。

座して待つだけではどうにもならない。本稿は先に、ひとつは個人がもつ「高年者意識」を成熟させること、もうひとつは社会構造の「モノと場の高齢化」の達成というふたつの成熟の必要性を指摘した。指摘するとともに参加を要請した。

ふたつの成熟にむかってどこまで参加するかは随意であるが、その活動に身を投じることで、かけがえのない高齢期の人生に果敢な選択をすることになる。

そのために共有するであろう「高齢化活動への三つの契機」を抽出して、ここに示しておくことにしたい。

(一)「人生の第三期」を過ごす現役シニアとしての高齢者意識の確立

(二) 家庭・職域・地域生活圏といった暮らしの場での高齢化対応

(三) 風土と伝統に配慮した地域特性を持つまちづくりへの参加（地域の「高齢者の生活圏」や「高齢者の文化圏」を形成し、発展させる）

の三つである。

骨太の「高齢期現役人生」 右の項(一)は、だれのためでもない。みずからの高齢期の人生を滞らせることなく、日また一日を充実したものにする基本である。五〇歳をすぎたころから「高齢者意識」を立てて「人生の第

三期」の将来を見据える。その上で六〇歳をすぎたら自己目標を見定めて達成をめざす。「第二の人生」とか「余生」ではなく、それ自身が「高齢期現役人生」として体感されるものにするために、本稿がいう「丈人意識」は有効に働くだらう。いわゆる高齢期を生きる「尊厳」は、その上に成り立つ。

(二)は、高齢とともに衰える「老化型の機能や能力」を補助し、高齢期を迎えてなお発展、熟達、深化しつづける機能や能力を支援する「高齢化用品」の供給者となり需要者となって、「モノの高齢化」のために努めること。また高齢者同士が楽しんで過ごすことができる「居場所」をさまざまにこしらえること。お互いに「人生の第三期」が味わい深くおもしろいと実感しあえるのが、高齢化時代の「社会参加」の成果といえるものではないか。

高齢期の先をどこまでもめざして、過ごし終えた人生に納得して瞑目する。そういう骨太の人生を過ごす人びとの力によって、高齢者同士をつなぐ「高齢者(シニア)

生活圏」や「高齢者（シニア）文化圏」の基礎が着実に形づくられていくことになる。

「成熟」にむかう地域社会 (三) は地道な活動の広がりによる広域での成果である。「高齢化」時代を迎えて、職域でも地域生活圏でも高齢化に対応する姿勢、つまり「職域の高齢化」や「地域の高齢化」へむかう活動を支援する立場にかわりつつある。が、全体としての職場のふんいきも社会の変化もお遅々としている。そんなよじれた現実の中でも、「高齢化」を体現して「人生の第三期の現役にいる」という自覚を持ち、そう行動しつづけることが肝要である。

個人の暮らしにおいて「人生の第三期にいる」という意識をもつということは、職域や地域社会でのありようにおいて、「青少年」「中年」「高年」という三つの世代の存在を常に「多重標準」として意識して対応するということである。これまで共有してきた生活環境はそれぞれとして、青少年が将来の可能性を求めてのびのびと育つ「青

少年期のステージ」、国際化のなかで苦闘している中年世代がさまざまな場面で十分に実力を発揮できる「中年期のステージ」、そして高齢者が経験と個性を活かして後半生を自在に過ごすことができる「高齢期のステージ」という三つの世代のための「三つのステージ化」を率先して実現することになる。

(三) にとって、わが国が幸運といえるのは、戦後の民主主義の根つきを証明してみせた「六〇年安保闘争」や「七〇年学園紛争」や最近の「原発反対」といった噴出期をふくむ草の根の市民・大衆運動に、若い日に参加したり周辺にいて体験し、その後の人生経験をふまえて柔軟な思考と行動を自得した多くのアクティブ・シニア(安保丈人と呼びたい)を有していることだ。

若い日に「社会参加(アンガージュマン)」して、大地を揺るがせた熱い心と呼び覚まして動く人材にはこと欠かない。

いま高齢期に入って、新たな「高齢社会」の形成の場

に投じる時、成熟した人びとの活動によつて各地に湧くようにして形づくられる地域社会の姿を、心おきなく「成熟にむかう地域社会」と呼んでいいのではないか。二〇二〇年ころには、その総和としての「成熟した日本社会」に出会うことができるだろう。

第一章で登場していただいたTさんは、本稿が第一章で伝えた「衣装を替えた役者による歴史悲劇」の一幕を岸首相と安倍首相の姿にみるといふ。岸さんの衣装を安倍さんが着けるとすれば、安保世代である自分はいま何を着て何をすればいいのか。国防軍をいう安倍総理に対して、同じ時代を生きる一市民として別な国防活動をどうすればいいのか。

Tさんは、「特定秘密保護法案」に反対でも国会の包囲にはいかない。だが、地域での平和な暮らしを守ることに地域での高齢社会活動（平和の証）に参加することと理解したという。子どものころ着た野良着で、できることをやりたいという。

Tさんのような地域主義、平和主義、民主主義は、六〇年安保や七〇年学園紛争を経験した市民が、高齢者になつたいま人生二度目の新たな闘い、それは「平和な地域の歴史をつくる」国民運動になるだろう。

二ひとりの「市民」として

「地域シニア生活圏」をつくる

* 「民主主義の根つき」を確認する

家から一步出た暮らしの場である「地域生活圏」。

家から出るといっても、歩行か車行かによつて行動範囲はまるで違う。車行があたりまえの青年・中年者に対して、歩行（自転車まで）を主とする高齢者・子どもとは「地域生活圏」が異なるといつていい。

後者は、いわゆる小学校区内かせいぜいが中学校区内ということになる。昭和の大合併のときの範囲が中学校

区でかならず中学校が1校はある。それに公共施設や商店街があった。商店にはモノ知りの店主がいて、商店街は暮らしの情報源であった。一九八〇年代まではどこにでも見られた生活圏だったのである。

そのままの生活圏をうまく活かして、その上に車行での生活圏が多重化されていけば、日常生活にも支障が起きなかったのだが。かつて、鉄道が引かれるときには、多くの城下町では城から離して駅を作ったが、その後の功罪はこもこもであった。

車社会への対応は成り行きにまかせたところが多く、その結果は二〇年にしておおかたは町なかにシャッター街で近郊にスーパーが繁盛という「まちこわし」になっている。みなさんの生活圏も同様だろう。

構想力のある地域リーダーがいて、「まちづくり」を成功させたところもあるにちがいない。すみやかな対応により、安定した生活圏を回復したところもある。

地域生活圏（中学校区レベル）は暮らしの歩行圏であ

り、そこはおもにも高齢者と子どもたちを中心にした暮らしの場となる。

両者は同じ暮らしの場を住みやすい姿に変えるために力を合わせることになる。高齢者は経験と知識と技術を持っていて。少年たちは想像力と敏捷な行動力を持っている。中年者用に優先されている「車行のステージ」に加えて、地域の高齢者と子どもが活用する「歩行のステージ」の形成に努めることになる。

それぞれに課題別に参加した「地域シニア・ジュニア（S・J）会議」が開かれて、課題解決の方法を話し合う。その上で中年代表を加えた「三世代会議」をつうじて、子どもたちに地域文化・物産を伝承し、みんなして歩行生活圏の再生に努めることになる。

高齢者は日課として地域の中心街に向いて、仲間や青少年とともに地域の「四季型中心街」の活性化を担う。

地域の四季をたいせつにし、地域の「自然環境」や「生活・伝統環境」を守る活動に参加する。伝承として残る

手づくり技術を活かした「地域特産品」を創出する活動の先駆けをする。ここには「エイジング・イン・プレイス」の豊かな鉱脈がある。

熟成期を共有する「シニア文化圏」

*水玉模様が存在のかたち

本稿では「シニア文化圏」ということばを、強い把握力をもつ高齢期キーワードとして位置づけている。

「シニア文化圏」というのは、「人間五十年」を過ごして、それぞれに個性的にわが道での業績を積み上げてきた高齢者が、異なった成果を得た人びとと出会い、お互いのみずからの経験や業績を語り合い、高齢者同士でなければ味わい得ないレベルの理解を共有することを目途として集まった場（高齢期の文化ステージ）、といった程のところだろうか。高齢者の「居場所」といってもいい。

少し排他的にいえば、「利」を望まずに、あるいは望ん

でも優先せずに、「文を以って友と会す」といったところ。加えていえば、ここでは「青少年（ジュニア）」や「中年（ミドル）」の存在を脇に置いて、おとながおとなの「文化を語って文化を生じる場」といったほうが分かりやすいかもしれない。

そう気づいていないだけで、すでにさまざまな形で存在しているわけだから、とくに新しいことを言い出しているわけではない。ここではそれを高齢者意識の視点から捉え直すこと、これは「シニア文化圏」だと意識することで、高齢社会のなかにそれぞれに個別な特色をもつて重なった水玉模様のような印象の存在として見えてくればいいのである。

語られる「シニア文化の内容」とはどういうものか。「環境」とか「文化」というと、どうにでも広くも狭くもなるが、狭く考える必要はないだろう。学術的な領域から芸能・スポーツ、暮らしの知恵に至るまで、人為万般にわたってみんなが共有しているもっとも広い意味で

の「文化」のイメージでいい。少し限定するとすれば、六〇歳を経た高齢期にある人が関心をもって考え、語り作り、表現した事象・事物を主に対象とする、というこどぐらい。それでも新しいくり方なのである。

たとえば五〇歳で亡くなった夏目漱石の『心』や『明暗』、若くして自死した芥川龍之介（三五歳）の『侏儒の言葉』、三島由紀夫（四五歳）の『天人五衰』などは、若い日の濫読時代とは違って還暦をすぎた立場からの読み込みによって新たな発見がなされるはず。

同時代人として、二〇一二年に亡くなった吉本隆明さんのような並みならぬ思索の根っこを持った人の、一九六〇年代の状況下でロゴス（統一法則を内包することば）の混乱にまきこまれながら柔軟で示唆的であった『共同幻想論』から、思索の根っこをそのまま曝した『老いの流儀』などの作にいたるまでの、中期と高年期の作品を合わせて採り上げてみるのもおもしろい。また『蓮如』を書いた五木寛之さんは、古代インドの「四住期」から

想をえて第三の人生のありようを説く『林住期』を、最近は『新老人の思想』を書いた。個人の生き方の事例として理解されるのもいい。みずからの長年の思惟の到達点から発して試みられた井上靖さんの『孔子』や瀬戸内寂聴さんの『釈迦』といった史上の人物についての作品は、作品批評まで含めて、さまざまな角度から語り合える素材となる。曾野綾子さんも『人間にとって成熟とは何か』で終末期への心がまえをいねいに説く。

文化圏の「圏」としての大きさは、どうだろう。

テーマや参加する人にもよるだろうが、「最小規模の多数」である七〜一人といったところが基本だろうか。不可能とはしないが、四、五人では少ないために「文化」を生じるための変則や異見といった要素を含み込めないし、また多すぎると散漫になる。

メンバーが多い場合には七〜一人を代表発言者とし、テーマや時間を限って質疑などを通じて全員が参加するシンポジウム方式が有効のようである。

わかりやすい例としては、多くの会議や学会の総会そのものも高齢者が中心の「シニア文化圏」ではあるが、むしろその後の「二次会」のほうを基本型と考えたらどうだろう。二次会なら談論風発、結論を出す必要もなく、話題はさまざまに移っていく。ひとつのテーマをめぐる場合もあるが、意見が二つに割れたり三つになったり、二つの話題が混ざって語られたり、また一つにもどったりする。その自在性の中に「最小規模の多数」による発見と味わいがある。

高齢者同士が自由自在に「文化を語って文化を生じる場」が「シニア文化圏」であり、高齢期の人生の成熟とともに実感しあえる愉快的な「高齢期のステージ」なのである。小規模で静かに開かれている「* *先生を囲む会」などは、おだやかな老師を中心にして、「如座春風」（春風の中に座しているよう）というにふさわしい「シニア文化圏」として、参加者を暖かく包んで成立している。それぞれの立場で、いろいろな「シニア文化圏」に属し

ていることに気づく。

地域の知りあいとの「地域シニア文化圏」、職場の同僚との「職域シニア文化圏」、仕事での知人、ネットのウェブ・サイトで知り合った人びとも「シニア文化圏」として意識してみる。やや広がりをもったクラブ・同好会などはまさに「シニア文化圏」の典型といえる。ゴルフ、釣り、碁・将棋、郷土史、俳句ほかスポーツや趣味の間もまた改めていうまでもない。だれもがいくつもの水玉模様の重なりに似た「シニア文化圏」を大切に暮らしている。

高齢期になって親しくつきあえる人といえば、だれでも「学友」と「同僚」と「親族」の三点セットのうちに、幾人かの信頼する相手をもっているだろう。

しかし実はこの三点セットだけでは長い高齢期の人生を充足して送るには心もとないのである。心もとない理由は、どれも高齢期になって自らが選んだものではなく、与えられた環境下で得た人びとであり、外に閉じた仲間

だからだ。

高齢期に心躍る人生の充足を得るには、さらに地域や目標とする分野からあらたに加えて五つ〜七つの「シニア文化圏」での活動が、高齢期の人生に変化と厚みのある成果を刻んでいくことになる。

「日本シニア文化圏」 参加者がそれぞれの立場で水玉模様のように自在に活動していればよいことだから、「シニア文化圏ネット」といったヨコ幅を広げる成城型の組織化を急いだりすることもない。それぞれに自立した「シニア文化圏」が多様多彩に活動し合い、お互いに存在を意識し合いながら豊かな「日本シニア文化圏」が総体として成り立っていればよいのである。

極端に閉ざしすぎた組織では先がないが、引退シニアのみなさんの愉快な「仲間うち文化圏」もまた座位を少しずらした自律的な「シニア文化圏」として、その存在が理解されてくる。高齢社会の現役として、ともに成熟した豊かな人生のひとつを共有して過ごす。それなく

して何の人生か。

「シニア文化圏」だからといって「青少年」や「中年者」を排することではない。中心になる構成メンバーが高齢者であり、中心テーマが高齢者を対象とするものということであって、とくに将来の会員である中年の人びとには開かれたものでいい。ほどよい「シニア文化圏」の存在が、一人ひとりの「第三期の人生」の充足と重なるであろうことは確かである。

湧出する「第三期のシニア・ステージ」

*「シニア」ほかカタカナ表記の団体名

昭和生まれの高齢者層が、あるべき存在感を示していないわけではない。わが国の「高齢者活動」は湧出期にあって、その中心にいて主導しているのは、まぎれもない昭和生まれのみなさんのだから。長い苦闘の経緯をもつ高齢者ケアとしての「福祉」「医療」「介護」の分野

はもちろんのこと、高齢者活動は、実にさまざまな領域へと広がっており、際立つ分野だけでもこれほどにある。

各種の生涯学習（趣味、生きがい、健康）。

虐待防止、遺言相談。後見人相談。

高齢者雇用、起業支援。

年金、貯蓄・投資、マーケット情報、保険。

シニア向け新商品開発、介護福祉機器・電化製品、車・

乗り物などの製造・販売。

ショッピング、通販、宅配。

ファッション、料理、食品、レストラン、居酒屋。

ケア付き住居、いなか暮らし、住宅改修（バリアフリ

ー）、家具・用具。

パソコン教室・通信、カルチャー講座・セミナー・シ

ンポジウム、イベント。

シニア向け新聞・雑誌、テレビ・ラジオ番組。

短歌・俳句・川柳、ナツメロの会、自分史、楽団、手

づくりクラフト。

ゲートボール、テニス、ゴルフ、太極拳・ヨガ、碁・将棋、ゲーム。

環境美化、伝承活動、世代交流。

国際交流、海外ツアー、旅行、ホテル、国民宿舎。

・・・などなどである。

組織の名称はといえば、「シニア」が圧倒的に。「老人」や「シルバー」といった先輩格のものも、しっかりと根をはって活動している。

「老人」ということばは、老練、長老、教師など経験を積んだ高齢者をもいうのだが、どうも旗色がわるいのは、長く「老人ホーム」や「敬老会」などが随伴してきたために「高齢弱者」というニュアンスが働いているからだ。

「敬老」はいまや「高齢者をねぎらう」ほどの意味合いで用いられている。「敬老」には「敬老尊賢」という味わいのあるすつくと立ついいことばもあるのだが。そのあたりの欠落をフォローするために本稿の「丈人」が意味合いをもつことになる。

「老人のつく活動組織」での代表は「老人クラブ」である。敗戦後間もない一九五〇（昭和二五）年に発足して以来、自治体と連携しながら地域の高齢者の生きがいと健康づくりに貢献してきた。「全国老人クラブ連合会」（全老連）には、一〇万余クラブ、約六六七万人の会員が参加。「友愛訪問」「伝承活動」「環境美化」「世代交流」といった幅広い活動に乗り出している。

本稿が「老人力」やことし亡くなったなだいなださんの「老人党」の活動に関心を持ちながらも、新しい「高齢化」の活動にあえて「丈人論」を展開しているのは、既成の活動が収容しきれない高齢者活動に注目しているからで、決して否定的にみているわけではない。

そのほか静かにクールダウンしながら過ごす「余生」「老人力」型の生き方もあっていい。

高齢者みんながみんななどというのは、いささかキツイ話しだからである。といって、みんながみんな内向的になって立ち上がらないのは、社会の姿としてさらに困

たことになる。

「シルバー」・「アクティブ・シニア」 「シルバー」は、グリーンやブルーといった「アシッド・カラー」（柑橘類の色）などに対する色彩の比較から生まれた和製語である。

高齢者を「シルバーエイジ」としてとらえて、活動的なイメージを付加して、運動・旅行・講座などの研究所や教室が用いている。高齢者の能力を活用する「全国シルバー人材センター事業協会」や「シルバーサービス振興会」などは定着している。

ここで確認しておきたいことは、「だれもが（ユニバーサル）」とともに、それよりも優先して「高齢者自身のため」を意識した活動であっていいということである。

高齢者の活動の湧出期にあたって、さまざまな分野で「アクティブ・シニア」が先行して新しい活動を進めている。そこでカタカナ語の団体・協会が続出している。

「アクティブライフ」は、活動的な暮らしをめざすこと

で、高年者主体のボランティア・グループが用いている。

「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」など。

「エイジド」・「エージング」・「エイジレス」 「エイジド」や「エージング」などは、それぞれに年輪を刻んで到達した営みが意識されて使われている。

「エイジド」は、ワインやギターやコーヒー豆での利用が優勢だが、経験を積んで熟成した意味で、これも高年者を支えるボランティア組織やNPOが用いている。

「エージング」は、老化がすすむことを意識して「アンチエージング」として医療や美容外科など、もつと広く「わかづくり」ほどの意味で用いられる。「ウエルエージング」や「アクティブ・エージング」として高齢期を積極的に受け入れる立場を示している。「エージング総合研究センター」や「日本ウエルエージング協会」は歴史をもつ活動をおこなっている。

「エルダー」は、旅好きのおとなのための「エルダー・ホステル」が世界一〇〇カ国に開設されていて、学習と

旅をあわせた高齢者対象の活動をしているのが目立つ。

「日本エルダー協会」や「エルダーホステル協会」など。

「エイジレス」は、年齢にとらわれないという意味で「エイジレス・デザイン」「エイジレス商品」「エイジレス・ライフ」などとして広く用いられている。

「ユニバーサル」 一方に、高齢を意識しながら人生に年齢は無関係であり、それを超えたものであるという意味での「ユニバーサル」が知られる。

「ユニバーサル」は、だれもがという意味合いで、とくに「ユニバーサル・ファッション」が、高齢者にも障害者にも快適で喜ばれるファッションとしてバリアフリーが意識されて用いられている。「ユニバーサル・ファッション協会」など。

まだまだあるであろう。ここでやや立ち入ってカタカナ語に触れたのは、高齢者活動は、さまざまな方向でそれぞれの立場で熱心に活動している人びとと組織に支えられているからで、どれかひとつとはいかない。それと

ころが多いことはいいことなのである。

「高齢者活動団体」

活動の広がりを見るために紹介がカタカナ語に片寄ってしまったが、福祉を核としながら活動している「高齢者活動団体」は枚挙にきりが無い。

その推進役になっている組織・団体の存在を見落として先にいくことはできない。

ここはその場ではないからほんの一例の紹介にかぎるが、福祉・介護の「さわやか福祉財団」や高齢者・加齢学研究の「東京都老人総合研究所」、高齢者雇用の「高齢者雇用開発協会」、高齢女性の「高齢社会をよくする女性の会」、「ねんりんピック」によって活力ある長寿社会をめざす「長寿社会開発センター」、生涯学習の「生涯学習開発財団」、住宅に関する「高齢者住宅財団」・などなど。NGO（非政府組織）・NPO（特定非営利活動法人）を中心にして幅広い活動体を形成している。分野は多岐にわたっており、全容の見極めがつかないほどに幅広い。

そして一九九九年の「国際高齢者年」の国民運動を機に設立された「日本高齢社会NGO連携協議会」（JANCA）には数多くの活動団体が参加して、運動のすそ野を広げている。

そして何より心づよいことは、「高齢社会」形成の主役を体現しながら活動する組織を支えているのが、先の大戦の惨禍と戦後の混乱を知っている昭和前期・中期生まれの人びとであることである。

三 ひとりの「国民」として

「総人口減少」と「少子・高齢化社会」

*有史以来という「少子・高齢化」・

人口の変化は、個人の身のまわりで感じられるものではないが、統計として示されれば納得せざるをえない。わが国は高齢者が増えるのに、総人口が減る。少子化が

進み、高齢化が足早になる。

わが国の人口統計によれば、二〇〇五年の一億二七七七万人をピークにして二〇〇六年からは「総人口減少」に転じた。日本が特別というわけではなく、ドイツ、ロシアなども減少国である。

「総人口減少」の事態に対して国は将来の活力維持のために「少子化」に歯止めをかけねばならず、若年者支援の細かな対策を自治体や企業の現場に求めている。

何度聞いても違和感を覚える官庁用語のひとつに「合計特殊出生率」がある。ひとりの女性が生涯に産む子どもの数を示すが、わが国の場合は、人口を維持するのに必要といわれる二・〇八にはほど遠い。二・〇〇を切ったのが一九七〇年というからもう四〇年余も下がりつづけている。二〇〇八年では団塊ジュニアの出産期ですこし持ち直したといっても一・三七となった程度。ここまですで低い国は、日本、韓国、ドイツ、イタリアくらい。

フランスは一時期一・七まで下がったが、子ども手当

や年金といった政策を工夫して二・〇まで戻っている。世論の醸成もふくめて二・〇へ戻る対策をおおいにすすめるべきであろう。

わが国の総人口は、二〇〇五年の一億二七七七万人をピークに長期的に減少するという事態を迎えている。国会の論議で、「総人口減少」の危惧に対して、政府側答弁は、減るものなら減ってもしかたがないというあまりにも消極的なものだった。

為政者としては「子育て」環境を整えつつ、減らない政策で努力したすえの結果ならいざしらず、無策のままに統計的な将来予測を述べる担当官僚がいるのには残念というより、唾然とするばかりである。

総人口が減っても問題はなく、現状のままの状況を保持すればいいという立場の人びとがいる。明治のはじめには三〇〇〇万人であったが、大正のはじめには五〇〇〇万人に、戦後直後は七〇〇〇万人に、そして昭和四二（一九六七）年には一億人に達した。一〇〇年で三倍に

なったことになる。その間に急激な人口増加による「過剰人口」への対応が政策課題とされたころもあったのだから、「過剰高齢人口」という事態は同様に政策課題として避けられないが、一過性のものだというのである。

当事者である高齢者の存在が「少子・高齢化社会」の解消のために役に立っていない。自分たちはいろいろやっているつもりが、後人からすると、なにもしないで同じ場所にいるようにみえる。「逆水行舟」というのは漕いでも漕いでも同じところにいるという状況をいう。

「高齢化社会」・「高齢社会」・「超高齢社会」

*「本格的な長寿社会」へのプロセス

「高齢化社会」というのは、ヨーロッパで前世紀の中ごろから主に学者が使いはじめたことばで、六五歳以上の老年寄りがだんだんと増えて、全人口の七％に達したころから「高齢化社会」という。理由や経緯はあるのだ

ろうが、仔細は学者に任せて、いまも使用されている国際的指標と理解しておけばいい。

他の項でも何度か述べたが、ここでも少し違った角度で取り上げておきたい。

高齢化率七％の倍数である一四％までを「高齢化社会」と呼び、余生型の高齢者の姿が街にちらほらという段階である。国も自治体も社会の功労者として、介護・医療・年金といった高齢者個人を支える「社会保障」に力をそそぐようになる。

ここからさらに増えて二一％までが「高齢社会」である。高齢者がお互い高齢者の存在に気がつく段階で、高齢者のための居場所やモノが工夫されつくられる。「高齢者による高齢社会」形成の段階である。国や自治体は介護・医療・年金という「高齢者三経費」の増加に財政上のやりくりがむずかしくなりはじめる。

さらにお年寄りが増えて二一％を超えたところから「超高齢社会」と呼ぶ。「本格的な高齢社会」であり、高

齢者ばかりでなく、三世代みんながそれぞれに暮らしやすい新たな社会「長寿社会」を共有するための議論や活動がすすむ。どの国も二一世紀を通じて高齢者が増加する「高齢化」を迎えるが、高齢化率の進み方は異なっている。

わが国の「高齢化」のプロセスはどうか。

一九七〇年にはすでに七%の「高齢化社会」に達している。そして一九九四年には「高齢社会」の一四%に。

この間わずか二四年だった。そのあと一九九五年に「高齢社会対策基本法」の制定、一九九六年に「高齢社会対策大綱」が閣議決定されている。世紀をまたいで高齢化率は二〇〇七年には二一%に達している。この間が一三年。その後は「超高齢社会」に。いまや「高齢化率」が世界最速最高の二五%にまでなっている。世界で最速で高齢社会を迎えているという実感は個人的には理解しづらいもない。

わが国は「高齢化社会」（一九七〇年から）から「高齢

社会」（一九九四年から）となるのに二四年だった。フランスの一一五年はともかく、イギリスが四七年、ドイツが四〇年というから極端に短い。その後わずか一三年の二〇〇七年には「超高齢社会」（本格的な高齢社会）に達している。

この早さは一億の人口をもつ国としては稀有の例なのである。みてのとおり国の施策は「介護・医療・年金」など「高齢者対策」で精いっぱい。「しくみ・居場所・モノづくり」など「高齢社会対策」までは手が回らなかったのだが、それを非難できる立場はだれにもどこにもない。しかし歴史的な視点で見れば、やはり政治リーダーにその構想力がなかったということになる。

わが国ではご存じのように「本格的な高齢社会」をこしらえる主役の人びととして「団塊の世代」のみなさんが「若手高齢者」として加わっている。これから史上初めて国際的に注目される「日本型高齢社会」達成への道がはじまる。一九九九年の「国際高齢者年」のあと新

世紀を迎えて一〇年、国際的にも注目されている「日本型高齢社会」への高齢者自身の関心の醸成や達成への取り組みについては、なすことなく一〇年がすぎていった。しかし世紀の事業としては遅くはない。

「日本高齢社会グランドデザイン」の不在

＊将来の高齢社会の姿を共有するために

世界規模で「一國先進高齢化」を成し遂げて、いまそれを体現しているのがわが国の高齢者である。

とはいうものの、これまでのところでは「高齢者社会」であって、本来はさまざまに繰り広げられるはずの活動、高齢者が保持している知識・技術・資産を活かした高齢化活動といったものによって「高齢社会」を体現しているという実感や共感を持つことができないでいる。

それはなぜか。

いうまでもなく「日本高齢社会グランドデザイン」が

ないからだ。国政にかかわる政治リーダーが、産・官・学の衆知をあつめて構想せねばならず、それを推進するのは国のしごとであり、それにふさわしい専任の担当大臣が内閣府に座していなければできないことである。

その担当職務はアジア地域どこか世界規模で注目されておき、「先進高齢化」を成し遂げるわが国を代表して「高齢社会グランドデザイン」を公開し、その達成にむけた成果を国際発信する責務をもつのである。そういう時期なのに現状はそういう姿になっていない。

昨年一月から今年八月まで、「社会保障制度改革国民会議」が検討したのは、医療・介護・福祉・年金・少子化であり、そのうち年金は結論を出していない。つまり本格的な「高齢社会」の構想の議論には踏み込んでいないのである。

一九九五年の「高齢社会対策基本法」制定以来、対策の中心に担当大臣を置いているのだが、職務の延滞は恥ずかしくて外にはいえないほどなのである。

歴代「高齢社会対策担当大臣」の職務延滞

*内閣府に「高齢社会対策」担当の太い動線を

最近の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府）をみると、平成二一年度版は野田聖子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣が閣議決定時での担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせ担当することでの人選であり、兼任でも「少子化対策」の方が主であることが知られる。

民主党政権時代には九人の担当大臣がいた。そのことを議員どころか閣僚すら知らなかったのではないか。参考までだが、福島みずほ、平野博文、荒井聡、岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫、岡田克也、中川正春各議員。そのひとり、少時とはいえ内閣改造時に兼任

で担当となった岡田副総理は、時節がらその重要性を知っていたればおそらく相応の対策をとったことだろう。

これはいったいどうしたことか。

予算も少なく、しごとも少なく、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令が出ないために、組閣後の記者会見でも関連する質問が出ないからだ。「日本高齢社会」の形成は歴史的挑戦なのに、国のリーダーはその重要性を知らないままである。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当している。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいるが兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い動線が内閣府内に整っていないとはいえない。主要な職務として扱われていないのである。ここで改めて内閣府に指摘しておきたい。「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なものとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。

内閣府内に「高齢社会対策」を担当する太い動線を形成して、高齢社会対策庁レベルのしごとを進める時期にある。にもかかわらず、みんなで「霞が関の赤信号」をわたってしまった国会議員はそれに気づこうとしない。

ここは三〇〇〇万高齢者が声を合わせて衆口一詞、「専任の高齢社会対策大臣と強力な部局を！」と叫ぶ必要がある。「日本型高齢社会」への烽火である。

高齢化先行国として「日本高齢社会」の形成は、一九九九年にスタートが切れたのだが、まことに残念なことにそうはならなかった。

そのことを責め立てても仕方がない。

一〇年余の準備のあと、「日本型高齢社会」形成の事業は、高齢化率二五％・四人にひとり、三〇〇〇万人となるのを待つて本格化する。戦後ツ子の高齢化という特殊事情もある。いまからなら成功モデル例をつくることは可能である。このまま何もしないで過ごせば国際的な失敗例となる。そんなことはあってはならない。

お仕着せの「ユニバーサル・デザイン」

*「長寿時代」の事業を阻害する善意の思考

「高齢社会対策大綱」は、新世紀を迎えた二〇〇一年一月に、小泉内閣が閣議決定で見直しをして以来、「ユニバーサル・デザイン型」の考え方を基本姿勢にして、「健康現役社会」を提唱し、「エイジフリーの勤労環境」や「七〇歳まで働ける企業」の推進などに努めてきた(『高齢社会白書』から)。

その善意の努力を否定することではなく、注意しておきたいのは、それが現状を引き伸ばした「ゴムひも型高齢期人生」(エイジング)に高年者を押しとどめることになってしまっている点にある。

それゆえに二〇一三年四月に「改正高年齢者雇用安定法」が実施されても、企業からの実態をもった内発的な定年延長にならなかったと言ひ換えることもできる。こ

れではこの国の企業は弱体化し衰弱する。国の姿は整っても支える企業が萎えては何のための政策か。

本稿はそういう意味合いで「ユニバーサル・デザイン」の政策全体への傘かけには異議を唱える。

力のある高齢者が独自に新たな事業に挑戦できるように、「長寿時代」を達成する強い新事業を開拓しようとする人びとの想像力や気力を呼びさますような政策によって、企業の内発的な潜在力の發揮を要請すべきときなのである。一企業の成果は微弱でも、いずれは「高齢化商品経済圏」が現出できるからである。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国のありようをつぶさに観察してきた本稿は、「団塊の世代」の定年のあと、高齢者の老後が穏やかな姿にならなくなることを予測してきた。みんなが善意の「お仕着せユニバーサル・デザイン」に従うとしよう。するとここで課題としている「存在感のある日本高齢社会」の創出を担う主体者が見当たらなくなってしまうのである。

「日本型高齢社会」は、この国で暮らす高齢者ひとりひとりによる意識的自発的な活動なしには成り立たない。

その総体的な姿を推察するのはむずかしいが、この国にどのような変化をもたらすか。それは行く先明るい展望でなければ意味がない。

一〇年ほど先の二〇二〇年（東京オリンピック開催年）には昭和二〇年・一九四五生まれの人びとが七五歳に達する。そのころまでの内輪な推測としてだが、高齢者の意識的な社会活動によって、次のようなことが可能になるだろう。

- ・一過性の「アベノミクス」効果を終えて収束にむかう日本経済を破たんから救済するであろう。
- ・「超一〇〇兆円」の財政赤字の解消、つまりプライマリーバランスは、「高齢化社会経済」の推進によって大幅な縮小ができるであろう。
- ・「超一四〇〇兆円」といわれる家計黒字は高齢社会形成のための投資に向かうであろう。

・「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。

・「少子化」に歯止めをかけ、子育てで繁忙な女性の就業支援ができるであろう。

・「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」というような風紀の乱れを防止できるであろう。

・「高齢弱者」の暮らしの不安を払拭できてくれれば安心して暮らせる長寿社会をもたらすであろう。

・世界がモデル事例とする「日本型高齢社会」を達成しているであろう。

・各地に数多くの国際機関が集まり、常態として各種の国際会議が行なわれ、世界の人びとが、「一生に一度は訪れたい国」としてやってくる。

のちの歴史書は誇らかに、二二世紀初頭の日本を、アジアの近代化（モノの豊かさの共有）に貢献し、「平和憲法」を護持し、平和の証としての「高齢社会」を世界に先駆けて実現し、温かな互助、共助、公助のしくみを持

つ地域社会を達成した民主主義国家として記すであろう。国際的にも注目され納得されるような「日本型高齢社会」の形成は、高齢者とすべての世代の参加によって達成され、後を追って高齢化を迎える途上国にとって、「先進高齢化国日本型モデル」となるべきものである。

「敬老の日」「老人の日」「老人週間」

*成熟の秋に「長寿社会運動シーズン」

きょうはなんの祝日だったっけ。二〇〇三年からは九月一五日であった「敬老の日」は、九月第二月曜日に変更されてから実感に乏しい祝日となった。

二〇一三年の全国紙三紙を開いてみても、総務省発表の高齢者人口推計値の記事、高齢者六五歳以上が「四人に一人」にがあるていど。国民の祝日「敬老の日」という存在感を表現していない。本塁打新記録の「バレンティン・デー」なのである。

「敬老の日」には次のような経緯がある。

「国民こそぞって祝い、感謝し、又は記念する日」を定めた「国民の祝日に関する法律」（昭和二十三年七月二〇日、最終改正は平成一七年五月二〇日）の二条「敬老の日 九月の第三月曜日 多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う。」による。

はじめは昭和二十二年（一九四七年）。兵庫県多可郡野間谷村（現多可町）で行われた敬老行事「としよりの日」がきっかけとなり、「老人を敬い慰め、励ますとともに、老人福祉に対する国民的理解を促進し、老人自身もまたその立場を自覚し、新しい社会建設に参加することをうたつてさまざまな活動が推進された。

その「としよりの日」は昭和三九年（一九六四年）に「老人の日」と改称され、昭和四十一年（一九六六年）に国民の祝日「敬老の日」へと発展した。

そして、平成一三年（二〇〇二年）の老人福祉法の改正により、九月一五日が「老人の日」、同月二一日までの

一週間が「老人週間」と定められた。その後、「国民の祝日に関する法律」の改正により、平成一五年（二〇〇三年）からは「敬老の日」が九月の第三月曜日に替わった。（全国老人クラブ連合会の資料から）

いまある社会をこしらえた功労者として、「高齢者」がねぎらわれ、「高齢弱者」がいたわられる。現役世代が率直に善意を表現できる「敬老の日」があることは、どれもが納得していることである。

前年度プラスの予算を確保して、熱心に「社会保障」をすすめてきたのは、だれがみても良い政策である。しかし、官製の「敬老」には納まらない多数の高齢者から「敬老の日」は次第に遠くなってしまったのではないか。年々増えつづける「高齢弱者」の医療・介護で手いっぱい、高齢社会のしくみなど、そこから先への発想の広がり可能性を殺いできた。

「いい時代に、いい人たちと出会った」といったのは、脇役の名優笠智衆さんの残したことばだが、そう率直に

言って、終生を脇役として地味に生きてきたお互いを賛嘆しあう日があつていい。

後進の者を安心させ、激励を与え、将来の目標になるような健やかな高齢者のさまざまな分野での表現となる「敬老の日」があつてもいい。

現行の爽やかな秋口の「敬老の日」は公的にでなければできない高齢者への施策を中心にした日として祝日とし、「老人の日」（九月一五日）「老人週間」（一五日～二二日）をはじめ、さまざまな高齢社会推進の活動が秋季に設けられている。

春の成長の季節には子どもたちの、秋の成熟の季節には高齢者の行事がすでにさまざまおこなわれているが、各地・各分野で技能や芸能を磨きあげ経験を積みあげてきた人びとを、企業や民間団体が顕彰したり紹介したり、代々に引き継がれてきた伝統芸能や技術、ライフワークを追求し探究している人びとの成果を上演する。こうして「日本長寿社会」は年々世代を越えて受け継がれ展開

されていくことが納得されるような秋の運動シーズンがあつていいのではないか。

一〇月一日の「国際高齢者の日」は、とくに国際的な行事の日として、「国際高齢者交流会議」といった海外から高齢者・団体と交流する行事の開催にあてる。そうすることで「高齢化先進国」であるわが国の活動が、国内ばかりか国際的にも関心を呼ぶことになる。

高齢社会への内外の関心を高める「秋の高齢社会運動シーズン」設定の準備が、高連協（高齢社会NGO連携協議会）を中心にしてすすんでいる。個別の活動をつないで秋に年間（シーズン）を設けて、国民運動として展開し、それぞれの活動の存在感を高めようというもの。

春ののどかな一日、「子どもの日」や「母の日」と同じように、高齢者が高齢期の人生をどう切り開いているかを、年々その日に確認する「高齢者の日」があつていい。

四月二九日が二〇〇七年からは「みどりの日」を改めて「昭和の日」にかわった。丸ごと高齢者のための日と

はいかないだろうが、「昭和の日」もまた「昭和の人びと」の活動を顕彰するための日とすれば、高齢者が一役とめることになる。家庭で、屋外で、津々浦々で、知識と技能と経験の豊かな「昭和丈人層」のみなさんが、他世代とともに元気な姿を示しえたら愉快ではないか。

そして五月五日の「こどもの日」までを視野にいれて、世代をつなぐ活動の成果を公表すれば、活動の厚みを増すことになるだろう。さまざまな「J（ジュニア）＋S（シニア）会議」や「三世代（JMS）会議」が、五月五日までの間に開かれることになる。

たとえば日本の誇る「国際人シニア」である小沢征爾さんが主宰している「ジュニアのための音楽塾」のような、熟達者と新進の若者が芸術の高いレベルの成果に挑戦するような世代をつなぐ活動は示唆的である。

また「憲法記念日」（五月三日）での大江健三郎さんのような作家と子どもたちとの定点対話は、「憲法」や「平和」をテーマに、表現力によって深く伝え、想像力によ

って理解を堅固にすることの大切さを知る出会いとなるだろう。春の「ゴールデン・ウィーク」に先がけて、高齢者の存在感を示す一日が「昭和の日」である。

四 ひとりの「国際人」として

「平均寿命世界一」・「国別健康寿命世界一」

* 国際的に注目される「日本高齢社会」

新世紀を前にして、世界保健機構（WHO）が「国別健康寿命」を初めて発表した（二〇〇〇年六月）。「平均寿命」が年齢ごとの死亡率から計算されるのに対して、「健康寿命」は平均してどの年齢まで健康で暮らしているかを示すもの。

その計算式によると、一九一調査国のうち、日本は「平均寿命」では八〇・九歳で「平均寿命世界一」だったが、それより六・四年短いものの七四・五歳（男七一・九歳、

女七七・二歳)で「国別健康寿命世界一」だった。

ちなみに二位はオーストラリアで七三・二歳、三位はフランスで七三・一歳。それに対してインドは五三・二歳、アフリカ諸国の中にはなお三〇歳台というところもみられる。そのこともあって、六五歳が長く平均寿命の基準され、て、わが国の実情とずれを生じてきた。

国際的に高齢化が進むにつれて、長寿世界一の「日本シニア」が注目され、「一生に一度はいつてみたい国ニッポン」が国際的に定着することになる。

国民性としての「ホスピタリティー」

*自然にあふれ出る「おもてなしの心」

二〇二〇年のオリンピック東京招致が決まったが、二〇〇二年六月の日韓共催のサッカー「ワールドカップ」の折りの国際的な熱気はなつかしい。

ホスト国として、参加各国チームの選手たちを迎え入

れ、みごとな「ホスピタリティー」(おもてなしの心)を發揮した二八市町村。日本各地の人びとには、世界中から訪れた人びとに競技場の内外で示したように、おのずから溢れ出る親和の感性によって、国際交流を友好的にすすめることができる潜在力があることを、世界に証明したのだった。

「アリガト」は世界語になる勢이었다し、街の清潔なこと、花の多いこと、礼儀ただしこと、どこにも温泉があること、列車が時刻通りに動いていること、スシが「トテモ、オイシイ」など、物価高を除けばホスピタリティーは十分に実証されたのだった。子どもたち、女性、高齢者が、それぞれにみせた国際交流での「お国ぶり讃歌」であった。

市町村レベルでの国際的な友好活動の可能性が、それぞれ甲乙つけがたく納得された。アフリカのカメルーン・チームを迎えた大分県の中津江村と、ことし引退した人気NO1だった「ベツカム様」がいるイングラント・

チームを迎えた兵庫県津名町が話題にはなったが。

おのずから表れる「ホスピタリティー」(おもてなしの心)はどこから生じるのか。

長く孤立した島国であったことで、地域に潜んでいる国際交流への期待感には、計り知れないものがあるように思われる。これこそが今、地域の資産として生かされるべき地域パワーなのではないか。「地域から地域へ」のつながり、とくに海外の地域とのヒトとモノの交流には、労苦をはるかに越えた成果が穏和な経過のうちに実現される可能性が見えている。

「アベノミクス効果」による円安で、海外からの旅行者が増えている。とくにアジアからのお客が多い。

日本企業は海外進出で、アジアの民衆の暮らしの近代化、豊かさに貢献している。アジアの人びとが「暮らしの先進国化」を成し遂げたわが国に来てくれることで、「平和の国」の評価がアジアの平和と交流につながるのとがいつそううれいではないか。

わが国の地域の「ホスピタリティー」(おもてなしの心)を支えているのは、四季の移ろいをじょうずに受け入れながら温かな感性を大切に暮らしている人びと、だれに対しても等しく親切な高齢者のみなさんである。

その心の深い層に培われている繊細さや優しさは、四季折り折りに変化する風物との出会いがもたらしてくれた自然の恩恵(天恵)といえるものに違いない。何度となく繰り返される季節との出会い・・・。

・春は桜前線(三月～五月)が北上し、秋には紅葉前線(一〇月～十二月)が南下する。

・南からは春一番が吹き荒れ、北からは木枯らしが吹き抜ける。

・八十八夜の晩霜を気にかけて、二百十日の無風を祈る。
・南の海に大漁を伝えていわし雲が湧き、北の海にぶり起こしの雷鳴が轟く・・・。

わが国の自然は、みごとに四季の変化に調和がとれている。それはまた海の幸・野の幸・山の幸を豊富にもた

らしてくれる。「平分秋色」、秋には収穫を等しく分け合
い、奪うよりは譲り合い、見捨てるよりは助け合う、と
いった「国民性としての和の心」（温和、穏和、調和、親
和、平和、協和、総和・まだある）が、自然のうちに
育まれている。と、これは海外の日本研究者が等しく指
摘するところ。

だれかれの分け隔てなく萎えた心を励まし、痛んだ身
を癒してくれる風物とくに温泉や特産物に事欠かない。
それとともに、各地には先人が貯えてくれた歴史・伝統
遺産も多く残されている。

ことしは富士山が世界文化遺産に登録された。自然遺
産ではなく、文化遺産であることに納得がいく。また「和
食」が世界無形文化遺産に登録された。「和食」は、さま
ざまな知識や技術が人から人へと受け継がれ磨きあげら
れて、「地場産業」や「お国ぶり」として暮らしを豊かに
してきたのである。それにオリンピック招致。

だれかれの分け隔てなく等しく親切な高齢者。「日本高

齢社会」は高い国際評価を受けるであろうし。年長者へ
の敬愛の情は、他国からも与えられるだろう。

自治体が産み出す「国際貢献」

* 訪日リピーターに「国土を四倍に見せる法」

いま自分が住む自治体が、海外にふさわしい相手を見
出して、住民同士が親しく行き来し、異質な文化交流や
特産品の共同製作を競う姿を思い描いてみよう。

各地の小村、小都市が国際協和に努めることで、海外
の小村、小都市から信頼される姿が見えてくる。

わが国の高齢者が持つ「モノづくり」の能力と「親和」
の心情は、「シニア海外ボランティア」のみなさんや海外
進出企業の高齢社員の実績が示すように、途上国の人び
とにとっては発展の原動力となるものだ。

常に開かれた不凍港のように頼りがいがある存在として
のわが国の小村、小都市。海外との交流は将来かならず

双方の個性や豊かさを生み出す源泉ともなる。

いま「姉妹・友好自治体」は約一五〇〇ほどだが、合併企業や物産の共同開発といった経済活動や個別分野のさまざまな文化交流が進めば、数も内容的にもおおいに広がる事が予測される。

とくに長い民間交流の歴史をもつ日本と中国の場合には、国家間の不和・齟齬の時期を乗り越えて、すでに三〇〇余の「友好都市」があり、信頼をつなぎ、友好の成果をもたらしてきた。太い交流のパイプになっている。

戦後これまでに研修生として訪れた中国の多くの若者が、いまや各地の都市で第一線で活躍している。

いくつか例をあげれば、首都の東京（各区も）と北京（各区も）、近代港湾都市の大阪・横浜と上海、歴史文物の京都・奈良と西安をはじめ、勝沼とトルファン（ぶどう）や須賀川と洛陽（牡丹）、富士と嘉興（紙）といった特産物、そして魯迅のふるさと紹興と藤野巖九郎の生地あわら、亡命期の郭沫若にちなむ市川と楽山、中国国歌

の作曲者聶耳の終焉の地である藤沢と昆明といった人物を介した絆による交流まで幅広い関係を持つ。

そしてそれを地道に支えているのは、長い日中交流の歴史を思い、大戦時の不幸な記憶を忘れずに信頼を積み上げてきた高齢世代のみなさんである。

また「国際交流課」が設けられている県、市、大学は少なくない。K市の市役所にも「国際交流課」が設けられていて、現地のことばに堪能な職員「国際交流員」が常駐して対応している。市に滞在している外国人滞在者には、各分野の研修者や留学生や企業人などがいて、さまざまな国際交流圏をつくって暮らしている。深夜にもインターネットを通じて現地とつないでいる。多くはながい結婚して定住している人びともいる。なんとも活き活きした国際交流の情景ではないか。

海外の姉妹・友好都市から友好・参観にやってきた人びとは、まず県都で交流の時をすごし、地方を代表する文化に接する。それから市町村にはいる。

海外からの客人たちは、それぞれの「友好市町村」を訪れて、目的である文化やスポーツや物産に関する交流の時を過ごす。各地にある温泉施設に案内されて、日本式のもてなしを受けることになる。これが楽しい。

市町村が設けるのは、四季折り折りの美しい風物や料理や温泉を活かした「地域の国際交流施設」である。海外からの訪問者は、「一生に一度は行ってみたい」と心躍らせてはるばるやってくる。

「人生っていいな。日本ってすばらしいな。別の季節にまた来たいな」と、野天風呂につかって暮れなすむ異郷の空の星を眺めながら、母国語でつぶやいてくれる。

そして「和食」のおもてなし。宿のおかみさんをはじめ、地元の高齢者のみなさんがだれをも等しく親しく迎える姿は、海外から訪れた一人ひとりの友人の心に、母国の暮れなすむ星空を見上げるたびに、「アリガト」とともに一生のあいだ輝きつづけていることだろう。

これはとくに重要な視点であるが、迎える側のみならず

んが、四季を「四つの変化」として際立たせることによって、遠来の客人たちは春・夏・秋・冬（新年）の四回は訪れる楽しみを持つことになる。いうなれば、四季を時節の刻みとして活かす高齢世代の人びと（地域四季丈人）の暮らしの知恵が、ここでは「優れた小国」の知恵として「国土を四倍に見せる法」となるのである。

そして何より喜ばしいことは、海外の市町村との地道で実質的な交流活動が、わが国が「恒久平和をめざしている優れた文化大国」であることを、海外各地からの発信によって明らかにしてくれることである。

「文化大国」なら大国意識を競っても誇ってもいい。

一九九九年「国際高齢者年」がスタート

*「高齢者のための五原則」が共通の意識

新世紀に迎える地球規模での潮流として「高齢化社会」を予測し、国連が一九九九年を「国際高齢者年」

(International Year of Older Persons)と定め、そのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは一九九二年のことだった。

前世紀末近くにそんなことがあったことを知っている高齢者がどれほどいるだろうか。

国連の善意の提唱者が、テーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びと（エイジレス）の賛同と参加を期待したためであったろう。活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎えるわれわれであり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」が台風の目となる立場にある。

一九九〇年代から新世紀にかけてのそういう明確で強烈なメッセージが、警鐘にも似た強い風圧としてしっかりと受け止められていたならば、この国で高齢期を迎えている人びとの「この一〇年」の取り組み方もその結果も大いに異なっていただろう。

各国とくに先進国から新世紀を迎えることになる「高齢化社会」にむかってスムーズに移行できるよう、国連から次々に取り組みが提案され、世紀末の一九九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

一九九〇年の総会で、毎年の一〇月一日を「国際高齢者デー」(International Day for the Elderly)と定めたと、運動の展開への願いを込めて、

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。

一九九九年の「国際高齢者年」には、わが国も総務庁

を中心 to 各自治体、民間団体も参加して全国的な活動を展開した。参加した記憶をもつ人も少なくないはずである。現在の高連協（高齡社会NGO連携協議会）が結成されたのもこの時である。それに先立つ一九九五年には「高齡社会対策基本法」が制定されている。

だれであろう、毎年一〇月一日の「国際高齡者デー」に、他国に先んじて活動を展開し、実質的な成果を積み上げるのは、この国の高齡者の役割だったのである。

一九九九年の「国際高齡者年」をきっかけとして、新世紀へむかって「日本型高齡社会」への構想が提案され、高齡化対応の具体的な取り組みが新世紀にはいつて次々になされてきたなら、高齡者意識もまた広く醸成されていたことだろう。

自治体によっては、すでに九〇年代に、たとえば東大和市、春日市、枚方市、新居浜市、柳川市など先駆的に「高齡者（高齡社会）憲章」を定めたところもあったのだった。「長生きは命の芸術品」ではじまるのは、「南国

市高齡者憲章」である。が、全国的な活動にまでは進まなかった。これは明らかに構想力を示せなかった政治側の責任である。団体でも個人でも国連の「高齡者原則」の五つのうち、ひとつでも意識して活動することが「高齡化国際人」なのである。

わが国の場合は、「自立・参加・ケア・自己実現・尊厳」の国連五原則のうち、わずかに「ケア」だけは実体をもつて推進されてきたといえる。内閣府の組織は「国際高齡者年」の記念行事が終わったあと縮小してしまったが、高連協の中核を支えてきた福祉関係の団体はその後一貫して活動を継続してきたからだ。

九〇年代から新世紀を通じてのこの一〇年余、高齡者みんなが「わたしの高齡期」を意識して、みずからの暮らしを充足させる家庭や地域生活圏の「モノや居場所」をこしらえるために活動して、「優れた高齡化用品」や設備や施設を実現させていたならば、企業や組織もまた「高齡化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。

そして新世紀を迎えて、国民運動として着実に推進されてきたなら、わが国の高齢者自身がしわ寄せを受けて苦難を強いられることにはならなかったのである。

全国で催された「国際高齢者年記念事業」

*注目される高連協の「高齢者宣言」

一九九九年、この国の「国際高齢者年」の記念事業は、総務庁（当時）のもとで、民間の福祉団体の活動者を中心にこなわれ、国も自治体も努力はしたが、肝心の一般高齢者がわがこととして理解しなかったのである。

記念行事は総務庁を主催者として取り組まれ、各省庁をはじめ、都道府県（二八九事業）、市町村（六九五事業）が展開された。

一〇月一日「国際高齢者デー」の「国際高齢者年フェア・IN・TOKYO」（記念式典）では、四月に就任したばかりの石原慎太郎都知事も主催者のひとりとして、

「どうか皆さん、これからますますお元気で、この国を持ち直し、結果として周囲からも尊敬される日本の社会をつくり直していくよう、お互いに頑張りましょう」と挨拶していたのである。八一歳になった石原さんと

村山（富市）、野中（広務）氏などの「ベテラン議員の会」のなすべき第一は、「日本高齢社会」の推進である。

高齢者年NGO連絡協議会（現在・高齢社会NGO連携協議会⇨高連協）による「高齢者憲章」が、一九九九年九月に発表されている。この憲章の内容はいまなお課題のありかたを伝えて新しい。あまり知られていないが、兵庫県の高齢者大学校「いなみ野学園」も一月に「いなみ野宣言」を残している。

その後、まことに残念なことだが、本来の主役である一般の高齢者不在のまま過ぎていった。

二〇〇九年は「国際高齢者年」の一〇周年に当たったが、際立った活動は見られずに終わった。国連の藩基文事務総長のメッセージが虚しく響くほどだった。

この間、国際的な活動としては二〇年ぶり二〇〇二年にマドリッドで「第二回高齢化に関する世界会議」（第一回は八二年にウイーンで）が開かれている。

「高齢化に関する国際行動計画2002」を採択し、世界の多くの地域で平均余命が伸びたことを人類の大きな成果とし、世界的に前例のない人口転換が生じていること、二〇五〇年までに六〇歳以上の人口が約二〇億人に増加し、人口比率では二二％に倍増する見通しであり、すべての国に対して、「高齢者が潜在力を発揮して生活のあらゆる側面に参加する」ことができるような機会の拡大を要請した。

「日本高齢社会」が国際平和の証

*二一世紀初頭になすべきわが国の国際貢献

二一世紀の国際社会が、なお平和裏に推移するかどうかはわからない。国連は、新世紀が「平和と非暴力」に

むかうことを願って、「文明間の対話」を課題とし、二〇〇一年を「文明間の対話年」としたのであった。

ところがそれに逆らうように、ニューヨークの「九・一一テロ事件」、そして二〇〇二年三月の「イラク戦争」を引き起こし、報復テロの恐怖が世界を覆うことになってしまっている。アメリカ国民は、史上初めて身近に戦争の恐怖を実感したことになる。

そんな中で、日本は「人道支援」という名目で自衛隊を海外の戦場へ送り出した。それでも一兵も失うことなく、現地の人びとに受け入れられて作業を遂行できたのは、「平和憲法をもつ国からの自衛隊」だったからであり、イラクはもちろん国際的にもそう評価されていることの実証例となったのである。

そして「平和日本」の評価は、なによりも戦争と戦禍を体験した国民の一貫した平和への強い意志を置いているかにかいない。そしてその向こうには、戦場となったアジアの隣国とそこに暮らしている人びとの戦乱と戦後の経緯

があることを忘れてはならない。

いまグローバル化という時流に乗って近代化をすすめるアジア途上国の人びとが、日本のようなモノと日本人のような豊かな暮らしを望んできていま実現している。

その姿をみると、戦後の復興に身を挺して粒粒辛苦してくれた先人の姿に重ねて、アジアの将来のために平和を守りぬく覚悟を固めるときなのである。

歴史から学ぶなら周辺国のようすを知ることだろう。

昭和のはじめには、中国もソビエトも革命期にあり、アメリカは太平洋国家ではなかった。その隙間を縫って日本帝国は極東で動いた。いまや中国・ロシアとも自立した大国であり、アメリカ軍は日本国内に基地をおく。こんな三大国に囲まれて、国粹主義、軍国主義、軍需産業化はなりたない。

ここは国際主義である。戦後の目標だった「東洋のイス」のような国際機関を置き、常時に国際会議が開かれ、世界から観光客が訪れる国（やおよぼすの神々のご

加護によって平和裏に）。そして新海洋国家。

ひとりの人間にとつても、人類にとつても最重要である多重性は「戦争」と「平和」であり、国も国民も「平和への心火」を現実^ニに灯もしつつけることである。

先の大戦から半世紀余り、この国の戦争の悲惨を知っている人びとの髪は大方は白くなった。そして日本はその間「干戈を見ず」に過ごしてきた。二〇世紀の「戦争の惨禍」を先人が引き受けてくれたことで得た平和の期間。それをどこまで引き継げるかは残された者たちの「平和への心火」の継承にかかわる。

その平和期を実感しながら、老若男女がそれぞれに自分たちの手でつくりあげた生活環境で憩い、衣食住にもほぼ満ち足りている姿がある。「世界一の長寿国」として、長寿者が周囲のみんなに敬愛されている姿こそ、なにより世界に誇つていい「平和の証」なのである。

その理念として「日本国憲法」（とくに九条）を掲げつつけるとともに、「日本高齢社会」を達成することが、新

世紀初頭の国際社会でなすべき日本の貢献なのであり、誇るべき国民運動といえるのである。

「平和憲法施行一〇〇年記念」を祝う

* 不戦不争の明かりを伝えて

「恒久平和」を掲げた「日本国憲法」は、原子爆弾という人類をも破滅させる可能性をもつ武器が登場した先の大戦で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記念碑）であり、とくにその九条は先人の心火によって燃えつづけている遺言の灯ともいえるべきものである。半世紀を越え、新世紀を迎えたいま、その経緯を確認し、党派性を排して「衆議」して引き継ぐべき貴重な歴史文化遺産である。したがって二〇四五年、制定一〇〇年までは「そのまま残すべきもの」である。

国際紛争は絶えることなくつづき、世界の軍事技術は仮想敵国を想定しながら自己増殖をつづける。それは朝

鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争で、その恐るべき一端をみせつけた。局地戦は絶え間なくつづいている。

そんな悪夢を押し止めるのが、大戦後に平和を託されて生まれたベビーブーマーである一〇〇〇万人の「平和団塊の世代」のみなさんであり、体現する「日本高齢社会」なのである。それがそのまま歴史的な「世界平和へのメッセージ」となることに希望がある。

想像力の深度も構想力の精度も足りない現代の若手政治家は、先の大戦によって被害者となり加害者となるに至った戦争の惨禍への経緯を繰り返さないために掲げた「日本国憲法」を改変する能力も立場もないことを知らねばなるまい。

わが国の先人がどういうプロセスを踏んできたかの論議を尽くすにはいい機会だが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとすれば、必ず過ちをおかすことになる。

憲法は今ある人びとのためのものではあるが、今ある

人びとのものではない。

「自主憲法」と称して根幹を傷つけるとすれば、先人も後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。いま確認すべきことは、憲法の条文の文言の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつづけている「先人の心火」を感得し、灯を引き継ぐことである。その地点から戦争の惨禍を想起する想像力を培うことである。

若手の政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするために努めて、三四年ののちに迎える「平和憲法施行一〇〇年記念」を国際平和のもとで祝えるように保ちつづけることである。国会での議論がどのようになるうとも、最後に国民投票での決定権をもつ日本国民として、「歴史に学んだ」国民として、冷静に判断をくだすことになる。

国際的に先行してたどる「日本高齢社会」形成への歩みを、「世界平和へのメッセージ」として対置すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりの高齢者の日また一

日の生命の灯を、戦争への兆しがあるかぎり、歴史を貫いて流れる「不戦不争の叡智」に託して「戦争放棄・恒久平和」の明かりとして灯しつづけること。

「日本国憲法」が放っている不戦不争の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀あまりを積んで得た国際的な評価を閉ざし、歴史的な輝きを失うことになる。耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、選ぶべき道はおのずと明瞭なことである。

「寿終正寝」（天寿）を全うする

「国から地域」へが平和主義の国際性

自国民が穏やかに生き、天年（天寿）を全うできる「寿終正寝」を願わない国などありえない。

国際的にお互いに「高齢社会」の姿を競うことが、二一世紀が「平和の世紀」であることの証となる。だから

世界の高齢者が先行するわが国に期待するものは、紛争地に支援に向かう部隊よりも、「恒久平和」を掲げた憲法の下で自国民がおだやかな人生を享受する「日本型高齢社会」の実現であり、その形成へいたる仔細なプロセスである。

古来わが国は「君子の国」として、「譲るを好みて争わず」と伝えられてきた。とはいえ「自衛の力」は、独立国であるかぎり、他に脅威を与えず、他から脅威を受けない可能な範囲で、他に劣らない質の武力を自ら保持し常備しないわけにはいかない。

とくに抑止力になる平和利用の科学技術の保持もそうである。「人工衛星」や「原子力発電」（安全を確認した一部）といった平和利用がそれである。全面廃棄は理想だが、いまはプロセスでの国際合意が必要である。

常日ごろの訓練によって養った他のいかなる国にも依存しない自衛のための「不戦の武力」と、常日ごろの鍛錬によって培った相手を説得しうる外交のための「能戦

の文化力」と、それを支える安定した「経済力」とは、常に整え備えるべき三位一体の「国防力」なのである。

個人としては、歴史にまれな平和の時代に、「日本型高齢社会」を構成するひとりとして加わり、みずからが充足して長く生きて天年（天寿）を全うすることが、そのまま国際的な信頼を引き継ぐ「平和へのメッセージ」となることを確信することである。

そして生涯の最後までお互いを支えあうことが主体者としての高齢者の証ともなる。かくして「寿終正寝」（天寿）を全うする。

外交的に孤立してまでも「国防軍」を保持するために「憲法改正」をし、世論がそれを支持するとなれば、日本は「歴史に学ばない国」という批判がいつそう強まることになる。これらの動きは被災各国にとっては、かつたどった過去を想起させるものとなる。

一四年にわたった先の戦争は、軍の独断専行ではじまり、世論を味方につけて強行し、国際的に孤立し、つい

に振り子は極限まで振れて敗戦によって終わった。だから戦禍と敗戦によって得たいまの「平和」は、みずから手でかちとつたものではない。

外交努力と国民の冷静な世論によって国際的孤立を避け、国防軍依存とそれを無批判に進める激した世論の醸成を阻止し、議論をつくして「平和憲法」を守りきつてはじめて、日本は「歴史に学んだ国」として「平和をつくる民主主義」をみずからの手にすることになる。

いま「歴史に学んで歴史をつくる」政策は、「国から地域へ」である。「特性を活かした地域の発展」への国民運動が、国防軍によらずに国を護る意識を醸成し、平和の礎と民主主義を強くすることになる。国から地方へむかう国防意識の醸成、これを推進するならどこの国からも批判を受けることはない。「国」から「地域」への国民運動がわが国の「平和主義」を伝える国際性を持つ。

戦後六八年、現役世代の人びとは先の戦争をまったく知らない。戦禍の体験がないから再び戦争に直結する小

さな芽を危険と感しないでいる。

高齢者は戦争体験をしているところに特徴がある。どんな辛い目に遭ったかを体験者の生の事実として伝えると同時に、憲法を議論するにあたっては、平和の側からの論理を構築して、若い国民を説き、平和憲法の基盤を強めることも大切になる。

戦争の悲惨さを繰り返さない立場から制定された「平和憲法」（とくに九条）は国際平和の旗じるしであり、実態として平和の証となるのが「高齢社会」である。

高齢者であること、高齢者になることが誇りであり、後人を思い後人に敬愛されて安心して暮らせる「高齢社会」の達成が、二一世紀初頭の国際的潮流となっており、先行するわが国の高齢者は、「平和憲法」のもとでの「平和の証」の体現者であることを意識して、高齢期の日また一日を生きることになる。

一人ひとりの人生それ自身が「平和国家」保持という歴史的使命を負っているといえるのである。

第八章 「人生九〇年時代」をこう生きる

一 成長期・成熟期・結実期それぞれの生き方

人生は「二五年三期のステージ」

* 歴史をつくる体現者として*

「青少年期」(〇歳～二四歳)は「第一ステージ」で、成長期。青少年の暮らしのためには、育児・保育施設、学校、その他の教育施設、遊園地ほか、さまざまな「青少年のためのステージ」が用意され、次世代を育成するために文科省を中心に仔細な政策がほどこされ、内閣府には「少子化特任大臣」が置かれている。

人生の第一ステージである「青少年期」をみてみよう。

近ごろは結婚後一〇カ月目の「ハネムーンベビー」よりも、結婚前の「できちゃったベビー」が多いという世の中だから、生まれて以後の養育についても不確定な要素をもちながら推移することになるだろう。

といっても子どもたちはみな、たいせつに養育され、

学んで自己形成をして、選んで社会参加をすることに変わりがない。複雑な時代ゆえに、青年期にはさまざまな選択のための猶予期間(モラトリアム)として「バトンゾーン(二五歳～二九歳)」を置いて、一般的にはおよそ三〇歳前までが「青少年期」として許容されている。

しかし、本稿は「第一ステージ」の二四歳までにしっかりととした自己意識を確立し国際的な知識を身につけて、職業選択を終えて、若い柔軟な能力を発揮するチャンスを活かす青少年を想定している。国際化した企業が即戦力として必要とする人材(正社員)だからである。中国、インドほかのアジアの途上国の若いリーダーたちと伍して、その先頭に立てるような若き人材が要請されており、それが企業が求める「即戦力正社員」なのである。すべての青少年が即戦力である必要はない。当面は三分の一ほどで対応することになる。

高齢者としては、この孫世代の人びとにどう対処する

か。自己形成期の「人生の第一期」にあつて、遠い「第三期の人生」での自己実現へとつながる「こころざし」（初志）を定めることは、放つておいてできることではない。「人生の第三期」にいる高年者（祖父母世代）として、「高年期のステージ」での存在感のある生き方を示すことによって、遠い先に遭遇する「第三期の人生」に安心感と可能性を与えることになる。

ということは、隠退して何もしないおじいちゃん、優しいばかりのおばあちゃんではなく、「高年期のステージ」づくりに参画しながら未来を見据えて過ごしている姿を示すこと。子育てが両親二人によることを基本にした政策（子ども子育て支援）のため、祖父母の孫育て参加は期待されていないが、「わが家の暮らし方の伝承」のため、三世代同等同居でプライベートを大事にして暮らす「三同同丈人」としてもっと接点をもつてもいい。

ジュニアたちはそういう姿に接することで、高年者（祖父母）に敬愛の思いを持ち、時には記憶違いを直したり

モノ忘れを助けたり、緩慢な動作に付き合ったりしながら、何気ないふるまいやことばづかいの中に、人生の知恵やきらめきを見出して引き継ぐことになる。高齢者を敬愛する立場をわきまえて育つ青少年の存在は、「日本高齢社会」の基盤であることはいうまでもない。

「**中年期**」（**三〇歳～五四歳**）は「第二ステージ」で「成熟期」。急速な国際化に直面している中年世代の人びとのためには、多くの企業、自治体、団体などが総力をあげてその活動を支えるための場を用意している。それが国際化時代の対外的な国力として認識され評価されるからである。いま高齢期にある人びとが中年期に粒粒辛苦し創り出してきたステージが基盤になっている。

急速な国際化に直面して、中年世代の人びとは内外のさまざまな不確実要素を引き受けながら労働参加をし、次世代を生み育て、地域での要請に応じて社会参加もし、ヒマを上手につくって趣味や娯楽にも興じ、「キャリア・アップ」にも心がけ、加えて高齢期にいる父母の介護を

するという「八面六臂」の活躍をして、超多忙な日々を送っている。

とくに女性の変動期にある日本社会を支える「キャリア・ウーマン」として、口八丁手八丁となかなか力量が要るのである。子育て一時退社のための就労のM字型カーブを修正するための「ワーク・ライフ・バランス」は、個人はもちろん自治体も企業も社会的支援をあわせて呼び声は高いのだが、実際の成果となると鈍いようである。その上に高齢の両親のための介護離職も課題になってきた。

他項でも述べたが、この国にとっての三度目の外圧である「グローバル化」によって、中年世代は暮らしを「途上国化」して対応することになっている。

わが国は先の大戦のあと、アジアの他の国に先駆けて「一国先進化」をなしとげた。ひとときではあったが、だれもが等しく中流の豊かさを享受する「九割中流」の生活ができ、将来もできると予想した。

先進国入りをしたと思っていたわが国にとって、「グローバル化」という「暮らしの途上国化」は、歴史の歯車を逆転して、これまでたどってきたある時期まで生活をもどすことになる。わが国の中年世代は「途上国化に耐える暮らし」を強いられているのである。アジアの途上諸国の人びとが、日本と同じ暮らしができることを期待し努力しているのだから、しばらくは耐えるしかない、高齢者は傍らで思うことですむが、中年世代の人びとは、ことのほかきびしい対応を迫られているのである。家庭内の「モノ」の途上国製品化と「職場」の非正規社員化で、のっぴきならない「途上国化」に対応せねばならないからだ。

高年世代としては、若年・中年世代が海外の同世代と伍して能力を發揮できるよう、職場や権限をすみやかにシフトしてリストラ環境を整え、事業を支援すること。その上で、将来アジア諸国の高齢者が求めるような製品・サービスを熟年社員と社友が企画・制作して次の再

リストラ時代に備える必要があるのである。これが「企業のリストラ」の外向きにみた実質なのである。内向きにみて高年社員のリストラ被害者としての発言が目立つが、ここでは高年社員も企業現場の実態は実態として直視せねばならないのである。

五五〜六五歳は「パラレル・ライフ」

* 高齢期のキャリア・アップで多忙なとき

人生の「第三ステージ」が「高年期」（六〇歳〜八四歳）で「成熟期（から結実期）」に当たる。五〇歳代の後半から六五歳までは「パラレル・ライフ」（ふたつの人生）で過ごして、人生真つ盛りの六〇歳代から七〇歳代へと繋ぐことになる。この期間こそまさに「時めきの人生」への準備期である。

「**高齢準備期**」である五〇歳代後半から六〇歳前半はどうかすればいいのか。

現状では企業内の「恣険族」化が常態化してしまつて、残念ながら能力発揮の場所を見出せないままに定年を迎えてしまう人も多い。「パラレル・ライフ（ふたつの人生）」でもいへば多忙な期間なのだが。

この貴重な時期に手痛い停滞期間をつくらないように、五五〜六五歳までの期間を、長い高齢期人生での課題（自己実現）の模索と移行のための期間として、「パラレル・ライフ」（ふたつの人生）を過ごすこと。わが人生の自己実現期への助走期間として、本来はけっこう多忙な時期なのである。

ふたつの生き方を模索するというのは、ひとつはこれまで「労働参加・社会参加」して得てきた知識・技術の延長での生き方、もうひとつはこれから始まる「高齢期の人生」での新たな目標をさぐる生き方をあわせて展開することである。

五五〜六五歳の高年社員として職場でどうするか。
高年齢者としての生活感覚を活かした「製品の高齢化」

を成功させて「しごとと職場の高齢化」に努める。あるいは「職場の高齢化」を成功させて、高齢社員による「製品の高齢化」を模索する。その傍らでキャリアを活かして別な職域への「高齢期職域異動」も考慮する。あるいは友人と小規模起業（ナノコーポ）で自立に挑戦する。

地域ではどうするか。「エイジング・イン・プレイス」、つまり高齢期そして終末期をどこで過ごすかの判断が求められる。いま過ごしている場所にするのか、ふるさとに帰るのか、あるいは別のところにするのか。いずれにせよ「終の棲家」（寿終正寝）をどこにするかが前提になる。そしてその地の青少年や中年世代とともに生活圏の「三世代ステージ化」に努める。それを通じて確めた高齢期の目標への準備をする。地方大学の社会人学科でキャリア・アップしたり、自治体の「地域高齢者（生涯）大学校」で、地域で活かせる「高齢者カリキュラム」を受講したりして、準備することになるだろう。こうした高齢期の人生への準備期間として多忙なはず

なのに、現状では活動の閑散期となっている。あまりにも惜しいではないか。

企業での「自社製品の高齢化」や「職場の高齢化」、そして「地域の高齢化」を課題として、「人生九〇年時代」の目標を模索して過ごしている高年社員に対して、若手・中年社員は刺激を受けるだろう。また地域の若い人たちは、高齢者が保持する高い知識、技術の参加による「まちづくり」への期待を寄せることになるだろう。

六〇・七〇歳代は「時めき人生」

*「自己実現」の成果を得る幸せなとき

思い起こせば、「団塊の世代」（一九四七〜四九年生まれ）と呼ばれる人びとは、「核家族」（一九六七年）や「昭和元祿」（六八年）や「エコノミック・アニマル」（六九年）などが騒がれた時期に成人となり、「大阪万博」（七〇年）を国民的行事として満喫し、「脱サラ・ゴミ戦争」

(七一年)や「列島改造」(七二年)にとまどいながら競争と選択の渦中で「労働参加」をし、さめた目で「企業戦士」のしんがりをつとめてきた。

だから企業人としての到達点である六五歳に達しても、冷静に「高齢期」の自己目標を見出して実現をめざすという方向転換にも柔軟に適応していくことができているのだろう。

会社人間としてはいたしかたなく「窓際族」として耐えることもしてきたし、「パラレル・ライフ(ふたつの人生)」に折り合いをつけた暮らしが身についており、穏和なプロセスでの「高齢社会」形成への道筋は自得するべきものと考えて努めている。

さまざまな場面で「団塊の世代」といわれてきたが、実は個人的には団塊にはならない人びとなのである。企業は団塊社員の高齢期の能力保持を支援しつつ、市場開拓が期待される熟年むけ製品やサービスを、高齢社員の自己実現として期待していいのである。

「地域」ではどうだろうか。

二〇年余の高齢期の暮らしの場「エイジング・イン・プレイス」がいわゆる。「地域」がもつ特性や良さを探しながら、高齢期人生に道筋をつけることになる。「テーマ型コミュニケーション」と「地縁型コミュニケーション」の双方に足がかりをもって、保持する能力を活かして現役として活動をつづける。安定した「地域シニア生活圏」での暮らしを成功させるだろう。いまやおおかたの「団塊の世代」の人びとは「高齢期」への移行を終えようとしている。

世間では六〇歳からの還暦・定年後を「第二の人生」とか「余生」としているが、本稿では「人生九〇年時代」にむけての新たな暮らしの場を形成して、知識や技術や経験や資産を活かした「第三期の現役生活」として認識している。蓄積してきた知識、経験、資産などを滞らせることなく活用し、「六〇歳代(シクスティーズ)時めき人生」として過ごすには引きこもっていられない。

唐の詩人白樂天は、六〇歳になったとき、「五十六十は

悪しからず、恬淡清浄にして心は安然」（耳順吟）と詠っている。「三十四は五欲に動かされて迷う」しまた「七十八十になると百病に纏われて苦しい」からだという。一〇年ほどプラス（古希吟）して「六十七は悪しからず」と読んで味わっていい楽天的詩句である。

「高齡期の成熟人生」は「社会の高齡化」を体現し謳歌する。なのに、ことあるごとに「もう歳だから」とつぶやいてみずから力を削ぎ、老け急ぐのは何としたことか。とくに六〇〜六五歳は、五〇歳代の若手高齡社員と力をあわせて、「成熟社会」を支える「製品の高齡化」や「職場の高齡化」といった「企業内の高齡化」にも参加する。花が実となる時期にあつて力を出さずに終わってなんかられない。

一〇年を超える萎縮（デノミネーション）でこわばってしまった巷の表層を割って入れれば、「アベノミクス」に何の恩恵にもあずからなかった高齡期にある人びとの多くは、「高齡期のステージ」について語る同世代の人の思

いに必ず応じてくれるはずだ。

なぜと云って、あの大战後の復興期の混乱と貧困をともしのいで苦勞してきた者同士なのだから。それぞれが持つ力を惜しみなく限りなく發揮して、目前にある障害をひとつひとつ乗り越えて、「高齡期のステージ」の形成に努めている昭和生まれの高齡者を、ここでは敬愛の心を込めて「昭和丈人」と呼んでいる。

ポルテージ（情意の位相）をやや高めていえば、これから成熟期を迎える職域や地域生活圏のさまざまな場面で、高齡期の人びとが潜在力（丈人力）を發揮することで形成していくのが「日本高齡社会である」というのが、本稿の一〇年余にわたる洞察によって得たゆるぎない結論なのである。

自己目標の達成をめざしている高齡者の暮らしぶりは、その穏かな表情も、奥行きのある発言も、配慮の行き届いた行動も、温かな人柄も、青少年や中年者から羨ましがられるほどに魅力をそなえたものになるだろう。

「古希」を迎えても引き続いて職域・地域での役割を求められている立場にある人も多いだろう。「自己実現」がそのまま職域・地域にかかわるものであるなら「生涯現役」としての道を歩むことになる。すでにこういう「七〇歳代（セブンティーズ）生涯現役」コースをたどっている頼もしい先達を、数多く周囲に見かける。

「七十古希」から「百齡眉寿」へ

*「古希」は人生七合目の里程碑

「人生七十古来稀なり」と詩に詠って、「古希」を流行古語に残したのはだれだかご存じですか。

「古来稀なり」なんていわれてきたが、たどり着いたみなさんは、仲間といっしょにあっさりたどり着いたように感じているに違いない。

唐代に杜甫が詩「曲江」に詠っている。だから一二〇〇年余の経緯をもつことばなのである。古来稀れなのだ

から七〇歳は当時よほど稀れだったのだろう。杜甫自身は旅先で五八歳で没している。杜甫が詠ってたどりつけなかったことから「古稀」がいわれ、七〇歳が長寿の証として納得されてきた。「古希」とも書く。

杜甫は「国破れて山河在り、城春にして草木深し」（杜甫「春望」から）という長安にいて、意にかなわぬ日々を酒びたりで送っていたらしく、「酒債は尋常行く処に有り、人生七十は古来稀なり」（酒の付けは常に行くところあちこちにあるけれど、人生七十歳は希にしかない）と有るものと無いものとを対比している。いまは付けもためずに酒を呑めるし古希にもまれでなくたどり着ける幸せな時代であることを嘯みしめて先へ行こう。

「百齡」は百歳のこと。大正三年（一九一四）生まれの人が百歳である。わが国では百歳以上の人が五万人を超えてなお増えつづけており、いかに史上稀な長寿国であるかが知られる。しかしいままでのところ、四万六〇〇〇人が女性であり、「百寿社会」は女性社会である。

「眉寿」は長寿のこと。老齢になると白い長毛の眉（眉雪）が生えて特徴となる。同じ唐の書家虞世南は「願うこと百齡眉寿」（琵琶賦）と記して百歳を願ったが、八〇歳を天寿として去った。「七十古希」の杜甫は五八歳だったから、長寿への願望は遠くに置いたほうがいい。

「人生七十古来希なり」といわれ七〇歳が長寿の証とされてきたのだから、百歳ははるか遠い願望だったろう。

「丈人」は古語のひとつである。『論語』に詳しい人なら「微子篇」に出てくるからお気づきの人もあるだろう。

「四体勤めず、五穀分かたず、たれをか夫子といわんや」（身体を使つて労働をしないし、五穀を収穫することもしない。そんな人物を先生なんていえないね）といって、

弟子の子路に孔子を批判する場面が記されている。

時代を批判する自分をさらに批判した人物を丁寧にあつかっている孔子にも、老師をおとしめた人物を『論語』の中に残した初期の柔軟な儒者のありようにも留意する必要があるが、ここはその場ではないから深入りはしな

い。「春秋時代」の乱世を、隠者として生きた「四体勤め、五穀分かつ」人物を、「春秋丈人」として認知しておけばいい。杖をもつから「丈人」という説があるが、逆に、丈人がもつから杖なのである。

くだつて唐代には「唐代丈人」がいる。東岳泰山の頂上に、いまもすつくと立つ泰山石の「丈人峰」のいわれを伝える「岳父（妻の父）||丈人」の話はおもむき深い。が、これもその場ではないから多くは触れない。

八〇・九〇歳代は「意のまま人生」

*長命期を「尊厳」とともに生きる

本稿の「長寿時代のライフサイクル」では、第三の二五年期である六〇〜八四歳を過こしたあと、八五歳以降を「長命期」と呼んでいる。ここには五歳層の「米寿期」「卒寿期」「白寿期」そして「百寿期」が控えている。一般的にみて、長命な方々といつていいだろう。

職域・地域でのしごとをつづけて、気がついたらここまでできていたといった生涯現役の方も多い。成果を後人に託しながら「自己実現」の集大成を果たすべくなお研鑽に日を送る健丈さなのである。後人から敬意を受けて過ごす人びとである。

「高年後期（七五歳〜）」からのステージでちよつと注意すべきことは、このあたりから「有訴」がはじまり、医者が増えるということである。傍らに「持病」とのつきあいをはじめる人生の時期。

「からだ」の加齢症候だけは意のままにならない。ものわすれ（認知症の進捗）にも気をくばり、緩慢になつたふるまいにもあわてない。

本稿の別項でも紹介しているが、蟹江ぎんさんの娘さん四人の暮らし方には学ぼう。健康で元気に暮らす秘訣は、「食べる（からだ・健康）」「しゃべる（こころ・知識）」そして「自分でする・歩く（ふるまい・技術）」だという。

人生は自ずからしてなるもの、意のままがよいとする

「無為自化の人生」という老子のことばは、このあたりこのことをいっているものようである。この年齢までたどってきた人にとってはじめて達意のことばとして感得されるものなのだ。

意のままにならないことのあることを知つたうえで「意のまま人生」（無為自化）なのである。人生はかくも奥深い。とても五〇歳以前の時期では感じとれない人間であることの味わいである。それゆえに若い世代とは異なつた「モノ・居場所・しくみ」を必要とする。

「高年後期（七五歳〜）」の人生にかかわることなら、聖路加国際病院名誉院長で、みずからは百寿期に到達された「明治丈人」の日野原重明博士（一九一・明治四四年〜）の独壇場である。日野原さんは、六〇歳から「午後」の人生で、とくに七五歳からの「高年後期」の時期の人びとを、創造的に意欲的に暮らし、自立した生き方を選択し、すぐれた文化を次代に引き継ぐ役を果たせる「新老人（ニュー・エルダー・シチズン）」と呼ぶことを

提唱してきた。予防医学によって健康を管理(ケア)し、リスク(危険因子)を避けながら積極的に生きる「新老人運動」の輪を広げている。「新老人」の活動エネルギーは、本稿がいう「丈人力」と重なる意味合いの表現と理解している。

そしてさらに誇るべきは「超高年(スーパー・シニア期)」ともいえるべき「長命期」(本稿では八五歳)を過ごしておられる人びと。明け方の空にいつまでも輝きつづける「晨星」のような長命期を迎えてすす人びと。

この階層となった「大正生まれ」である方々は、一九四五(昭和二〇)年の敗戦には二〇歳から三四歳で遭遇し、奇跡ともいわれた戦後復興と成長の中核を担って労苦してきた。そして今、一人ぐらしの女性のなかには、戦争で夫を失い、以来、女手で子どもを育て、子どもを頼らずにひとり暮らしに耐えてすごしている人が、少なからずおられるのちがいない。子どものころ母さんが歌って教えてくれた「童謡」を繰り返し口ずさんでいる

にちがいない。熱い思いが湧く。

この「人生の第五ステージ」期にある先達の営為と叡智に学ばなければ、国際的に注目される「日本高齢社会」の頂上(サミット)は成立しない。前人未踏の課題にも臨みつづけてきているのである。

「高年前期」(六〇歳)、「高年後期」(七五歳)そして「長命期」(八五歳)という高年期の三ステージをそれぞれに過ごしている人びとが、家庭・職域・地域で共有し形成している社会構造が「高齢社会」であり、この国独自の経緯をたどりながら総体として存在感を示す姿が「日本型高齢社会」である。

現状の国際標準はなお途上国型の「若年・中年型社会」であるが、このまま平和裏に推移することで世紀中葉には「国際的高齢社会」を迎える。それを見据えて、先進諸国の高齢者とともにひとつ上の世界標準を成し遂げるべく「日本型高齢社会」を創出する。

二〇世紀の奇跡といわれた「昭和時代」を担った人び

とが、二一世紀初頭の奇跡といわれる「日本型高齢社会」をこしらえる。その気力も能力も十分に備えている。

特別に変わったことをするわけではない。家庭で、職域で、地域生活圏で、多様な経歴をもつ同世代の人びとの出会いを通じて、「人生の成熟（から結実）」を実感しながら暮らすこと。愉快に日また一日を送ればそれでいい。

さまざまな分野で、それぞれの地域で、たくさん小さな水玉模様のような暮らしの場を形成して「高齢期」を過ごす。だれもが高齢者であること、高齢者になることに安心できる社会をめざす。

「日本型高齢社会」は、こうして全国の津々浦々に暮らす高齢者のみなさんのたゆまぬ営為によって成立し、世界平和へのメッセージとして国際的な評価を得ることになるだろう。

それは「一生に一度行ってみたい国、日本」の成立を示す証となる。それはまた二〇世紀中葉の戦禍によって

犠牲になった人びとのかなわなかった長寿の実現である。

そこにいたるプロセスは二一世紀の「人類標準」ヒュ

ーマン・スタンダード」ともなりうるものである。

丈人力のススメ

「人生九〇年時代」をこう生きる 総目次

第一章 新時代

一 現役シニアがもつ潜在力を活かす

1 @ 「丈人」とは 2

「大丈夫！」が内に包みもつ核芯

2 @ 「丈人力」とは 4

「自己目標」を実現させる強い生命力

3 @ 「老人力」と「丈人力」 5

「がんばらない」と「がんばる」と

4 @ 歴史をつくる「昭和丈人」層 5

「四人に一人」に達した高齢者が体現

5 @ 「余生」でない「長命現役」人生 7

国際モデルの「百齡社会」をめざす

二 長寿を楽しむ三つの秘訣

1 @ 「長寿時代のライフサイクル」 9

「高齢期」には三つのステージがある

2 @ 「賀寿期五歳層」のステージ 12

同年配の仲間とともに賀寿を迎える

3 @ 「体・志・行」三つのカテゴリー 14

雑事をいとわなことが長寿のもと

第二章 世相

一 「現役人生六五年」をすこし終えて

1 @ 「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」 16

強い荒廃菌が弱い善玉菌を食う

2 @ 「歴史悲劇」再演のプロローグ 17

衣装を替えて三文役者が登場する

3 @ 「若年化・女性化・IT化」が優先 19

時流(グローバル化)と潮流(高齢化)のはざま

4 @ 単純に移譲できない「高齢者資産」 21

「家計黒字」が財政赤字を補てん

二 三人三様の高齢期の暮らしぶりをみる

1 @ 「急流勇退」の引きこもり 24

「いそぎよい隠退」はかつて功いまは罪

2 @ 「陽来福型の高齢者」Dさん 25

「隠退ウーピーズ」(豊かな高齢者層)

3 @ 「先憂後楽型の高齢者」Iさん 27

「ほどほどの赤字人生」が男の美学

4 @ 「戦々兢兢型の高齢者」Yさん 30

「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウン

第三章 家族

一 「MY・・・」がないマイホーム

1 @ 「マイホームパパとママ」の憂鬱 33

アノヒトとかヒカラビてる人といわれて

2 @ 「ヒツペガシ娘 vs ツカエナイ親父」 35

「ツカエナイ親父」とはなんだ

3 @ 「家庭内ホームレス」の気配 36

居場所はファミレス・図書館・パチンコ屋

4 @ 「MY・・・」がないマイホーム 37

わがブランド品はオメガの時計だけ

二 「家庭内リストラ」による存在感

1 @ 「家庭内リストラ」のコア用品 39

「MY・チエア」には即座の効用がある

2 @ 「モノ同士のモノ語り」 41

専用品をつなぐ暮らしの動線

3 @ 「家庭内高齢化」が初めの始まり 43

バランスいい「三世代ステージ化」が目標

三 暮らしの知恵を次世代に伝える

1 @ 「エンプティネスト家族」の孫育て 44

近居よりも同居が未来型

2 @ 「実家依存症」といわれても 46

女系家族の支援で真一文字型就労

3 @ 「三世代同居(三同同)型」住宅 47

わが家三代の暮らしの継承

第四章 モノ・職場

一 「MADE IN JAPAN」の時代

1 @ 「サンパク以後(三八九一五)」は片下がり 50

経済的デフレと人的パワーの萎縮

2 @ 「九割中流社会」はどこへいった？ 51

誇るべき「社会主義的平等主義的自由経済の国」

3 @ 「MADE IN JAPAN」の時代 52

丈夫で長持ちする中級品が国外での評価

二 途上国産の中級品に囲まれて

1 @ 「家庭用品の途上国産化」 53

平和裏に「アジア共生(豊かさの共有)」に乗り出す

2 @ 途上諸国包囲による「日本途上国化」 56

家庭内の日用品と企業の非正規社員化にみる

3 @ やや高安心の「国産優良品」が再登場 58

「足踏み」して待つ各地各界の熟練技術者

4 @ 「高齢化経済活動」が財政難を克服 60

「成長+成熟」社会を創出する

1 @ 「新・終身雇用」と「新・年功序列」の展開 61

「日本型マネジメント」の新しい企業樹形

2 @ 「窓際・パラレル・キャリア族」の模索 64

定年延長で「高齢化自社製品」が登場

3 @ 「社内ミドル化部門」と「社内シニア化部門」

多重構造による「攻めの再リストアップ」 67

4 @ 「社内長寿社会構想会議」を設置する 68

「超高齢社会」にみあう社内改革の拠点

5 @ 「SWIT会議」による日本型企业指向 70

「新・企業家族主義」が全人標準に

第五章 暮らしの和風回帰

一 「四季と特性」が息づく地域に

1 @ 「唐突な天災」と「温和な天恵」 72

見失っていた「天恵」を活かす地域再生

2 @ 新旧の「双暦」に慣れる 73

旧暦・農暦・和暦の「季節感」を呼びこむ

三 新日本型マネジメント

- 3 @ 暮らしの「和風回帰」 7 3
めぐりくる「地域の四季」を際立たせる
- 4 @ 「二五年百季」の人生 7 4
「一年」とともに「四季」を折節の基準に
- 5 @ 「祭事・歳事・催事」を心待ちする 7 8
迎えて楽しみ、惜しんで送る
- 6 @ 一日を「八方時刻」で暮らす 8 0
三時間ごとに課題を据えて
- 二 品位のある和風の暮らしを創出
- 1 @ 「地域季節和装」で街をゆく 8 1
「季節和装」は各地でモダン変容期にある
- 2 @ 「ローカル・ローカル街着」 8 3
反パリコレの国際ファッション
- 3 @ 「自作旬菜料理」でもてなす 8 4
「厨在丈人」の銘入り出刃一丁
- 4 @ 「口楽文化人」のたまり場 8 6
歌う、しゃべる、食べるの三樂がカラオケ文化
- 5 @ 「四季型（通風）住宅」の工夫 8 7
外向的に折り折りの風を取り入れる
- 6 @ 「二五年百季」の庭 わが庭の公開 9 0
「地域の季節」の移りゆきをみんなで楽しむ
- 第六章 高齢期・居場所
- 一 「エイジング・イン・プレイス」
- 1 @ 高齢期から終末期を「す場所」 9 2
「ふるさと生活圏」再興の原点
- 2 @ 「ふるさとの原風景と現風景」 9 3
ニシキを飾るより地域をつくる仲間として帰る
- 3 @ 「均衡ある国土」と「個性ある地域」 9 6
均衡を基盤に特性を重ねて活性化する
- 4 @ 「特性の息づくわが町」づくり 9 8
みんなで考案する「しくみ」と「特産品」
- 二 「世代間交流」の生き生きした現場
- 1 @ 「家族総出の子・孫育て」 1 0 1

- 地域が担う「少子・高齢化」社会
- 2 @ 「都市型子育て」と「地方型子育て」 104
 地域の高齢者と子どもたちとの交流
- 3 @ 「三世代会議」と「三世代会館」 106
 だれもが暮らしやすい地域づくりの合流点
- 4 @ 「地域シニア会議」 107
 国防意識の「地域からの逆流」は「こ」から
- 三 「地域高齢人材」の養成
- 1 @ 「市立高年大専校」(高齢人材養成センター)
 「地域の歴史をつくる」高齢人材を養成する 111
- 2 @ 「地域カリキュラム」 114
 地域特性を知り活性化に活かす
- 3 @ 「地方大学の多重活用」 115
 子は昼に親は夜に同学親子の談論風発
- 四 中心街は「暮らしの情報源」
- 1 @ 「商店街」はモノと暮らしの情報源 116
 「地域の顔」も店じまいしたシャッター街
- 2 @ 「歩行生活圏」と「車行生活圏」 118
 まちの中心街に集う子どもと高齢者
- 3 @ 「三世代四季型中心街」をめざす 119
 日課でおとずれる「買い物十遊歩空間」
- 第七章 高齢者
- 一 ひとりの「住民」として
- 1 @ 「半熟の高齢者意識」 122
 この一〇年は「高齢者意識」が熟不足
- 2 @ 「高齢者は社会の被扶養者」か 124
 みんなでわたった「霞が関の赤信号」
- 3 @ 「高齢者二五% (四人に一人) 時代」 126
 「二一世紀日本型モデル」をつくる
- 4 @ 「平和団塊の世代」(戦後ツ子) が主役 129
 先進諸国の同世代とともに「平和を体現」
- 5 @ 「社会参加への三つの契機」 130
 「意識と活動ふたつの成熟」がcaき

- 二 ひとりの「市民」として
- 1 @ 「地域シニア生活圏」をつくる 1 3 2
「民主主義の根つき」を確認する
- 2 @ 熟成期を共有する「シニア文化圏」 1 3 5
水玉模様が存在のかたち
- 3 @ 湧出する「第三期のシニア・ステージ」 1 3 8
「シニア」ほかカタカナ表記の団体名
- 三 ひとりの「国民」として
- 1 @ 「総人口減少」と「少子・高齢化社会」 1 4 2
有史以来という「少子・高齢化」
- 2 @ 「高齢化社会」・「高齢社会」・「超高齢社会」 1 4 4
「本格的な長寿社会」へのプロセス
- 3 @ 「日本高齢社会グランドデザイン」の不在 1 4 6
将来の高齢社会の姿を共有するために
- 4 @ 歴代「高齢社会対策担当大臣」の職務延滞 1 4 7
内閣府に「高齢社会対策」担当の太い動線を
- 5 @ お仕着せの「ユニバーサル・デザイン」 1 4 8
- 「長寿時代」の事業を阻害する善意の思考
- 6 @ 「敬老の日」・「老人の日」・「老人週間」 1 5 0
成熟の秋に「長寿社会運動シーズン」
- 四 ひとりの「国際人」として
- 1 @ 「平均寿命世界一」・「健康寿命世界一」 1 5 3
国際的に注目される「日本高齢社会」
- 2 @ 国民性としての「ホスピタリティ」 1 5 4
自然にあふれ出る「おもてなしの心」
- 3 @ 自治体が産み出す「国際貢献」 1 5 6
訪日リピーターに「国土を四倍に見せる法」
- 4 @ 一九九九年「国際高齢者年」がスタート 1 5 8
「高齢者のための五原則」が共通の意識
- 5 @ 全国で催された「国際高齢者年記念事業」 1 6 1
注目される高連協の「高齢者宣言」
- 6 @ 「日本高齢社会」が国際平和の証 1 6 2
二一世紀初頭になすべきわが国の国際貢献
- 7 @ 「平和憲法施行一〇〇年記念」を祝う 1 6 4

「不戦不爭」の明かりを伝えて

8 @ 「**寿終正寝**」(天寿)を全うする 165

「国から地域」へが平和主義の国際性

「参考図書」

堀内正範著

第八章 「**人生九〇年時代**」をこう生きる

一 **成長期・成熟期・結実期それぞれの生き方**

1 @ 人生は「**二五年三期のステージ**」 168

歴史をつくる体現者として

2 @ **五五〜六五歳は「パラレル・ライフ**」 171

高齢期へのキャリアアップで多忙なとき

3 @ **六〇・七〇歳代は「時めき人生**」 172

「自己実現」の成果を得る幸せなとき

4 @ 「**七十古希**」から「**百齡眉寿**」へ 175

「古希」は人生七合目の里程碑

5 @ **八〇・九〇歳代は「意のまま人生**」 176

長命期を「尊厳」とともに生きる

『**丈人のススメ 日本型高齢社会「平和団塊」が国難を救う**』(武田ランダムハウスジャパン刊・二〇一〇年刊)

「丈人」|| 「人生九〇年時代」を意識して、史上初の「三

世代(青少年+中年+高年)多重型社会」を達成する現

役シニア。「支える側の高齢者」をいう。

「丈人力」|| 丈人層が保持する生活力、生命力。大丈夫！

の気概。人生の目標を深化・発展させる力。

「**平和団塊**」|| 平和の証としての「**日本高齢社会**」形成

の中心になる大戦後(一九四六〜五〇年)生まれの一〇

〇〇万人の若き高齢者層。戦後ツ子。